

# 新しい家庭科

ウイ

学校はよみがえり得るか！



刊行物

昭 58.12. 7 和

國立婦人教育會館  
情報圖書室

增刊号



## ○ 発刊のことば ○

友よ

夏のさかり 湘南の海辺で語り合った友よ

あの日 私たちは

「学校は はたしてよみがえり得るのか？」

「家族・家庭の行方は？」

重い課題をかかえて集まったのだった

北海道は室蘭から、九州は鹿児島から

遠来の友の姿もあった

男もいた、女もいた、子どももいた

二泊三日は あまりに短かく

語り尽くせぬ思いを残し

次の年にはこの続きをと約して

もとのくらしにもどった私たち

もとのくらしは 以前のままなのに

何か変わって見えるのは

わがまなこの発する光のせいなのか？

「学校はよみがえり得るか」

その答を

私は、私の中に求めねばならぬことを知った

それは 友よ

あなたとの出会いのおかげだ

ここに送り出す ささやかな誌が

フォーラムにつどった人にも

つどえなかった人にも

明日を紡ぎ出す糧となることを 祈る

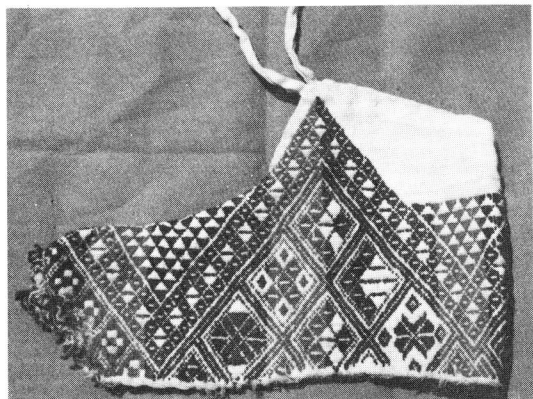
ウイ書房 半田たつ子



小学生も参加して



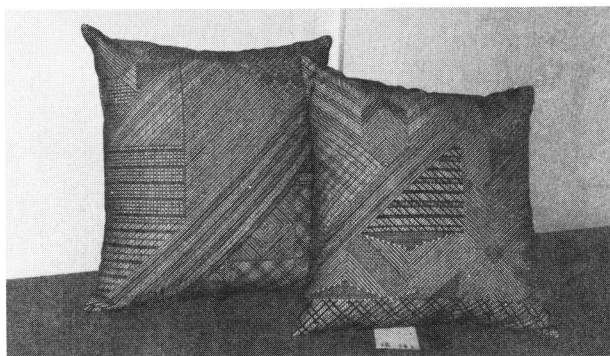
## 〈菱刺しの作品から〉



100年以上前の子どもの足袋（三戸温古館所蔵）



通し刺しのバッグ



通し刺しのクッション





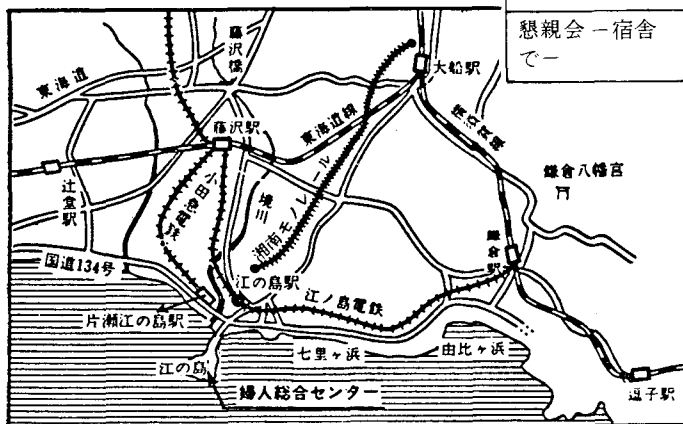
# '83年We夏季フォーラムプログラム

8 / 21(日)		8 / 20(土)		8 / 19(金)			
子育ての 習俗  庄司和晃		学校を 解放しよう  斎藤次郎				9	
						10	
				受 付		11	
				開 会			
				'82年のWeは 何を提起した か		基調 報告	
						12	
昼 食		昼 食		昼 食			
フォーラムで 得たもの、得 られなかった もの  閉 会		学校はよみが えり得るか  司会・長谷川 孝 佐々木 賢 梶原 公子 山崎満喜子		シン ポ ジ ウ ム		1	
						伝統の手仕事 「菱刺し」を 授業に生かす には 八田 愛子	実 習 ・ 実 験 授 業
						休 憩	2
						中学校で「保 育」をどう扱 うか 熊本サークル	3
婦人総合センター		会の活動紹介、 今後の課題		We の 会		4	
						休 憩	
						「原発切抜帖」 話 山上徹二郎	5
							映 画
		懇親会一宿舎 でー				6	

## ★ 会 場 ★

8 / 19. 20 神奈川県立婦人総合センター

8 / 21 若宮荘



新しい家庭科



1983年 増刊号

学校はよみがえり得るか！

\* Weの提起したもの……………長谷川公一 4

\* 学校を開放しよう……………斎藤 次郎 8

講演後の討論から……………20

斎藤次郎さんの講演を聞いて……………25

\* 〈シンポジウム〉学校はよみがえり得るか！

佐々木賢、梶原公子、山崎満喜子(司会)長谷川 孝 26

シンポジウムの討論から……………45

シンポジウムの講師から……………47

✓ \* 子育ての習俗……………庄司 和晃 48

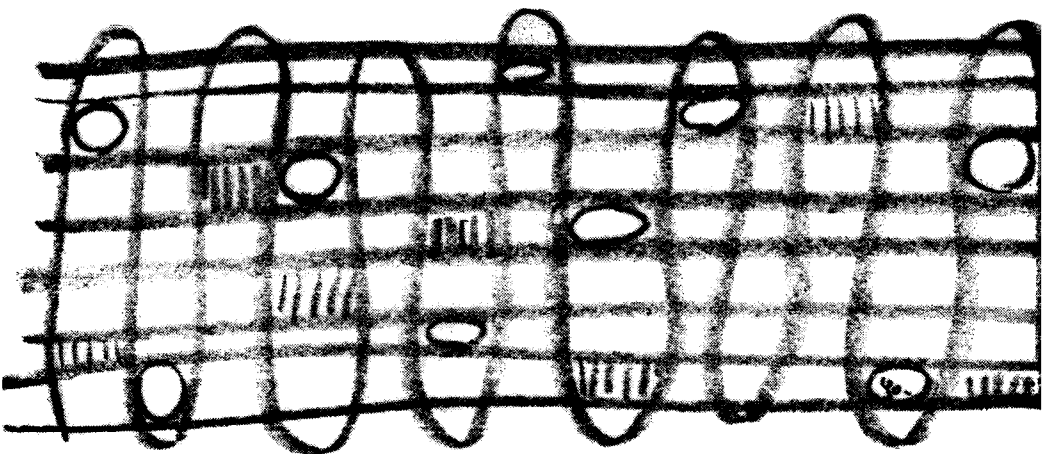
庄司和晃さんの講演を聞いて……………63

\* 実習・実験授業

伝統の手仕事「菱刺し」を授業に生かすには…八田 愛子 64

菱刺しの授業を受けて……………68

○「Weの会」のつどい 102 ○Weの輪をひろげよう！ あなたも「Weの会」会員に 103  
○We、EDITOR'S NOTE 112



中学校で「保育」をどう扱うか……………中務 恵美 70

授業後の話し合い、意見、感想……………76

生徒になつてみて……………81

保育の授業を参観して……………82

＊映画「原発切抜帖」を作つて……………山上徹二郎 87

日本の原子力施設……………90

世界の原子力発電所……………92

山上徹二郎さんのお話を聞いて……………94

＊〈総括討論〉フォーラムで得たもの……………95

得られなかったもの……………95

フォーラムと子どもの参加をめぐつて……………98

○発行のことば——半田たつ子  
○83年We夏季フォーラムプログラム

表紙デザイン 加藤由美子

口絵、本文中写真・清水能親／長谷川公一  
目次イラスト・馬場洋子 本文イラスト・野中浩一／山口墨子

○懇親会—宿舎で—〈若宮荘〉104 〈ニュー向洋〉105  
○Weは新しい出会いを得て—参加者の感想 106





## Weの提起したもの

長谷川 公 一

「**軽・薄・短・小**」のなかの**We**  
『新しい家庭科—We』が創刊された昨年春からことしにかけて、たくさんさんの雑誌がやつぎばやに創刊されました。「**軽・薄・短・小**」軽くて薄くて短かくて小さいものが売れるんだそうです。薄い雑誌の双壁が『We』と『フォーカス』でしょう。のぞき趣味の大きな写真を皮肉たつぷりの文章が解説する『フォーカス』に対して、気まじめ一方で文字ばかりの『We』、こちらの方は重くて大きな問題提起をしています。『新しい家庭科—We』は、こんな「**軽・薄・短・小**」の時代風潮のなかで、何を提起してきたのでしょうか。『We』の個性はどこにあるのでしょうか。

わたしたちの「**We**武蔵野の会」では、リポーターをきめて読書会をやっています。読み方は十人十色、読書会は読者のオーケストラ、ちよつと大げさですがそんな思いがしています。きょうは、大きな読書会のつもりです。まずわたしがリポーター役をとめます。続いてみなさんから、リポートへの批判、わたしはこんな風に読みました、うちの読者会ではこんな点が問題になりました、とお話しいただければと思います。

『We』の誌面は、特集、「新しい家庭科を創るために」、連載、読者の発言・投稿と四つの柱からなっています。特集と家庭科の実践報告を中心にお話しいたします。

## 「自立」と「共に生きる」

創刊号の宮淑子さん、ますのきよしさんの問題提起にはじまって、「共に生きる」(六月号)、「人間の自立とは」(一〇月号)、「家庭・家族」(二月号)、「男と女の新しいかわり」(一月号)などの特集テーマの基調音をなしているのは、「自立と共生」という問題意識ではないでしょうか。「新しい家庭科」の可能性を軸とした学校の再生、教育の再生という問題意識とともに、「自立と共生」はこれまでの『We』の二大テーマといえましょう。

『自立』というテーマが、『共に生きる』というもう一つの大切なテーマと補い合うのでなければ、強者の論理に陥る」(創刊号二三頁)とますのさんは提起しています。精神の自立、経済の自立、生活技術の自立と、人間の自立に三つの側面があることはよく指摘されますが、自立についての多くの議論は、自立を依存との対で考え、「個の自立」を中心に「依存からの自立」を問題にしてきたように思います。それに対して『We』の問題意識をなしているのは、「共同性への自立」、「共に生きることへ向かつての自立」であり、自立感覚と、共に生きる感覚との育みあいではないでしょうか。

一方、家族や職場や学校といった具体的な人間関係、社会

## 対関係と家族

生活の場では、自立と共生と依存とは、まことに微妙で複雑な力学をなしているようにも思われます。

「ひとり歩きた男と女」がつくる「風通しのいい関係」という、創刊号の宮さんの提起は大きな反響をよびました。「二人が子供をもたないこととひきかえにやっと手にしているもののように思え」る(一二月号二五頁)という批判に代表される子育てにどうかかわるのかという疑問、家族生活の中では風通しのいい関係はありえないのかという疑問、八三年五月号の「産む・産まぬ……」まで、問題は大きくふくらんでいきました。

宮さんの提起のなかで見落とされがちなのは、生活のサイクルのかけ離れたカップルが「無理のない、自然な寄りそい方を選んだらこうなった」(創刊号一七頁)という点です。家族をめぐる規範が意外に根深いところでひとりひとりととらえていることは、宮さんの「シングル感覚」への感覚的反発にもあらわれています。どのような対関係を選びとり、家族関係を育んでいくのか、日々の具体的な人間関係は、わたしたちの自立感覚と共生感覚との試金石のようにも思われます。

「家庭科の男女共修をすすめる会」が発足してちょうど一〇年になるそうですが、一〇年前と現在との家庭科をめぐる状況の最も大きな違いは、家庭科がその中で市民権をえようと



していた学校教育そのもののゆらぎ、また家庭科が教えようとしていた家族像のゆらぎではないでしょうか。

「新しい家庭科」は宮さんの提起をどう受けとめるのでしょうか、家族や対関係をどのように教えるのでしょうか。「新しい家庭科」が学校をよみがえらせるために何をなしているのかとともに『We』の大きな課題です。

八二年度の「新しい家庭科を創るために」では、小・中・高がおもしろく、大学は魅力にとぼしかったように思います。

### 教師のお面をぬいて

小学校の名取弘文さんの報告からは、授業のなかの子どもたちの姿が見えてきます。教師というお面をぬいて、個人と個人との関係を創りあげたいという名取さんと、子どもたちとの個性のぶつかりあいは何よりも魅力的です。一〇月号の「変身ベルトづくり」をはじめ、自由で奔放な発想にみちています。

### 地域の生活文化のなかから

中学校の熊本県の家庭科サークルの先生方による報告は、地域の生活文化の歴史と関連づけて教えようとする点が特色です。熊本弁による骨太な授業風景のなかでも、炊飯（六月号）、植物性脂肪（七月号）、洗たく（一〇月、十一月号）の学習がとくに印象的でした。郡部の先生方が多いようですが、山形県の郡部の中学に学んだわたしには、とりわけ教育条件に恵まれないとされてきた郡部を中心に、サークルをとおして一つの教育文化が花さきつつあることが心強く感じられます。

### 考えさせる家庭科

高校の寺島紘子さんの授業報告には、文字どおりわが身を切るような迫力があります。問題提起し、考えさせる家庭科の到達点を示しているのではないのでしょうか。「性と女性解放」（五月、六月号）、「子どもの人権」（七月号）、「障害者の人権」（八・九月号）、「家族」（一月号）では、つきつけられた問題の重さが、「進学校のおりこうさんとして無難に生きてきたと思っていた」（七月号三五頁）生徒たちの心理的葛藤、自己抑圧の構造をあらわにしています。

どの報告にも共通しているのは、①人と人とのコミュニケーションとして授業を展開しよう、②教材と自分たちの現実



の生活とのつながりを考えさせようとする姿勢です。「新しい家庭科」の可能性は、子どもたちの現実の生活に対する教科としての問題提起力にある、この思いを一層深くします。

#### 地域の視角を

「学校を個々人の生活や地域から切り離れた空間にしてしまつてはいけない」(八・九月号二三頁)、この名取さんの提起は、学校教育再生の手がかりとして、『We』全体の問題意識でもありましよう。しかし、誌面全体をとおして、地域社会が学校や家庭、人々のくらしとどうかかわっているのか、地域の視角がもう一つ稀薄だったのではないか、そんな印象があります。現実のわたしたちの生活から、地域とのかかわりが稀薄化しつつあるからでしょうか。

地域の視角を今後の課題として、報告の結びといたします。

\*

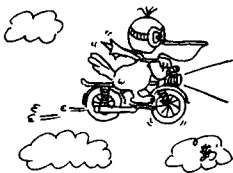
\*

報告のあとの会場からの発言には教えられることが多くありました。すべてをご紹介できないのが残念です。報告者にとつて、とくに示唆的だったのは、熊本の家庭科サークルのリーダーでもある桑畑美沙子さんの次の指摘です。「小中高のWeの家庭科実践によって、新たに生まれた視点が二つあるのではないだろうか。第一は労働体験学習によって子ども

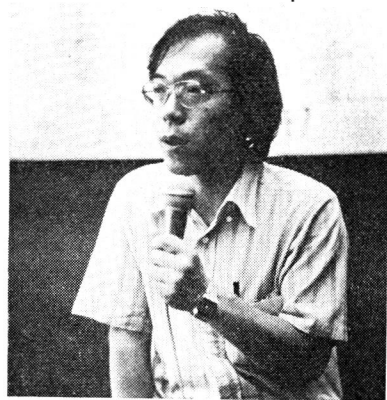
たちに食品などの本来のすがたを体験させ、現状への批判の力をつける視点であり、第二は、さらに子ども自分に、何ができるかを考えさせ、母親に合成洗剤から石けんに切りかえさせるなど、現状をかえていく行動のできる子どもを育てている点であると思います。」

なお、本稿は、基本的な論旨はそのままに、当日の基調報告をもとに、新たに稿をおこしたものであることをおこわりたいします。

(Weの会世話人)



# 学校を 解放しよう



斎藤 次郎

当日は、体調をくずしておられたのに  
もかわらず、容赦ないハイテンポのお  
話で、会場の人々の心をかきまわし、圧  
倒して下さいました。固い机に座られて  
の講演でした。どなたかがイスを準備さ  
れたところ、「だってそれじゃ見えない  
でしょ」とおっしゃった斎藤さんに、親  
しみを感じました。それでは早速講演の  
中身に入りたいと思います。

## 〈学校を開放すること——立場交換のもつ意味〉

多くの話は、全然体系的ではないし、教育学とか心理学と  
いったものを系統的に勉強したこともないので、学校の中の  
ことには触れないようにして、初めのうちは学校の外のこと  
を考えた書きだすけれど、状況がそういうわがま  
まを許さなくなりまして、学校の中のこと書かなくてはな  
らなくなりました。

教育とは何かを考えるときに、不思議に思いますのは、い  
つも教育する側の問題としてのみ議論が立てられるというこ  
とです。教えられる側の子どもが、例えば授業というものを  
どういうふうに感じ、考えているのか、学校というものをど  
う思っているのか、ということ議論することが教育学全体

の中で非常に貧しいということが、ぼくにとつてはかなり大きな苛立ちの種なのです。

「学校を解放しよう」と言うとき、何から何を解放しようというのか、ということが必ずしも明確ではありませんが、多くの個人的な関心で言えば、「抑圧と管理の尖兵たる教師から、子どもたちを解放しよう」というふうに、まず考えたい。しかし、そのことをどうやって進めていくかという時に、逆説的な言い方になりますが、学校の先生に手伝ってもらわなくてはならないことがあるのです。つまり、みんなで牢破りをしたい、監獄を解放して囚人たちを外に出したい、そのためにはともかく、その獄卒を買収しなければならぬ、比喩的に言えば、そんな気持なのです。それで、みなさんのところに話をさせてもらいに来たわけです。一人一人の先生に「ちがう感じ」になってもらうということが、ぼくの基本的な願いなんです。

きのうの保育の実験授業で、先生が生徒の役をやってみると、いつまでも先生的要素が残っていて、なかなかうまくいかなかった——立場の交換は難しい、といった話を聞きまして。でも、生徒の役をやった人が言われた「つまらない」と思ったんだけど「先生、つまらないよ」と言えなかった。プリントに答が書いてあったけど「先生これいらないよ、皆で考えようよ」とは、やっぱり言えなかった。最後に文章書くとき

き何書いていいかわかんなかったけど、とにかく書いた」と言うのは、いかにも子どもらしいじゃないですか。つまり、それが今の子どもたちの現状なのです。

もちろん中には断固として先生に反撃する子もいるでしょうし、勇気を奮いおこして質問する子どももいるでしょう。しかし、大半の子どもは正に先生が扮したきのうの子どものように、先生のメンツもあれば立場もあるんだということを了解しつつ、自分たちの心の中にあるものを吐き出せないでいる。あるいは、もっと強権的な教師にぶつかってしまった子どもは、そうすることが目に見えて自分の不利益をまねくということを、全体の中で理解しているためにそうできないでいる。そういう事情があるわけです。そういう認識に立てば、立場の交換は難しいとは言え、教師のおかれている状況と子どものおかれている状況とが全く同じである以上、そういう同じ状況での入れ替えそのものが無意味だったのだ、とぼくは思うんです。教師が子どもにとか、子どもが教師にとか、というふうに立場交換するという試みは、言ってみれば二つの関係を包んでいる状況を破るために、必要だったわけでしょう。つまり、先生という立場を相対化するために生徒の役をやることに意味があったはずなのですが、実際やってみると一つの卵の中の白味と黄身みたいな入れ替わり方しかできなくて、からの外になかなか出てこれないという、



そこところが、また先生らしいと言えは言えるかなあと思うんです。理屈っぽく言えば、生徒一般に変身しようとしても、からの外には出られない、ということですよ。自分を脱するという契機がなければ、ね。

例えば、人形劇などを見せますと、子どもはかなり熱狂しますね。七匹の子ヤギなんかで、オオカミが戸を叩くと「ダメだよ。オオカミだよ」と言って教えたりして劇の中に没入していき、会場が騒然としたりするわけです。そういう子どもたちが、劇が終わると舞台にかけ寄り人形の本体を見ようとする。そのしくみをあばこうとする。子どもたちは、舞台上で繰り広げられる劇の中のスターである人形に憧れを感じつつ、心の半分ではただの人形にすぎないということを理解できている。人形には、観客席から観た時のスターとしての輝きと同時に、繰られる人形のもつ矮小性との両面があって、そういう関係が人形劇の劇的空間に独特の輝きをそえているという気がするんですね。観客席から舞台を観るときには「わあすごい」という賛嘆の気持がある。だけど同時に「たかが人形じゃないか」というさげすみの感情がある。そういうものが両義的に機能していくとき初めて劇的な緊張感が舞台と観客の間に出来るわけですね。

元禄歌舞伎もそうだったらしいですよ。都市にできた常設小屋で眩いばかりにきらびやかな舞台が繰り広げられるのを

観客席から観ると、これは賛嘆以外の何物でもない。けど同時に舞台で演じているスターたちは河原乞食なんです。正業につくことを排除された人たちが、何も生産しない代わりに舞台空間で、もう一つの世界を演じて見せる。正業についている町人の意識の中にはたかが河原乞食というさげすみの感情があったはずですよ。そういう感情をもちながらもなお、いま目の前で繰り広げられる世界は、きらめくばかりの世界であり、自分たちの現実には成し得ない恋の成就であり、というふうなことで恍惚となる。そういうった両義的な、さげすみと賞賛がないまぜになって、劇的空間をつくりあげていく、というのが近世演劇のエネルギーだったんじゃないかとぼくは思うんです。

学校もそれじゃないかな、という気がするんです。先生は賞賛されなければいけない。子どもたちにとって「あの先生はたいしたもんだ。あの先生の話聞きたい」といった賞賛の気持がもてることも必要でしょう。しかし、賞賛だけではどうにもならないのであって、どこかで「たかが先公」という、そういうふうな感情が交叉した時、その時はじめて、その子どもと教師との関係が生き生きしたものになる。立場交換が成り立ち得るのではないかと思うのです。ゴッコとして、先生が生徒の代わりになってやってみたいといったことは、実はどうでもいいんです。教師は教師として教え続け、

生徒は生徒として教えられ続けるという関係を貫徹しながら、一つ一つのシーンで、一つ一つの授業経験の中で、小さな転換が起こっていくというのが本当に値打ちのあることなのでしよう。

しかし、教師が、子どもから賞賛され尊敬されるものという、そういう固定的な立場に居座っている限り、またそういう所に自分が居ることに快感を覚えている限り、転換は起こり得ないでしょう。授業中、だれかが発表した時に、実は先生の知らないことを子どもが言っていたりする。しかし「そういう子どもがいてくれたお陰で、ほんとに私も助かった」と教師がつくづく実感しても誰も怪しまないといった関係は、教師が自分の場所に居すわっている限りあり得ないと思うんです。子どもが教師を尊敬するばかりになったらおしまい、どこかにさげすみの感情というふうなものがあることが、ぼくは教育というコミュニケーション活動を活性化させていく、かなり重要なポイントじゃないかなという気がするんです。

登校拒否というのは一種の病気だというふうに言われている、正常なら必ず学校に来るものという、そういう約束ごとの上で学校の教師の仕事は成り立っています。どんなことをやっても子どもは来る、来なければそれは子どもの方に問題がある、というような世界ですと、どうしてもさっき言った

ような文脈での「さげすみ」的な教師の要素は危うくならざるを得ないだろうと思うんです。

#### 〈子どもに媚びることと子どもを解放すること〉

八年間やってきた塾の経験からお話ししますと、塾というのはそういう意味では学校の先生に比べてずっと楽なんです。どうして楽かと言うと、つまり授業が面白くなければ次の週から子どもは来なくなるからです。塾に行ってみると子どもが一人も来ていない、子どもに捨てられたと気がつく、といった夢をぼくは度々見せてもらったんですが、そういう緊張感というのは、なかなかのものなんです。

塾にももちろんいろいろあり、授業料を一括納入で初めにたくさんもらっちゃうという塾もありますが、なんとかまともに行っている塾というのは月謝袋を渡しておいて、子どもが月に一回お金を持つて来る、そういう関係で成り立っています。これはいい塾と悪い塾の見分け方としてもかなり重要なところで、子どもが月謝袋を持つて行くことは、教える者と子どもの関係をわりとうまくつくり上げる一つの条件だと思っんです。つまり、お金を渡すってことはお客さんになるわけでしょう。ぼくの方は「ありがとう」と言ってそれをもたらす。授業中、ぼくが黒板に何か書いていたりする時に「先生、月謝」と言ってカバンから出したりする。たいてい

授業の内容がつまらなくなったりした時に、「そうだ。今日は月謝を持って来たんだ」ということを思い出すんですね。

「今、授業中だからそこへ置いて」と言うのと、もちろん気の弱い子は置いてくれますが、面白くない気持ちになってしまふ。何をしている時でも、その子のそばへかけ寄って「ありがとう!」と言ってそれをもらわなければいけないんです。子どもにとつて、ぼくに對してある種の優位性を示す。一月一回の楽しみなわけですからね。

そういう意味で言うと、学校の先生は月給がどこから来るのかと言うことがあまりリアルに分からない。子どもが集金して、「先生、今月はあまり多くないよ。胸に手をあててみればわかるだろう」なんていうふうに言つて給料を渡すようになる、これはかなりの迫力だろうという気がするんですね。塾としてはどうするかと言うと、子どもにゴキゲンよくしてもらふしかないわけで、ぼくの塾では卑屈の限りを尽くしたと周りで言われたんですが、おやつは出すわの大サービス大会を八年間やって来たわけです。このことはぼくのまちは大変評判を落しました。しかし、ぼくがなぜおやつをやるかと言うと、おやつをやることもかく機嫌がよくなるわけです。ニコツと笑ってくれる。その顔が見たいんです。機嫌の悪い子は勉強しないし、ぼくのことを受け入れようとしな。機嫌の悪い時は、心が塞つてしまつて、ぼくの言う

ことに心を開いたり、算数の問題にチャレンジしてみようとか、そんなけなげな気持は起こらないんです。ぼくが子どもの気持を不機嫌にさせて、それで後半の授業がメチャメチャになつたというのならあきらめもつくのですけど、全くそうじゃなくて、塾に來た時からもう機嫌が悪いという子も必ずいます。

子どものおかれている状況が、いまはそうニコニコやつてられるような状態じゃないですから、学校や家でいやなことがあつたりすれば、やはり何となく子どもの調子が狂つていくということがあるわけです。そうすると、子どもが一生懸命勉強に取り組もうとしてもうまくいかないことになるんです。そういう気持をそぐような憂うつとか、苛立ちとかに、いつも子どもはぶつかっていると考へて、まあ間違いが無い時代じゃないかと思うんですね。子どもは、そういった失地を回復していく場所を求めているんだらうと思います。ぼくがおやつをやるのは、肉マン一個で買収できる程度のいたみなら、そこで決着をつけてもらつて一回ニコツと笑つてもらいたいからなんです。そうすることによって子どもとぼくとの関係がはじめて生きてくると思うんです。

しかし、子どもに媚びて何かしてやるというふうなことを、子どもを一旦解放した上で関係をつくり始めるといふことは、よく似ていて違いがわかりにくいんですね。もしか



するとぼくはこうやって子どもの人気取りをしているんじゃないか、危いんじゃないかと思いつけていることが唯一つのブレーキなわけで、ぼくが決して人気取りなんかでやっているのではなく、子どもの気持を開くためののだと言いきってしまうと、多分どこかで転落してしまう。媚びてしまう。そういうことになるのではないかと思うのです。このところは非常に微妙なところですね。

こういった関係づくりは学校の中でも可能だろうと思うんです。「これは少し子どもの言いなりになりすぎているのかな」という思いと、「いや、そうじゃないんだ。こうするところが子どもと、教師としての大人との関係を正常にもどすことになるんじゃないか」という思いとの間で、絶えずいきつてもどりつする。そのあたりでちょうどいいんじゃないかなという気がするんです。

これからは、教師としてよりよくなるという努力はもうやめたらどうでしょう。そういう努力はいままでずっとして来たわけでしょう。それはもう十分なので、下がりっこないんですから。今度はもつと、お客商売の商人の側にずれていった方がいいんじゃないかという気がするんです。森毅さんという、京都の数学の先生は、「教師というのは、チンドン屋風にやった方がいいんじゃないかな」と言うんです。チンドン屋のうしろには、子どもがついていくでしょう。子どもに

ついて来られても仕事の上では特別意味なんかないのに、それでもやっぱり子どもがついていかなければいけないような何とも言えない気分をかもしていますよね。そういう職業として、学校の先生があればいいと思うんです。子どもはついていくと偏差値がよくなるとか、点数がよくなるとか、そんなことは何もないのに、それでもついていきたくなくという、そういう関係が大人と子どもの解放された関係ではないかと思うんです。

〈戸塚ヨットスクール批判の視角を民衆がなぜ共有できないのか〉

戸塚ヨットスクールのことを少し話したいと思います。戸塚ヨットスクールはひどいところだという最初の衝撃が終わってしまえば、何かこう、いろんなバランスがとられて来ました。「ああいうのもなくちゃ困るんじゃないか」とか、「やり方がひどかったが、あそこ心理学者とか医者がちゃんとついていれば、ああいうヨット訓練にも意味があるのではないか」といった議論もあったりして、いろんな意見がいろんなふうに出て来て、結局のところ何が何だかわからなくしてしまおうという構造がマスコミにはあると思うんですね。論調そのものが、短期間の間に微妙に変わって来ており、今やもう「戸塚宏を弾劾する」というような言い方は終わっ

た、というふうな感じがありますね。完全黙秘を断固守り通し、まだ獄中から『月刊宝石』に原稿を寄せる勤勉さを見ると、「やっぱり本当に信念があるんじゃないか。あの人の言うことにも耳を傾けるべき要素があるんじゃないか」というふうなことが、フツとまた出て来かねないような感じで困ったものだと思っているんですが。

ただ、ここでやはり考えて見なければならぬのは、社会生活の中でうまく適応できないで苛立ち、混乱し、家庭内暴力だとか非行だとかいった行為に走ってしまった子ども、言ってみれば親の手に負えない子どもが出てきたということです。そういう子どもたちをどうしたらいいかわからない。そこで、そういう子どもたちを集めて訓練し、まっとうな人間にもどしてくれる装置として、戸塚ジュニアヨットスクールというのが位置づけられて来たわけですね。そこで、戸塚宏は胸を張っておっしゃるわけ。「評論家が」お前たちのやっていることはよくない」と言うけれども、それじゃお前たちは、荒れ狂った子どもたちを一人でも治したことがあるのか」と。そうすると評論家というのは意気地がないから、うつ向いてしまう。治したなんて実績がないわけですから。それで結局、何となく世論が恫喝されてしまったという気がするんです。

ぼくは、もし面と向かって治したことがあるかと聞かれた

ら、「ないよ。それでどうしたの」と言うしかないと思っています。どうしてかと言いますと、「治す」「立ち直らせる」ということが、病氣にかかった子どもに薬を処方して、どうすべきかのノウハウを教え、治癒させる、という意味で語られるわけですね。そういう経過が、「普通の病氣が治る」ということになっているわけですが、そういう普通の病氣が治るといふときでさえ、治す主体はお医者さんではなくて患者自身なわけです。ぼくは、医者に治してもらおう、という考えにはかなり危ういところがあると思う。医者に、どのようにすべきかを学びつつ、やはり自分で病氣と闘っていくという契機がなかったら、なかなか病氣をやっつけられないだろうという気がするんです。だけど、病氣になったら医者に行って注射一本打って治してもらおう、そういう関係が近代医療体制の発達と普及の中で一般化して来て、同時に医者という専門が特権的役割を担うようになったというわけですね。そのの、いわば心理的な側面でのアナロジーとして、戸塚ヨットスクールみたいなものを考えることができると思うんです。

親としてももうどうにも手に負えない、親が死ぬか子が死ぬかのどちらかだということまで来た子どもに対して、あなたたちは今何ができるかという時に、道がない。戸塚ヨットスクールというのは間違っているかもしれないけど、では他

にどうしたらいいか。例えば今日、誰かのところにそういう相談の電話がかかって来て、「どうしたらいいんですか」と聞かれたときに何も思いつかない。そういうせっぱつまった困難が戸塚ヨットスクールを支えている。「あのやり方は問題があるけれども、もう少し改善すれば、国立の、手に負えない子矯正施設『みたいなものが出来ないだろうか』——そういうふうなことが、民衆的期待としてあるわけで、それが、戸塚ヨットスクール批判を民衆の視点として明確にできなかった最大の問題ではなかったかという気がするんです。

よく、スパルタ式か放任主義かみたいなことが言われますね。どこの学校でも、もうじき戸塚という感じの先生がたいいてい一人か二人かいて、それが学校の治安を維持しているようです。

ぼくは、一つのことを教えるのに、それについてとことん子どもの考えを聞き、子どもの気持を汲み、あるいはその考えの誤っている部分や疑問の部分を訂正しながら、という果てしない話し合いの中から、子どもの成長する力を伸ばし、生かし、強めていくという教育の仕方と、もう一つ、同じことを教えるのにスパルタ式になぐってでも鼓膜を破ってでも、教える側が決めた枠組みの中に子どもを押し込めていく仕方と二通りあると考えるのは、おかしいんじゃないかという気がするんです。それは教えるテーマ、内容の二種類だ

と思うんです。

つまり、スパルタ教育でしか教えられないのは、ある種のテーマに限られているということです。自分を殺すことによって自分以外の価値観とか、体制の要求とかに身を任せていくかということを教えるためには、そのことをとことん話しあうという教育は成り立たないと思うんです。例えば、四〇年前の教育で言えば、「我々一人一人は国があるから国民なんだ。国が亡びたらどうにもならないんだから、国のために命を捨てるのが国民として生きていくことの基本なんだ」ということを教えたわけですが、そういう教育のためには、子どもと、とことん話し合って、子どもに「君、どう思う?」「そうやって死ぬの、こわくないと思う?」とかいった話をする中から、いろんな討論を巻き起こしつつ「みんなで国のために死のう」という結論を導くのは不可能だろうと思うんです。つまり、自分の要求とか、自分の願いとかをいかにして殺すかというふうなことを教えるには、これはもうスパルタ教育しかない。

ぼくは、教育の内容は正しいけれども方法がまちがっているとか、方法は正しいけれども内容がおかしいとかいうことは、本来的にはあり得ないという気がするんです。ですから、子どもに暴力を加えることによって子どもを正しい方向に導こうとすると考える人があるとすれば、その人の正しいさ

に問題がある。その人が正しいと思っっている方向にこそ問題がある。そういう意味でばくは、方法と内容ということの相互関係をきちんと押さえていかなければいけないと思うんです。

学校の中で「子どもというのはビシビシやらなければいけない。このごろしめが足りないんじゃないか」などと言って来るような教師がいたときに、「方法が違う」というふうに考えるのではなく、まさに教育理念が違ふんだというレベルで闘っていかないと、どうにもならないだろうと思うんですね。子どもの意志とか願いとかをまず否定するところから始まる教育は、どんなに合理的なシステムでやろうと、全部それは我々の敵になる教育の仕方だと思えます。ぼくたちはそういう意味で、とことん子どもと共に考えあつていき、子どもによつて教える側が相対化されることを些かもおそれずに、むしろそのことによつて自分がパワーアップするということ、確信のもとでやりぬいていく教育を実行しなければならぬ。そういう方法と内容が一つの教室を解放することになるし、学校を解放することになるだろうと思うんです。そういう意味でいえば、戸塚ヨットスクールというのは決して対岸の火事ではなくて、皆さんの喉元につきつけられているもう一つの教育のシステムなわけですから、これとの対決は、それはもうどんなに穏やかな人でも今後避けられないだろうと

いう気がするんですね。

#### 〈学校解放の闘いはまず自己解放から〉

それと、ぼくは学校解放をどう押し進めていくかということに、いくつかの心配事があるんです。学校を解放するのは、明白に日本の文部省の方法と、各都道府県の教育委員会の方法と、あるいは管理職の方法とぼくたちがはつきりと敵対することなんです。権力の側が教師を管理しつつ押し進めようとしている一切の方法と闘うことなしには、学校を解放するということはありません。校長と仲良くしながら学校を解放するなんてことは本来的にはあり得ないということとを基本的に前提にしているんです。ここは労働運動でいえば、企業内抵抗をどうすればいいかということ話を話す場としてあるわけですよ。ですから、フラクション会議として、どうやって対抗の戦略・戦術をつくっていくかという、そういう水準の問題を避けることはできない。このような大人数では構成メンバーもよくわからないし、話のきめ細かさという点では限界があるわけで、これからは極めて小規模に、同志的結合を保ちつつ、どういうことがどこでできるかということ、を、ゲリラ的に検討し、展開していかなくてはならない。そういう時期に来ていると思います。平和な時代の善良な教師として生きていくことの延長線上に学校解放の

戦士となることをつぎ木してほしくないんです。そんなことでラチのあくような事態では全くない。免職へと追いつめられる可能性がほんの少しあるということをやはり前提に、しかし99%は大丈夫だといいつつ何ができるかという、そのところを考へるの軸として持つていくなくてはだめだという気がするんです。学校の中の一員である自分をまずどう解放していくのかという問題として、この問題を考へていかないといけないだろうと思うんです。

今まで、できるところからまず第一歩というふうな運動が流行っていたと思うんですね。大体のところ、できるところから始めた運動はたいいてい一歩半のところ終わるんですね。何もやらなければ何もやらなかったという自責の念だけ残るからまだいいのですが、一歩半位はやりますから、何か少しやったという気分が味わえる。で、やったけれどもたいしたことじゃない。たかだか一歩半だ。うまくいかなければ結局は人のせいにする。「だって子どもがあれじゃ仕方がない」。「いくら教師が頑張ったって今の教育体制を変えるわけにはいかない」。みたいなことで、そうやって言い訳の種を捜す気になれば、二ダースでも三ダースでも見つかりますから、自分たちのやったことがほんの少しでも仕方がないという自分を慰撫する道は無数にあるわけです。だから、同じやるのならできるところからじゃなくて、一番やりたいと

ころから、一番大切なところからやっていくときめた方がいいんじゃないか、という気がするんですね。

ただ、ぼくは学校の中の教師たちの一日の生活がどうなっているのか、どういうサイクルで一年が過ぎるのか、今一つはつきりとわからない。それで、学校の外にいる親の側から例を出してみます。例えば非行防止というようなことが課題になると、PTAがまず考へつくことはポルノ雑誌の撤去運動といったことなんです。これは「できるところから第一歩」の最たるものです。ところが市内十数か所のポルノ自動販売機を三か所撤去できたからといって、子どもたちの非行がどうなったかとは何の関係もない。しかも何もやらなければ、「今年はこの問題が起きました」というような報告に対して、自分たちは何もやらなかったという、ちょっとした自己嫌悪に陥るわけですが、それさえないのです。「とにかく我々はやるべきことをやったから、それでもなお非行に走った子どもはもう仕方がない」という感じがあるんです。

ポルノ雑誌の自動販売機撤去の次に思いつくのはパトロールです。親が二人連れで子どもたちがたむろする場所に時間を決めて出掛けていって、子どもに注意したりするんだけど、今日びの子どもはおばさんが何か言ったくらいで、恐れ入りませんから、「うるせえな。関係ねえだろ!」と応える

はずです。そうすると困ってしまふ。「ちっとも言うことを聞いてくれない」という報告があつたあと、次は「腕章をつけていこう」といった話になるわけです。

しかし、子どもが「おばさん、関係ねえだろ！」と言つた正にその時、問題は発生したわけでしょう。「それは違ふ」と考える大人と、「自分のもらったお金でゲームセンターで何をしようか勝手じゃないか。そんなこと勝手に来てガタガタ言わないでくれ。もう気分が乱れた」とうそぶいている子どもと、その時はじめて、交渉を持ったのです。そのところからどうしたらいいか、何ができるかということを考えはじめなくてはならない。そこで、「それはないよ」というふうに座りこんで話し合っていくしかない。そういうところから接点になつて、そこから何かが始まるわけです。ところができるところから始めるといふ人は、そこから先がわからない。そこから先が、うつつとうしくなる。そこで「この腕章が目に入らぬか」といふふうに言つて、いわば全体の権力の構造の中で自分はその尖兵である、というかわり方を選んじやうんです。「私の声は校長先生の声であり、〇〇警察署長の声である」。そういうふうな体系の中に自分を位置づけて、子どもに禁止や強制をやらうとする。そういうやり方は、子どもとの話し合いの中から新しい別の道を捜していこうとする方向とは全く違ふ。「今すぐ見つからなくても、新しい道

を捜していくために、おばさんや友達を動員してやつていくことはできないだろうか」。そういうことを通して、子どもの居場所を確保していき、関係を作っていく。そういうことが、ここで課題化されたはずなのに、それを全部否定してしまふのです。これが「できるところから」派の正体です。

教師だつてやつぱり、学校の代紋を背負っているわけですよ。学校の代紋があるから、子どもたちは先生に対して恐れたり、尊敬の念を払ったり、時には子どもの方から媚びたりといったことをする。でも、教師ももっと自分を解放するために、その代紋を脱ぎ捨てて、子どもたちと関係をつくり直していくしかないと思ふんです。

教師が学校をしようっている間は、教師と子どもたちの間に、解放された関係はできないし、また学校解放もあり得ないと思ふんです。

教師が、自分を解放していくためにまず大切だと思ふのは、「ここで自分は頑張らなかつた」ということを確認していくことだと思ふんです。自分がいけなかつたということがわかつているということは、少なくとも次の時には一歩手前から用意できるし、巻きこまれてしまわぬ用意ができるじやないですか。これは「落チ込ム」話のように見えて、実は自分の自由を確保していく第一歩なんです。教師が教室で自分の弱さをさらし、弱い自分とたたかう意志があることを示

していくことが、自分の自由を示すことであり、子どもに、どう生きたらよいかの理解を促すことになるんだと思うんです。

親でも先生でも、個人的に話すときだと、こちらの言うことに對して「そうですね」と同感を示す。にもかかわらず、全体のPTAという場で話すときになると、先生も親たちも、みんな公然と裏切ります。ぼくはそういう先生のそばまで行って「この間、そうだねって言ったでしょう。あれをいまここで言ってるよ」と言いたいほどでした。でも何にも言ってくれない。帰りにはみんな傷ついたぼくをいたわってくれるけれども、PTAの会場で声を出して一緒に言ってくれろという親もいませんでした。

思っていることも表現せず、裏切っても口を閉ざし、そういうふうにして、自分の人間性、自分の誠実さをおとしめていくことで、自分が腐っていくことを何よりも気にしてほしいと思うんです。自分を解放していかないと、この先、名前と来歴をお互いに明かしつつ運動を進めていくという時点にまでもっていきことはできないと思うんです。少なくとも、自分は裏切りを犯したのだ、という辛さで自分を支えて欲しい。裏切らないことはもちろん大切だけど、裏切ったとき、そこからたたかいはじまるというふうに自覚してほしいんです。

最後に地域社会の重要性について話してみたいと思います。地域社会は、学校教育をスムーズに楽しく、生き生きと運営する上で協力してもらえぬ要素を持っているんですね。しかし、公的ルートにおいてはそういう役立ち方は実現できないようになってきてしまいました。

大阪の吹田市の主任制反対闘争の過程で、教育人材銀行というのを作ろうとしたことがありました。戦争体験や、消費者運動について話したい、あるいは職人仕事や三味線の技術など、何でも子どもたちに伝えたいことを持っている人が名前を登録しておくんです。そして授業に、そういった方たちを呼んで、語ったり教えたりしてもらったらいいのではないかという試みがあったんです。しかし実際には、教員免許を持つてない人を教室に入れるわけにはいかないという、教員免許法をたてにしたやり口で潰されていく。公的には、権力の側は、そうやって「開かれた学校」構想を潰していくわけですが、しかし、実際にはいくらだってまだ学校の中に地域社会を呼び入れることができると思うんです。

保育を教えるときでも、小さい子どもを教室に連れて来て放っておくとどんなことをするのかを見せて、まず中学生が小さい子の存在を実感してみることが最も生き生きした授業展開になると思うんですね。小さい子どもを知らない中学生にとって、子どもとの接触はいろんなことを発見させてくれ

と思うんです。また、クラスのお母さんが、保母さんや看護婦さんであることも充分ありうるわけで、そういった人たちを大っぴらではなくても教室につれて来て話してもらうことは可能だろうと思うんです。

よく、「地域社会と学校、親と先生とが協力しなくてはだめだ。今の世の中は親と教師が互いに悪口を言っている」と言われます。特に非行化の問題では、地域社会の教育力が減退したからということで、親と学校との連携をいかに進めるかといった議論で問題を整理していこうという道すがらできているわけです。しかし「親と教師が緊密な連絡をとって」というところにまやかしがあると思うんですね。緊密な連絡がとれていると、子どもは追いやられてしまう。子どもの抑圧のための連合であるなら、ぼくたちはこれを粉碎しなければならぬ。

公的な連合が反子どもの的であるときは、もっと私的な部分で、子どもの親と友達つきあいをして関係をつくっていくことが必要だと思うんです。このときも代紋をしやわないでやっていってほしい。学校においても、私的であるからこそできることを学校内に拡大していく。つまり、学校の公的役割に対して、私としての役割を、自分で決めて対置することで、子どもと教師、親と教師の関係も、教師どうしの関係も、まだまだ変えていくことが可能なのではないかという気がして

ならないのです。

学校外で、子どもが出かけている場所は、塾、児童館、学童保育、おけいこごと、スポーツクラブなどがあります。そういう場所にいる大人たちが見た子どもは、それぞれ違った要素をもっていますね。しかし、これが学校との公的に緊密な関係をもつと、ろくなことはないんですね。親と教師の間においてだけでなく、公的な場においても、管理として機能していくような連携プレーはやめましょうよ。親と教師たち、学童保育の先生たち、塾やスイミングスクールの先生たちが私的な関係で仲良くなる。その中で、全く違った顔を持った子どもたちを発見していく。そういう関係を作っていくためには、学校の先生というはなんてんは邪魔になるんですね。まず代紋を脱いでみて、それを評価してくれる人と仲良くしていけばうまくいくと思うんです。

まず、自分自身を学校から解放する目的をつけていただければいいなあと思います。  
(記録・坂上真理)

## 講演後の討論から

(司会) 斎藤さんのお話を聞きますと「かなり共感」と「相当の反発」と二通りの方がいると思います。これからの論議の中では、考え方が違って、そこから問題が始まるし、



交差もできると斎藤さんも言われましたが、各々が感じたこと、生徒の抱えている問題や、教師はどうしたらよいか等を述べていただき、その中で問題を拾いながら、午後のシンポジウム「学校はよみがえり得るか」につなげていきたいと思っています。

(S) 素晴らしいお話でした。私は学校は独自に開放されるかを一番お聞きしたい。戸塚ヨットの問題にしても、真向から正しく批判している週刊誌は一社だけという社会体制の中では、学校教育でいくら素晴らしい教育を行っても、子どもたちが社会に出たときギャップを感じ、生きていく上でこれは間違ったのではと感じる部分があると思います。教育は社会と切り離して考えられませんが、といって現在の社会を肯定するわけではありません。斎藤さんはどうやったらよいとお考えですか。

(O) 私は以前から斎藤さんのファン。戸塚ヨットなり学校で暴力的な教師がはびこっているのは、それを支持する親の層があるからだと思います。先日NHKテレビで、親子百組対象にした質問で、親が子の友達を見る基準としては第一に「家庭がしつかり」していることでした。親たちの子どもを監視するような意識に愕然としました。親の意識には子どもを中流的な人並みの暮らしをという期待があり、そのような世論や社会意識等の困難な状況の中で、何ができるのでしょうか。

うか。

又、昨日の授業の中で、自分の生き方を最後に考えさせて迫るのが大事と言われましたが、中流的な生活スタイルがあり、親の強い期待の中に、どう生きるのかとつきつけられても、先は見え見えでシラけてしまい、中流的にという本音があると思うと、大人や教師の立前にすぎず、納得できないのですが、その点をどう打破されていくのですか。

(N) 私は高校教師です。先日県の中・高の集会の話題の中で、ほとんどの教師は部活だプール当番だと学校へ行き、結局夏休みでも他に出て勉強できる状態ではないのですね。私の所属する男女共修をすすめる会での学習会の案内を県の中学教師五〇〇名に出したのですが、一人も来てくれませんでした。「忙しい教師がよい教師」の定着化の中で、新しい観点を取り入れるのは難しく、今この場の勉強や討論を私たちが学校の中でたたきつけていく力量を持たないと、つぶされてしまいます。どういう形で少しずつ戦略・戦術を持つかを話し合わなければ学校教育の中で生きてきません。各々の学校の状況を出し合いましょう。

(司会) 地域や親の問題が出されました。様々な考え方の教師仲間ともどういうかかわりを持っていくかも大事なことになると思います。

(K) 私の勤務している国立大の開放講座は社会人と学生

を分断しています。が、大阪の某公立大では、社会人は無料なので、初期の授業は後にいるが、学生がザワザワしているからと、しまいには、社会人と学生が前後入れ変わったそうです。大学でも、小・中・高同様の上下への権力・圧力の構図ができていますね。せめて大学ぐらいヨーロッパのように社会人がごちゃごちゃいても、よいですね。社会経験者がいると先生はいい加減なことができなくなるわけですから。また社会人参加に対し、外国の休暇や再就職の保障などを考えると、学校の問題は学校やある世代の子どもの問題だけではなく、中高年の再就職問題などありとあらゆる問題にとりかからないと解決してはいけませんね。

(H) もう一つ学校内部を考えると、講演のお話で親の異議申立てが、なぜ学年主任の段階で握りつぶされたかが問題ですね。管理組織としての学校は生徒だけでなく前段階として、教師も管理し、事なかれや自己保身のメカニズムを使っているようですが、その教師管理システムのメカニズムを明らかにするとおもしろくなってくると思います。

(司会) 学校での解放の問題を考えると、他の部分と密接に関係しなければならぬと討論が進んでいます。その方法は難しいと思います。問題点や良い方法についてご意見を。

(N) 職員会議で本質的な問題が出されても忙しいとか、

やることがあるとかで、考える時間を教師が持っていないのですね。まず、本質を考えようとする個人の姿勢や時間的余裕が必要ですが、会議の連続で授業をろくに持てない状況や、忙し過ぎればいいという日本人の体質とか、新しい教師は本質の議論の訓練不足で、背をむけるという構造ができています。又、私たちも断ち切れず、全部めりつぶされているのが現状です。忙し過ぎを変え、本質に対して目を向けさせ、議論の訓練等をしていかなければいけないですね。

(S) ここに集まった方たちは学校では少数派で、言うこととの十分の一も通らないのが現状ではないですか。確かに本質の議論をしたら論議にならないのは、面倒臭いからで、ぼくは、そんなものではないかと思っています。

講演の話のように、地域・パトロールについても、近所の人やぼくは無駄と思いつつやり、PTA会長や生活指導の先生が意義を唱えておしまいにというのが現状です。学校の中も時の移り変わりはあっても、知能テストを論議すれば負けるし、日の丸について言えば、だまらされてしまうように本質は変わらない。なおかつやっていかなければと思いますが、みんな真面目に忙しすぎており、学校や教育はいつも正で、いいことという前提や発想で始まるのは、やったらマイナスということが抜け、ひっかかるのです。『教育は悪いこと』では、学校の解放が本当にあるのか、あってもそんなものか

な、というのが気楽でいいです。

又、斎藤さんが、サービスを考えた方が子どもと同じ次元にたてると言われたが、サービスとおもねるとはどこが違うのか。

決まったことはそのまま素直にやれば世の中のめぐりもよく、前からそう動いているとも思う中で、どうしたら良いかわかりません。

(H) 小学校の家庭科教師。悩みの相談にのって下さい。十二年前から専科ですが、私は子どもや親のことも知らずに教科書と指導書だけで一生懸命教えていました。ある時組合のちらし配布のとき、地域や子どもの住んでいる環境に初めて気がつきました。生きた授業のために、家庭訪問実施計画案を提案したのですが、管理体制の強い学校のためつぶされました。何かよい方法のアドバイス。

(司会) うまくいったという景気の良い話もどうぞ。

(A) 職員会議がなく、休み時間は子どもと遊ぶとか、運動会の要項など全て管理職が決める学校があることを知りました。学校の中で、何かしようと思うとき、一つには学校のあり方と、自分自身の保守化を感じます。新任のときは子どもとかかわる時間がないことに腹がたちましたが、最近は忙しくて何とか。何年かいると矛盾が見えなくなります。この会で刺激を受けて自分を若返らせたい。父母が勇気を奮っ

て言われたことを受ける感性を持ち合わせたいし、弱者、子どもの方に目を向けたいし、思ったことを今言い、実践を通して幸せな生き方を教えたいです。主眼はまわりにあり、闘おうと思つたら必ず連帯する人間はいますから、どちらに連帯するかを考え、自分の行動を決めることと、管理職とか人間を変えていくには全面否定ではなく、交流できることはし、できないところをついていった方がいいですね。

(司会) それでは討議内容を踏まえて、斎藤さんに感想等を述べていただきます。

(斎藤) 「教育はいいことなのか」と、その前提から疑うべきというのは本質的問題ですね。いいと限らないとすれば、容器としての学校もいいものであるとは限らない。すると子どもや教師を解放する方向にはないことは自明のこと、という現実認識にたつと問題点となりますが、今日はそのような問題のたて方で考えておりませんでした。ぼくは基本的には体制内抵抗として学校を解放するにはどうしたら良いかと考えています。今までの話の学校の先生の厳しい日々の暮らし以上に、子どもの不満やいらだちや絶望感は、はるかに重く厳しいし、将来とか人生を確実にゆがめていく状況があります。子どもが明るい表情で元気よく暮らしていくために、とりあえず学校をもう少しましなものにするために、一緒に考えて欲しいという前提で出発しています。各教科教育を子ど

もに教える意味や、一定の体系の中で教えることから生まれる混乱などの教育の問題もありますが、もみくちゃにされる苦しみは断然子どもに回ってきます。そういう意味でぼくは学校体制全体を抽象的に横断として考えるという前提で話しました。

学校を解放することは、もちろんそれだけで済みません。ただ気になったのは、先生が変わり、厳しくなったとたん子どもがショックを受け学校へ行きたくなくなることもありますように、世の中がメチャクチャであるなら、せめて学校の中だけでも一日でも楽しく何とかしなくてはいけないと思います。

又、厳しい管理体制下で、本質を考える習性を職業病のように失ってしまう危険があるといわれましたけど、この会の集まりを見ますと、戦時中の教育状況から比べると、国家権力が直ちに強圧的にやるまでに至っていない。まだ大変だということにすき間があり、そのすき間をどうやってこじあけていくかが課題だと思います。

一生つき合う中で、戦略戦術を考えていく必要があると思いますのは、ぼくがそれを伝授するというのではなく、改善すべき個別課題を各々の場所であたいいくことが可能ということです。ただ、ぼくの町で「さそり座の赤い星」という機関紙を出して元気よくやっていました、最近は主任制度

の実効があったのか、だんだん欠けてきて、三人ほどになりました。家庭訪問でも何でも実現したいという熱情は、権力側がどういう弾圧を引き出すかを綿密に分析しながらやらなくてはならないし、正規のやり方が駄目ならインチキでも、それでも駄目なら夢でも今夜みるぐらいのつもりで、少しでもやっていくしかないですね。

草の根民主主義が頼もしく雑草のようにはびこっているときは気が楽でしたが、それが学校だけでなく町の中でもファシズムに変わり、どうしようもなく足をとられる感じです。

管理主義の厳しいところで、部活と称して朝六時から夕方五時まで拘禁している市があります。拒否すると大変ですが、それにめげなかった教師が、「そんなのはまるで社会主義ではないですか」と校長とわたりあったそうです。ぼくは時にはそのようにして、自らの理想を裏切つてでも、敵とやり合わなくてはならないと思いました。

(司会)

本当にどうもありがとうございました。

(記録・福留美奈子)

## 斎藤次郎さんの 講演を聞いて

◆おもしろかったです。斎藤次郎氏の発言は時々雑誌などで目を通していましたが、表現の固さにもあまり魅力を感じていませんでした。が、講演の内容は、歯にキヌ着せぬ言い様で、迫力もあり楽しかったです。特に「教師＝客商売」論は、僕自身が日ごろ喫茶飲食業の現場にいることもあり、非常に興味深いものでした。ただ一般の人、特に教師（恐らく「客商売」「水商売」に対して、一種の蔑視感情を身につけている）にとって、説得力のある言葉となりえているかどうかは疑問です。

現在流通産業全体が「客を待つ魅力ある店づくり」の時代から「客に近づく」時代との認識があります。典型的な事例は、宅配や代行業です。いってみれば学習塾や家庭教師も

一種の宅配業でしょう。学校の教師も「自分で生徒を集める」という立場に追いやらなければ、現実が見えてこないでしょう。

（兵庫 吉田清彦）

◆斎藤次郎さんのレジュメに「学校外文化の戦線での問題とどう呼応するか」とありました。学校では教師が学校のこと埋没、会社人間は会社のこと埋没、生徒は学校の場に埋没ということで、コミュニケーションがとれがちになる。そんななかでWeは、家庭科の教師、他教科の教師、市民などの交流がある。一般社会の常識が学校では認められず平然と規制が行われている恐ろしさを感じる時に、コミュニケーションの場、学校文化と学校外文化の交流は大切であると思いました。ひとりひとりを生かすコミュニケーションの場としてのWeが、これから発展しつづけますように！

（東京 小林志夫）

◆何といっても斎藤次郎さんがよかった。思うに、私は親として子供の眼を通して「学校」というものを見ているせいだろう。共感の度合が違う。親の側、子どもの気持、「そう！ そう！」「あ、そうか！」「私はまだ怠

けてる」。でも、結局、自分の口から吐き出す機会を、自分で作れなかった。こういうの、自己解放されていないっていうのでしょうか。仲間がふえた、ふやせるという実感を持ちました。

（東京 松本法子）

◆いろんな出会いが体験できて、楽しいでした。初めての方、久しぶりのなつかしい出会いの中で、割に自分らしく素直にふるまえてうれしかったです。

斎藤次郎氏の講演で、私自身もつと骨惜しみせず、楽しい活動を創り出す努力、工夫をしなければ、と思いました。

（神奈川 水流恵子）

◆私が特に感動をもって聞いたのは、斎藤次郎さんの学校論でした。ほんとに学校教育はどう変わればよいか。「現場教師」になってしまった今、いつもいつも考え続けていたことです。できればもう少し討議の時間が欲しかったな～と思います。来年も必ず参加します。来年はどこでやるのでしょうか。北海道なんかいいですね。静かな雰囲気のところ落ち着いてじっくりと語り合えたら、と思います。

（山形 大場広子）



〈シンポジウム〉

# 学校は よみがえり得るか！



佐々木 賢

梶原 公子

山崎 満喜子

(司会) 長谷川 孝

〈司会・長谷川 孝〉

テーマの「学校はよみがえり得るか」ということなんですが、これはいったいどういうことなのか、実はそれほどはっきりしていないんじゃないでしょうか。ぼくも具体的なイメージでは描けない現状です。その中で言えることは、自分の人間存在とか自分のくらしに足を踏まえた自分の〈学び〉を働かせようという、最もぼくらにとってなじめる〈学ぶ場〉をどのように構想するか、そういう構想の中でどのような学校のイメージを描けるか、それが大事だということです。今日の論議の中でそういう話ができればたいへんいいなあと思っています。

自らが主体的に自立的に学んでいく〈学ぶ場〉をどう構想するか、その構想力というものを非常に問われているような気がしています。しかもその構想力というのは、主体的で自立的な

佐々木 賢

「学校圧」というもの

## 教育と学習の対立



いう考えで、「学校庄」そのものに手を加えようとはしない——これが私の発言の主旨になると思います。

先日『学校のある社会ない社会』という本を読んでいたら、その中のパンフレットで編集者が「明治の祖父母の時代は労働少年だった。父母の時代は軍国少年だった。今の子どもたちというのは学校少年である」と言っていました。よく現状を表していると思うんです。今の少年たちは、すべて学校ということで生活がおおわれている状態だと思っています。そのことを、我々はよくわかっていないんじゃないかと思っています。

#### 学校で学ぶもの——評価、序列、資格

私の定時制高校の生徒は世間からはいわゆる非行児と見られている生徒が八割以上です。そういう生徒たちを見ていると、やはり彼らでも小学校のうちから学んできたことがちゃんとある。それは何かというと、小学校のときには「評価」されるということを学んでいる。人間というものは測定可能であるということを学んできているわけなんです。

中学校時代になると序列をつけられるということを学んでいる。人間というのは強弱があり上下があるものだということとを、大人たちからも友達の間から、それから教師の行動からも学んできている、と思います。

そして高校に入る直前、あるいは入ってから、は、「資格」

ということをやというほど学ばされるのです。

#### 高卒資格の意味

定時制高校というのは、いわば今の落ちこぼれと呼ばれている生徒が集まる場になっておりますので、高卒資格が取れるかどうかの瀬戸際に立たされているんです。いい高校であるか悪い高校であるかということとはあまり問題でない。

高校入学の割合がだいたい94%から、東京なんかは一時98%にまでのぼったことがあります。数%が高卒資格をとれない、95%~96%は取るという状況になっているわけなんです。その中であとの5%に入るかどうかということが、私の生徒たちの一番大きな問題なのです。こうなってきましたと、この5%に入るといことは、ぼくはもう「学校被差別層」というものが存在すると思っているんですが、その被差別層の中に入るかどうか、からくも高卒資格を得てやっていくことができるかということは非常に重要な問題です。これは図の中では「市民権」と書きました。市民として認められるかどうか、極端な言い方をしますと「人間」として認められるかどうかというようにさえ、彼らは思ってしまうわけです。

#### 勉強したくない

学校に来ておればとにかく単位やろうじゃないかと私は会議で主張するのですが、「いやー、なんにも全然してないんだからどうして単位やるんだ」と言われます。生徒は勉強



は全然したくないけれども単位だけはほしいと思っております。

勉強したくないということ、これは本心だろうとぼくは思っています。『教育評論』などで落ちこぼれとかつっぱりなどという生徒は、ほんとうは勉強したがっているんだなどと書いたものをよく見ますけれども、ぼくはあんまり勉強したがつてはいないと思っています。

例えば、わかるところから教えてやろうという試みをうちの学校の教師の八割はしているんです。数学でいうと二ケタのたし算あたりからつまづいている生徒がいる。そこからやろうじゃないかと生徒を数名残して、あるいは特別の授業を設けて始めようとする、とにかく逃げまわる。五人ぐらいで始めて、一人が逃げたから追っかけているとあとの四人がまた逃げて、教室に帰ったらだれもいないなんていうことがしょっちゅうあるわけなんです。そういうぐあいに教えようとするに對するアレルギーみたいなものが非常に強くなっております。

「評価、序列、資格」というルール、これが重要だよ、と学校が彼らに教えてきた。その中でそのルールからもれた生徒たちが、ルールにもう一度しがみつきたいと思ったときでできることというのは、力で教師をおどしてやろうということ、あるいは仲間同志でも力の弱いやつを力でいじめてみ

て、自分はまだ力があるんだということを確認するということです。

ですから私は、力志向ということが彼らにとって大きなテーマになるのは、その対極に我々大人がよってたかつて「評価、序列、資格」を教えてきた結果であろうと考えております。

#### 文明化社会の教えてきたもの

もう一つ、我々が社会生活全般の中で彼らに教えてきたものがあるだろうと思います。それは、この文明化社会そのものがもたらしたものだだろうと思うんです。いわゆる、「非行」——「非行」という言葉を断定的には言いたくないので、つねに、「いわゆる」という言葉を使いたいんですが、いわゆる「非行」という子どもたちに、あるいはいわゆる「非行」とは呼ばれない生徒たちも含めて、文明化社会というものが教えてきたものがあるだろうと思うんです。それは、「便利さを求める」ということでしょう。

小田原で自然主義のような教育をやっている、はじめ塾の和田先生が、「子どもたちの最近の最も特徴的なことは、労力の出しおしみである」とおっしゃっているんですが、私もそう思うんです。我々が文明を発達させることによって、我々の五感や体全体を動かすことがだんだん少なくなってきた。そういう状態全体の中で人からサービスを受け得るか

ということを目的にして生きていくようなところがあると思います。それが「他律主義」というものをもたらしている。このことは家庭生活とか社会生活全般にかかわることなので、みなさんといっしょに考えていきたいです。

#### 他律主義 十学校庄

他律傾向が生徒の中に入りこみ、一方で先ほどもいきました学校庄というものがあって、評価され、序列をつけられ、そして最後には資格を取らなければならないという圧倒的な圧力が彼らの上にかかっている。他律傾向を持ったまま学校庄をもろに自分の体の上からおいかぶせられて生きていく。

そういう彼らがもし卒業でなくなるときには、「うまく教えてくれなかった」という言葉で表現します。家庭が悪いからだとかしばしば言います。そこで数学の先生が開き直って「じゃあやろうぜ、わからないところからやろうぜ」なんていうと、逃げ回ったりする。「やろうといいながら君は逃げるじゃないか」なんて問い正すと、「押さえつけてやってくれ」「ひっぱたいても教えてくれ」っていうんですね。実際にそうするとあばれまくって逃げる。どうもそういう行動を見ていると、やはり押さえつけて勉強させるのはまちがいで、彼らの中に何か要求するものを見つけないければ何も教えることはできないんじゃないかと思えます。要するに、「強くうまく『教えて』」というのはどうも本音ではないとつ

かんだらほうがいいのではないかと思いはじめていくんです。そこで図の中で「自我分裂」とか「意志失調」という言葉で表現しているんですが。ただ、彼らにはもう一つの傾向、図の中にもあるのですが、「もう教わりたくない」という本音があるんじゃないだろうか、と思います。

#### 〈学ぶ〉彼ら

しかし、「教わりたくない」というのは、学びたくないということではないと思います。

私は彼らを連れてよく外へ出るんですが、まあただ散歩することもあるし、喫茶店に入ったり、クラブ活動の際にいっしょに行ったり、また警察ざたになることも多いので、警察や裁判所にいっしょに裁判所に行って、裁判を受けるまでの間とかに、「こういわれたらどうする」なんて作戦会議をやったりするので、そういうときはどんな非行犯といわれる子どもでも、非常に熱心に法律はどうなっているか、審判というのはどういうしくみなのかということを学びたがるわけなんです。私はそこでほんとうに彼らの目が生きているような感じをうけるんですね。

例えば交通裁判なんか受けるのについていくと、とにかく若者少年が圧倒的に多い。裁判の方も流れ作業で「ハイ、次、ハイ、次」というわけで、弁護士がついていいのに、大人が

ついて裁判やっている少年はほとんどいないんですね。私がついていきますと、裁判長はこちらにも発言を許すんです。いろいろ弁護すると刑が軽くなったりします。それで作戦会議をやったりするんですけれども、そういう具体的な生活の中で彼らはいろいろなことを学ぶんです。

### かかわりのない大人と子ども

子どもたちは、裁判をやっている間とか待たされている間、非常に真剣な顔をして金曜日と呼びだされたらやばいか、必ず取り消しになるんだなどとへんな迷信めいたことを言ったり、うわさしている。つまり大人とまったくかかわりのない子どもたちが、勝手に迷信めいたことで行動することが多い、ということを経験に行くところと知られるわけなんです。大人と子どもがいっしょに何かやったり行動すると学ぶ課題がいっぱい出てくるはずなんです。生き方そのものでもそうなんです。そういうようなことを全然していない。我々は、子どもが大人とのかかわりを持つというような場、社会を全然作っていない。そこで子どもたちは勝手に自分たちの非行集団を作っています。それはだんだん組織化されていっています。

私どもの学校にも二、三の右翼団体から勧誘がきています。その勧誘をどう断わるかなどという相談をまま受けるようになってきています。右翼団体の大人たちはこの暴走族の

子どもたちと行動を共にしているわけなんです。学校の教師であるわれわれがやはり遅れを取っているという感じがします。とにかく子どもたちはそういう非行集団の中で、子どもたちだけの一つの完全な文化を作りあげているような感じがします。

自分たちだけで作りあげた文化というのがどんな感じであるかということは、図のいちばん下に書いてあるんですが、移動とか無計画とか非所有とか叫びとか群れとかいうもので、そういうものを求めて彼らはうごめいている感じがします。つまり学校文化は彼らを学校文化の対極としてのそういう文化の中に追いこんでいるという感じがします。『原始回帰』あるいは『退行』といってもよい、そういうような状態にある子どもたちと、評価、序列、資格の学校文化。その中でどんなにいい授業をしようともそんなことはあまり関係ないんじゃないかとさえ思うようになってきています。そういうもの（学校文化と退行の子どもたち）が大きく対立するような状況に今置かれていると感じています。

### 〈梶原 公子〉

私の学校、御殿場というところ  
勤めているところは静岡の御殿場高校で新宿から小田急で

一時間ちよつところですが、実際は山の高原の学校です。ふつうの人は富士山のふもととか、別荘地、ゴルフ場、サファリパークのイメージをお持ちのことでしょう。あんなところに人が住むのかと思っていた御殿場に勤めてもう五年になります。御殿場が他の地区と比べて異質なところは、富士山のふもとに自衛隊の基地があるってことなんです。戦前から竹原の演習場、駐屯地、米国の基地もあります。去年も日米合同で大々的な演習が行われ、やはり地元への影響、生徒への影響は大きいものがあります。生徒たちの親も自衛官であるとか、母親もなんらかの形で自衛隊の中で生活しているとか、あるいはやとわれているわけではないのですが、自衛隊に土地を貸すことで収益をあげ裕福な生活をしているとか、自衛隊があることで潤っているところがあるとか、自衛隊があることで潤っているというところがあるわけ、安易な自衛隊批判はできない現状です。

家庭科の授業の中で家の間取りを書いても東京のように狭いとかウサギ小屋ということは御殿場では全然なくて何百坪という敷地の中に五〇〇六〇坪の家を建てているというのがザラで、自衛隊のために潤っているということがバカにできない事実ですね。

子どもにどんな影響を与えているかという、親が自衛隊だと、こういう目で見えてはいけないのかもしれないけれど……やはり平然と暴力肯定で、陰でいじめとかをやっている

一学期も大きな事件が起きました。応援団の団長が下級生にケリとかなぐりとかを入れ、暴力をふるったんですが、教師の方も特に体育の教師など「愛のムチだ」とか言って暴力を肯定、黙認したりして、ウヤムヤになってしまいました。学校が黙認したんです。そういうような環境なんです。

#### 男子のみの家庭科始まる

私が今日お話ししたいのは、このような環境の中で今年の四月から始まった男子だけの家庭科の授業のことです。ご存じのように、高校の家庭科は女子のみ四単位必修ということで、男女混合の授業はできないんですね。そこで男子は女子とは別立てで選択なんです。お話ししたような「つわもの」を多く含む三十二人が選択してきて、男子だけの家庭科授業が始まりました。

一学期は、食物と保育の分野をやったんですが、まず食物では理論的なことは教わりたくないという拒否反応が強いので、実習一本やりでした。背の高いひげづらの男子たちが花のししゅうのかっぱを着きていろいろなものを作りしました。やっぱり調理実習は楽しくって、三十二人中二十人が、いちばんやりたいことは調理実習だと言っています。男子の調理実習をやった感じは、料理は男女を問わずやる能力があるということ、男女を問わず作りたいというところ、最初には質より量だ、と言っていた生徒たち

が、実習を重ねたあとでは、料理は楽しいとか、量よりもおいしいものを作らなくちゃいけないと言うようになってきました。

### 愛と性の授業

保育の授業では、子育てのハウツーをやるんじゃなくて、子どもがどうして生まれるかという出産以前の問題をやりたかったので、生徒に授業でやることは「愛と性」についてだとズバツと言ったんですね。そうしたら生徒は、「食物の実習をやったんだから、保育の実習もやって下さい」なんて言うんです。「保育の実習ってなあに」と聞くと、「愛と性の実習です」なんて言うわけです。「避妊の方法を教えて下さい」とか、もつと露骨なことをいう子は「先生、クリトリスってどこ」なんてズケズケ言ってくるんですね。そこでどんなふうに進めていけばいいかをつかむために、「愛と性について思っていること」を書かせたんですね。

そうしたら、ただ「やりたい」と一言書いた生徒がいました。ほかに「性病が心配だけでもやりたい」とか、「お金が心配だけでもやりたい」、こんなことを書いた子が三十二人中十人でした。「愛があれば……」が三十二人中十一人、「愛や性の問題は子孫や家庭ということにかかわる大事なこと」と書いた子が五人、そのほかに四人、本質的なことと社会的なこと、例えば社会の風潮が悪いというようなことを

書きました。

このアンケートの結果を話したあとで女子に感想を求めました。女の子たちは、「男子はススんでいる、女子はいつも受身で損だ」とか「一言やりたいと書いたのは、ただ体が目的。そのことが壁になって男女のつきあい、交際ができない」「妊娠とか中絶とか女はいつも損だ。男が責任をとらないのはひきょう」などという意見を出しました。この女子の声をカセットテープにとり男子に聞かせました。

男子からは「あとのことの配慮はおれたちだって考えている」という反論がありました。そしてどうして男女の性意識がこんなに違うのか討論したんです。そして女子の生理的メカニズムなどについても説明していったのですが、わいせつな発言、ふざけた発言は少なくなり、真剣になってきました。

### 中絶についての授業

このあと、中絶についても話をするだけで終わってしまったのですが、女子が病院などに行ってきたレポートをプリントにして配り、学習しました。一学期の終わりには「生命創造」と「人間の生殖」という16ミリを見、「中絶についてどう考えますか」という問いで自由に書かせました。それをいくつか読みあげましょう。

最初はT君なんですが、この子は「先生クリトリスってど

こ」と毎回毎回聞いてくる子で「先生って団地妻？」って言ったり、クッキーを焼いたときなどおっぱいの形を作っているうちはまだよかったんだが、しまいに男性性器の形を作ったりしていた子だったが、こんなことを書いてきました。「まず16ミリのことだが、人間の体というのはすばらしく精密だと実感した。女性の二十八日周期の生理も母体の中でガキを生むための活動で感動した。中絶は女を追いこむ男が悪いと思った。やりたいからやるという男の衝動も困ったものだ。だけど男と女が愛の結晶であるガキを作るためのセックスならば、すばらしいことで、あの『俺たちの旅』みたいに感動することでしょう」。

もう一人M君、この子は学校のつわものナンバーワンなんだけれども、「高校生が妊娠したら中絶するしかないと思っていた。また、中絶以前の避妊法のことばかり考えていた。だけど授業を受けて少し考えが変わった。簡単に中絶というが、やはりそれは命を消すことで、好きかっての性行為のあと、できたらゴミのようにするのはいくれない。それなりの責任というものがあるのだから、高校生の性行為はいけなと思う」と書きました。I君は次のような指摘を書きました。「中絶は精神的肉体的に女性を傷つける。男は金だけだ。避妊で必要なのは技術や知識ではなく、男女関係の中の生き方の問題であらう。女性はある自分の体について責任をもって

コントロールするという意味で避妊を行うのであれば中絶の問題はその多くが解決できると思う」。

続いてY君は、「中絶は女に精神的ショックを与えるものだ。男は子が生まれるまで真剣じゃない。でも、できてしまったら産むか中絶するか、この二つしかないのだから二人の責任でよく話し合って決めるべきだ。金がないから養えないから中絶するというのは女に申しわけない。女の気持ちをよく考えるべき。16ミリのフィルムにはびっくりした。生命の尊さとか神秘的なものを感じた。中絶はできればさせたくない」と書いています。最後にH君。「もしできてしまったら、やはり中絶をすすめてしまう。生まれても不幸になる赤ちゃんをやっぱり産むわけにはいかない。もし彼女を傷つけたなら自分は必ず彼女と結婚する。」

#### 強く感じること

男子の家庭科が県で二校めで、指導主事が見に来たが、そのときは保育の授業で女子の声のテープを聞き討論するあの授業だったのです。指導主事には誤解されるし、同僚の男の組合員からも、「やり方がヘタ、おえら方をたてて終わればいい」なんて言われてガッカリしました。でも生徒の感想を読んだときにはうれしかったです。生徒は本音で書いてくれたのです。

授業をやりながら感じたことは、高校生の男女が大事なこ

とを本音で話しあうことが希薄だということです。社会、マスコミの風潮に流されて、誤解しあっています。男女が互いに関心があるにもかかわらずにおそれたり不安に思ったりして、よい関係がつかれない現状です。

また、次の二つのことも強く感じていることです。一つは、私と男の子の集団全体という関係でなく、私と男の子一人一人の人間関係が基本で、これからも大事にしていきたいということ。もう一つは10代の男の子の柔かい頭への期待です。組合員の男教師などは、「女を大切にしていればいいんだらう」なんていって全然わかっていないんです。性差別の解決には性別役割分担の打破が必要で、その点、若い男の子たちの柔軟さはたいしたものですね。

### 〈山崎 満喜子〉

母親として娘をメキシコのトラウイカ学園に入れた体験をふまえて、私たちがそこで学んできたもの、そして帰国後、日本の教育状況というものを明星学園というほんとうに特別な場、空間で体験したそのことについて話したいと思います。

娘がメキシコで入った学校は幼稚園も含めまして八十人というたいへん小さな学校でした。先生は女の先生だけ

で十人、校長先生も女の方でした。住んでいたのはメキシコシティから一時間半離れたクエルナバーカという地方都市で、人口十六万のリゾートタウンです。この地方都市が持っている特殊な条件がいろいろなところに反映していて、文化状況がたいへん高いんです。娘が行っていた学校は日本でも紹介されているイラスト双書の『初心者のためのマルクス』や『資本主義発達史』を著したエドワルド・リウスが経営していました。

### 多彩な活動と視点

#### (1) トラウイカ学園の父母会活動

小さいことから大きなことまでメキシコ体験について話したいことはたくさんあるのですが、今日は父母会活動に参加したということにしようと思います。父母会活動について語るということは、父母の眼から見たその学校の生活を語ることにあります。

トラウイカ学園の父母会は「トラウイカ共同体」共に生きる教育」というテーマを掲げて活動していました。教育担当者や親たちはまったく対等の立場に立ち、具体的には講演会、コンサートを組織したり、その売り上げを他国の人民解放戦線に寄付したりしました。また、街の中で文化活動をしている人たちといっしょに街中の映画館では見られないようなキューバの映画を上映したり、あるいは家族間で交流パー

ティや子どもを含まない親どおしのパーティをしたり……。私もこういうことを通じて学校とかかわりを持ちました。

メキシコは、日本とは経済状態がずいぶん異なります。国民の大半は貧しく、このトラウイカ学園のような私立の学校に子どもを通わせることができるのは中産階級、しかもその中の上流の層になります。弁護士、医者、絵かき、大学教師など、いわゆるインテリ家庭の子が多いのです。それにもかかわらず講演会にはへ今、自分たちがメキシコ社会の中でどういう状況に生きているかという視点が底流に貫かれています。

#### シルビエンタの講演会

私が一番印象深かったのは、シルビエンタの講演会でした。シルビエンタというのは、とても貧しい農村部から食べるために町に出かせぎにくる女の人たちで、大体は小学校にも入れず、一〇歳、一一歳くらいから労働しているんです。ものすごい低賃金、家畜同然の部屋、裸足で働くものも多く、都市貧民の男たちと結婚する者が多いのです。

そのシルビエンタが講師として四人くらい前にズラリと並び、自分たちがどういうふうに働き、何を考えているか、どうして自分たちのような境遇のものがでてきたのか、つまり個人史や労働状況、職業への蔑視により受けてきた心の傷とかを彼女たち自身の言葉で語ってくれたのです。私にとって

は感動的で心に浸み入るものであったし、トラウイカ学園の父母たちにとっても、私以上のものだったでしょう。というのは、トラウイカ学園の父母たちは、シルビエンタを人間扱いしない差別的な家庭で育ったんですから。

このとき、これまで自分が持っていた家事労働者に対する偏見というものに初めて気づいた親も多かったと思うのですが、こうした「親への教育」というものも学校教育全体の中にしっかりと位置づけられているんですね。親たちへの「貸し出し文庫」を設けて読書活動を推進するという動きもあります。マルクス、サルトル、フランクとか、そこで借りなければそんな本は読まないという人たちが本を読み自分なりの勉強ができるようになっていたのです。

#### 活動家たちとともに

私たちがメキシコに行って二年め、78年の秋は、ニカラグアの解放闘争が上げ潮になって、三十年間泥沼の闘いを続けてきた解放戦線がようやく勝てるのでは、という見通しがついていた時期でした。トラウイカ学園の父母会は、クエルナバークの中で組織された解放戦線支援の委員会に参加し、子どもたちは洋服や靴、学用品のカンパをし、大人たちはプロテストソングを歌っている有名な歌手を招いて教会でコンサートを開きました。

街の中にいる多くの活動家、つまり農民運動をやっている



人たち、女性解放運動をやっている人たちなどと、父母会は接触を持っているんです。シルビエンタを講師にした講演会というのも、女性解放の視点からシルビエンタ解放運動をやっているグループが主催し、そのグループに私たち父母会が依頼したんですね。講演会にはそうしたフェミニストグループや、観光のために空港をつくろうという動きが州政府にあり、それに対して土地を守るために生命がけで闘っている農民たちのグループ（日本の三里塚と全く同じ）も参加しました。

招く・招かれるではなく、それぞれがつながりあっているという関係なんです。父母会のやる講演会、コンサートも、実のところは街でいろいろなことをやっている人々が入れかわり立ちかわり来て、何となく楽しくやっている感じです。それがトラウイカ学園父母会の大きな特色であると思います。先生も親も活動家といわれる人々も、みんながトラウイカ学園という空間に集まって、そこでいろいろな活動に参加するのです。

隠さない、殴らない

## (2) トラウイカ学園の教育

この学園では、メキシコ社会が抱えている矛盾というものを決して子どもたちに隠しませんでした。たとえば、校長先生は女性だったのですが、マチスモ（伝統的男性優位主義）

というメキシコ社会のすみずみまで根をおろした歴史的な思想の問題点を、女の先生たちが細かなところまで子どもたちに教えていました。男の子たちが女の子たちに対してマチスモ的な態度をとった場合など、その先生たちの対応はとてすばらしかった。

メキシコはまた、むきだし暴力というものが存在する国でもあるのですが、男の女に対する、大人の子どもに対する暴力を全面的に否定して、学校では絶対に子どもを殴らない。学園の入学案内は漫画によるものなのですが、その漫画の中のキャラクターの一人が「私たちの学校の最大の特徴は、最も軍隊から遠いということです」と言っています。殴ったり、どなったり、罰を与えたりすることは禁じられているとも言っています。「子どもと先生はまったく同等の権利を有する」と話しているキャラクターもいるんです。「規則は子どもたちが作る」というセリフも入っています。

意識的にメキシコ社会の矛盾というものを子どもたちから隠さなかっただけでなく、ラテンアメリカ全体というものも語っているんです。すなわち軍部独裁によって民衆が抑圧されているという状況を明らかにするんです。子どもたちは自分たちがどういう状況下に生きていてどういう問題を抱えて大人になっていかなければならないか……そういう知識に向かって開かれているんですね。それがトラウイカ学園の特徴

だといえます。

親や先生は、「子どもは自分たちの最年少の同志である」ととらえていたと言えます。学園のさまざまな実践のめざしていたものは、学校という空間を通して社会の中で何をどのように変革するかということを学ぶことだったと思います。当然子どもたちにも自分たちの生きている状況というものを全部開くのです。そして自分たちが今、どういうところで生きているか、自分たちが暮らしている国についてとか、子どもを含めて知っていくとします。また、子どもとともに自分たちができることを具体的に変革に向けてやっていくのです。私にとってはとてもすばらしい体験でした。

## 内部進学テスト

### (3) 明星学園にかかわって

学校とはこんな可能性があるのだと感動しつつ帰って、地域の学校へ十ヵ月間子どもを通わせたのです。これを話すと長くなってしまうので省きますが、子どもはいわゆる「落ちこぼれ」になってしまったんです。そこで出会ったことというのとは心寒い、子どもにとっては生涯の傷になることがたくさんあったのです。そこで点数による序列をつけない教育という理念に共感して明星学園に子どもを入れました。ところが入れたとたん、内部進学テストというものをめぐって延々たる内紛が起きました。点数によって序列をつけられない

教育を小中で受けた子どもたちが、中学から高校に移るときに高校の実施するテストによって、入れる子と入れない子に振り分けられるのです。

これが80年に出てきたんですが、その一年前、高校側にこの成績では受け入れきれないと入学を拒まれた子どもが七人いて、もっと早くわかれば対応もあっただろうに、三月も半ばになって高校側が言い出したのです。そういう状態の中で小・中学校にいろいろな圧力がかかってきて、それでは内部進学テストを翌年から実施するというのを、無着先生の言葉をかれば、校長の遠藤先生は無理矢理承認させられたということでした。

ところがその遠藤先生の同意書は、その後、「遠藤先生だつて、同意している」といわれ続けているんです。たとえ点数で序列をつけない教育というものが行われていても、高校に入れない子どもたちが生まれるのであれば、入った子どもたちもまた大きな動揺をする、心傷つく。それまで学校の中で大切にされてきた価値観というものがそこでもさしく目の前でひっくり返されるのですから。このことを子どもたちに対する裏切り行為と受けとめる親たちがたくさんいて、高校側から示された内部進学テストというものに絶対反対するという運動が起きました。PTA、遠藤先生、無着先生、ごくわずかの教師等が結集し、PTA総会でテスト反対を決議す

るといったぐあいに親ぐるみの運動でした。

## 明星学園の父母たち

ところがトラウイカ学園の父母会を経てきた私にとって不可解であり恐ろしかったのは、非常に多くの親たちが内部進学テストに好意的だったということです。もちろん公式に賛成だとは言いませんが、「ない方が望ましい、でも子どもたちのことを考えるとこのような方法で学力をつける方向にもっていかざるを得ない」といった感じで支持されます。学力とか点数に対する親の考えとして、点数をつけてもらわなければ自分の子どもがどの位置にいるかわからない、点数を点数として受け入れる健全な強さだって必要だ、ということも言われました。

明星学園はいろいろな条件を持った子どもたちを許すかぎり受けいれているのですが、「ABCも書けない子と自分の子がいっしょでは困る」とか、「授業中ろくに何もできないような子がいては自分の子にはマイナスだ」という感情も浮上ってきて、裏で言われたのです。どんな子もみんなクラス全体に影響を与える、そういう授業が成立したというのに、親たちの実感というのは、「できない子が自分の子の足をひっぱる」というようなものが大きかったわけです。

遠藤先生の点数をつけない教育という方針には「自由」というのが大きくかわるのですが、明星学園の生徒というの

はお行儀悪いし、「汚なく」しています。それはその価値が浸透しているからで、整然とかたづけられた教室とはいえないが、子どもたちの顔は生き生きとのびのびとっていて、びっくりする事も多かったのです。それが「しつけができていない」という声が親の側からあげられてくるのです。学校でシツケをやってもらいたいというんです。点数とシツケ、二つのものが並んで、内紛をめぐって親たちの中に浮上してきたのです。知識の量ではなく別の形で知的なものを身につけつつあった子どもたち、もちろん問題となるものもあったことは認めるが、そこに開きつつあった可能性というものを、親と教師がともに支えてもつと違う地平に出られるということが明らかだったのに、それが果たせなかったのです。

「社会に通用しない子どもができる」とか「大学に進学できない子どもができる」とか、遠藤先生が「学ぶ」ということを延々と親たちにしゃべってきたにもかかわらず、親たちは自分たちの子どもを見て実感することよりもつと別のルートから入ってくるもの、自分たちが生きている状況に対する不安、それを全部学校に持ってきてぶつけたのだと思うんです。

## トラウイカとの違い

トラウイカ学園の父母会で私が感じたこと、つまり学校の中で親として教育にかかわっていくときにせざるをえない自

己変革ということ、その中で子どもたちといっしょに生きていくという姿勢がまったくなかったのです。もちろんいろいろな形で遠藤先生を支えていこうという親たちもいました。そういう親はPTA過激派、悪い人間というふうに言われました。自分の視野の中にトラウイカと言われたような「私が生きているメヒコの社会の中でいちばん多数の子どもたちがどういう状況で生きているのか、どういう貧困と闘いながら生きているのか、どういうふうに教育からしめだされているのか、でもどういうふうに彼らは生き生きと生きぬいていくか」というような視点、つまり日本でいいますと、公教育というものを自分たちの視野におさめた上での明星学園というものの中で、自分たちのやれることをやるという視点が全くなくて、自分の子どもがリベラルでよい教育を受けられればいいという人たちが非常に多かったのです。そのことが遠藤先生が掲げられた理念を、親たちのサイドで支えていけなかった大きな要因でした。

日本に帰ってきていつも思うのは、たいへん硬直した考えがいろいろなサイドでみちみちていて、あれかこれか、そのどっちかなんです。「点数がなくなれば学力がつかない」「しつけがなければ悪いところになってしまふ」というぐあいではんとくに二者択一、それ以上の発想がまったくない。だからこの内部進学テストをめぐる内紛も、あれかこれか、

あつちがこうなったらこっちはこう考える、という形しか出てこないの、長い間の内紛を続けながら、そこから有効なものが導き出せなかったのです。そこで遠藤先生も無着先生もおやめになりました。そういう状態です。学校という空間の中で親がどういうふうにそれとかかわっていくかの根本的な違いを感じています。「学校状況」に深くかわる私たち親の問題です。

〈長谷川 孝〉

教育化、学校化  
三人の方の発言を聞いていて、教育という問題が底流で問われていると思います。ぼくは教育ということにいつも疑問を持っています。親の教育のもっている直接性―愛と、学校で行われているシステムとしての教育は質、位相が違う。親が行っている教育と学校の教育を同じ位相でダブらせて考えるとまちがいが起こるんじゃないでしょうか。

社会の学校化という前に教育化ですね。テレビに出ていた若い女の子が何かしでかすときすぐ教育的処罰を受け、政治家が総理大臣になるとすぐに道徳教育について何か言ってみたくなる。そして家庭の教育化。家庭は決して教育の場ではなかったんです。今はそうなってしまった。そういう逆転をふ

まあたうえで学校というものを見なくてはいけないですね。教育化ということをもまえて、教育化が学校を通して進められていることを学校化ととらえています。家庭教育という言葉は学校教育された親の教育だととらえています。ぼくら自身の教育化、学校化された部分というものをどう排除し捨てていくか、そうして自分を解放していくかという問題があると思います。

### 国家の論理の貫徹

学校化している中で、学校が単なる勉強の場だけではなく、一人一人の人間の内面にまで入りこんでくる、そういう意味で一種の生き方まで教える国家の宗教の場になってきている、そんな感じがぼくはしています。国家がもっている組織の原理が学校の中に一貫して入ってきている。けれども、ぼくらは子どもたちを「国民」にするために教育しているのではないですね。本来ぼくらがねらっているのは一人の人間を育てていくことであるはずで、国民であるかどうかではなく、普遍的な人間としての成長を願っているわけです。教育基本法の考え方もまさにそこにあります。

国家の論理が教育に貫徹している中で、佐々木さんがおっしゃった評価、序列、資格という問題が非常に大きなウエイトを持ってきているんです。全部国家の組織論に位置づけられる概念だと思います。ぼくらが学校の中でよみがえらせて

いかなければならないのは、学校そのものをどうよみがえらせていくかということよりも、学ぶことに目を輝かせる子どもをどうよみがえらすかということの方が大事で、その中で学校はよみがえり得るかという問題が問われてくる、と思います。

梶原さんが出してくれた実践の中には、学びたいことを発見させていくプロセスがあったんじゃないか、と感じました。自分が学びたいことを発見する、その中で自分の認識を変えていく、質を高めていく、そういう生徒の前に立っている先生が臆せず自己表現をしている。そういう位置づけができると思います。

### 学校が奪っているもの

学校は、ものすごくたくさんの子どものたちから奪っています。たとえば最近すごく感じるのは、子どもたちの出合いの豊かさを奪っているということです。典型的な例を言えば、地域のある集会にでた生徒がそれとなくでるなど言われて集会にでられなくなっているんですね。けれども出た子どもたちは学校ではついに学ぶことができなかったことを、そういう集会の中で豊かに学ぶことができたんです。

要するに私たちは、いちばん学びたいことを学べないままに学校で勉強させられてきた、という言い方をしていたのですが、今例をあげたようなそういう出合い、それは人との出

会い、自然との出会い、できごととの出会い、そういうもの全部が教材の中に丸めこまれてしまっているとも言えるのです。そういう中で子どもたちは出会いが貧困になり、自らの必要も奪われているんです。「おまえの必要なことは関係ないんだよ。学校が必要なことをおまえが覚えるんだよ」というスタイルをうえこまれているんです。自らの疑問を封じられているわけです。ここに参加しているある先生が教室に、「まちがいは勉強の始まり」という額をかけているんですが、子どもたちの反応が違ってきたということです。やはり自らの疑問、疑いを持つことはとっても大事なことです。

ぼくは最近「おのれの問いを取りもどせ」という言い方をさかんにします。自分の問いを持たないで学ぶことはたぶん不可能でしょう。その問いを徹底的に奪っているのが学校です。

そういう意味でいいますと井上ひささんの「道元」という芝居の中に、「自分が自分で自分を自分にするのだ」ということを道元が教えられる場面があるんですけれども、その自分が、自分で、自分を、自分にする、そのどれもが、子どもたちの中から奪いさられている。そういう状況を学校が作っているのではないか、そういう気がしています。

#### 教師も奪われている

今のことと関連して言えば、まさにそれを奪われているの

は子どもたちだけでなく、学校で先生という仕事をしている人たちも同じですね。よほど自分の中になにがしかの核をもたないと、先生という職業の中で、自分の必要も出会いも疑問も問も奪われている、失われている。それを失った人たちは、国家が示したマニュアルにそってしか教育ができない、そういう状況が広がっています。

文部省にしても教育委員会にしても教師が自由に研修することを非常にきらいます。熊本では今年の一月の全国教研に休暇を取って参加した先生たちが賃金カットを受け、ボーナスもカットされているんです。それで裁判を起こしましたけど、教委が望まない全国教研という場に行こうとする先生たちの休暇をも認めないという横暴な態度がでてきている。教師に勝手に学ばれては困るという非常に強い意志表示だと思っています。しかし、それに対抗していくためにはやはり我々は〈自ら学んでいく〉という態度を堅持しなければならないと強く思います。教師にとっては、労働の全体性というのをどこで見っていくかというのはいへん大事なことで、たぶんそれを保証できるのは〈学ぶ〉という行為だと思います。それをぬき落とした教師というものは必ずシステムの前でまさにマニュアルにしたがった労働しかできなくなる、と思います。

#### 子どもを教育の対象にしない

学校をどう再生するかと考えた場合には、やっぱり開かれ

た学校、教育というものを構想していかなくてはならないのですが、どうも教育というのは本来うたかたなんじゃないだろうか。要するに教育という行為だけじゃないたたなくて、〈学ぶ〉という行為に助けられないと絶対なりたないのが教育だ。そういうとらえ方をしていけば、今学校で行われているものはぼくから見れば教育ではない。国家の原理にしたがった教育は、ぼくらは教育の概念からはずしていかなくてはいけないのではないか、という気がしています。

教育学の大きな流れとしては、子どもを教育の対象としてとらえていくという考え方が非常に強いと思うんですけども、「教育の対象とする」というのはどういうことかといいますが、子どもを物としてとらえていくことになると思うんです。加工し、なんかを取りつけて製品にしていくなすね。しかし、子どもたちを教育の対象とする発想はするべきじゃないでしょうか。教育の対象として子どもを見ないときにはじめて、子どもが一人の人間として見えてくる、ということがあるんじゃないでしょうか。

### 50%の自己表出を

さっきの梶原さんのお話を聞いて「臆せずに自己表現している」とぼくは言いました。最近あるところに送ったメッセージの中でぼくはこういう言い方をしたんです。「せめて50%の自己表出とせめて50%に抑えた指示表出を」。指示表出

というのは、本でいえば辞書とか百科事典ですよね。要するに書いてある内容を正確に受けとらなければならぬものです。自己表出を本でいえば小説になりますね。自己表出だけで書かれている小説から教えられることはないかというところ、これはたくさんあるわけですね。作家はその小説を通して何かを教えようとしているかというところ、まずすぐれた作家の作品にはそういうことはそれほどない。自分が今言いたいことを伝えたいことを小説を通して表現している、自己表出してやるわけ。そういう自己表出性ということがたいへん大事なところで、まさに「50%の自己表出」となるわけです。教育というものは、ほっておくと100%指示表出になる。現在の教育はまさにそうなっている。その中でどうやって、自分が子どもとの関係の中で何が言いたいのか、訴えたいのか、子どもたちの言葉の何を受けとめるのか、そういうことを必死で問いつ返していかなければならないのではないのでしょうか。

もう一つ最近考えていることなんです、学習権を考えるときに、「欲しないことを教えられない自由」ということが一切言われないがそれでいいのだろうか。主体的で自立的な学ぶという視点から見ると学習権の中に、いやなことは教えられない、拒否できる、ということまで含めていかないと人権としての学習権というものの十分さがなりたないのではないか。ぼくは自分たちの内側にある教育と学校という二つ

の強固に結びついた観念をどう取りはらっていかかということが非常に大事なことだと思っています。

### 連帯か排除か

山崎さんのお話を聞いていて感じたことなんですが、日本の学校観からするとトラウイカ学園はもうすでに解体している。逆に明星学園の遠藤先生や無着先生がやろうとした教育は、学校観をもし変えていればああいう形で敗北しないですんだんじゃないか。要するにまさに明星の教育をつぶしたのは親たちと教師たち。どこでその両者がとり結んだかというのと、一つは教育をお任せしましょう——専門的に引き受けましょうという関係でこわしているんです。もう一つはたぶん教師たちの間に点数をつけたという断ちがたい希望があったんだろうと思います。さっきは点数をつけないと、親が不安という話だったが、ぼくは教師たちが点数をつけないことがたいへん不安だったんだろうと想像しています。

ほんの一時軍隊から少し遠のいた学校が、また限りなく軍隊に近づいてきている。これは愛知の例を見れば歴然としているんですが。その中でぼくらはどういう価値概念を持たなければいけないかということなんです。二つの系列の組織原理を考えてみたい。

一つは「組織の中の人間モデル」なんです。あれは敵だから殺せ、殺さなければ殺されるという論理です。支配・服

従・命令・排除・分離・政治的な機能・国民・権力集中・独占・国家・軍隊・企業・疎外・客体・他律性・われ—その関係・対象化・もの化・反感・不信・間接性のような言葉のグループで説明できます。もう一つは「人間の中の組織」というモデルで、敵と思われたものが味方になるという論理で、合意・協同・自治・包含・一体・社会的機能・人民・連合・分権・コミュニケーション・村落共同体・サークル・ベ平連・存在・主体性・自律性・われ—なんじの関係・パーソナリティ・共感・信頼・直接性みたいな言葉が一つのグループになります。ぼくらが自分たちの価値感をどちらに向けていくのか、連帯の方にもっていくか、排除の方へもっていくか、一人一人が今問われているんじゃないでしょうか。

子どもたちがよみがえらなければ最近五年生の息子のクラスで、たまたまはりきった女の先生が担任なんです。音楽コンクールのテープ審査に出したんです。二クラス出したんですが、その二つともテープ審査を通ったんです。十月に公開録画で審査会がある。それが決まって先生も子どもも大喜びしたんですが、その日の夜、先生から電話があつてあまり喜んで外に騒がないで下さいというわけなんです。

おかしいと思って、ぼくは前の担任に電話したんです。あのクラスがたまたまテープ審査を通った。少なくとも教育と



いう場で考える以上先生たちがみんな、またほかのクラスの子たちも「よかったね。ぼくらはほかでがんばろうね」としていくのがほんとうの教育のあり方じゃないかと、ぼくが言ったわけです。前担任の彼は分会長していて、子どもが何か問題を起こしたときに子どもの前にきちっと問題を明らかにして討論していくと、子どもをやっていける人だったんだけれど、「うん、ほんとうはそうだ」と一言いつてくれるかと思ったら、そうは言わないんですね。

先生たちが国家の思想の中に自ら入ってしまったっている。「ほんとうはそうなんだ」ときちっとおさえておかないと、「こういう状況だからこれしかできないよ」ということになってしまう。競争・国家・軍隊・連帯をバラバラにする原理を取り入れてしまったら終わりですね。

どこの学校でもそうだろうと思うんです。どこかでがんばったクラスがあったら、よかったね、応援してあげようね、ということを組み立てていく可能性がなくなっているんです。でも作っていかなければいけない。

学校がよみがえるということは、学校の中で生きている子どもたちが、子どもたちの活動がよみがえるということではないのです。「人間の中の組織のモデル」の方向に一人一人が自分をもっていかないといけないと思っています。

## シンポジウムの討論から

(一) 男女共修の家庭科を愛知では一校もやっていないが、なんとかわが校で実現したい。梶原さんのお話では、男子だけでやっているということだが、私は男女いっしょにやりたい。こう主張すると必ず、男女にはそれぞれ特性があるとか、男子は中学校でやってないから無理だと反論される。

梶原さんはどう考えるか。

(梶原) 高校家庭科は四単位女子のみ必修という制度の中で男子もやりたい場合四単位必修にするか、ほかの方法にしてということになる。我が校では、男子のみ・選択制・別立て二単位ということになる。あるいは食物・保育の名目で必修にできる。

(H) 「授業で勝負する」のほうはもうダメだと佐々木さんはおっしゃるし、私もその限界も見えてはいるのだが、ずっと悩んできた。いい授業をやっても評価で子どもを裏切っているとも言える。

(佐々木) 「授業で勝負する」と私は考えない。そんなふうに肩ひじはった姿勢の教師はうちの学校では殴られる。最近プリント学習の形になっている。生徒は気が向いたときに

プリントを持って行ってやっている。

(N) 社会科の教師だが、家庭科の共修について賛成派・反対派にわかれて討論するなどといった授業をしている。女性解放に向けた高校社会用スライドを作った。

(K) 学校はすでに国家権力・経済界の要請に応えるものになっている。教師であること自体、どういうことなのか考えていく必要があると思う。

(O) いい実践とか悪い実践、いい先生とか悪い先生という視点を超えて、「制度としての学校」そのものを問題にする必要がある。そして、その向こう側にある学校観・社会観・教育観がどういうものか話しあうことが大切だ。

(T) 子どもにとって学校は生活の場であり、仲間といっしょの場である。おもしろいこと、仲間をつくること、生活にねざすこと、このへんに学校のめざしていくところがあると思う。

(長谷川) 家庭科は生活を基盤にした教科だけに期待がある。経済界の影響を受けて発展したことが学校の荒廃になった。

最後にまとめを一人ずつお願いしたい。

(山崎) 遠藤先生が「誤解を恐れずに言えば、学校は勉強しなくてはいけないところなのか。ほんとうはまずなによりも子どもが生きていかなくはない場所だ」とおっしゃ

っていたが、まったく同感。

(梶原) 自分―管理職―教育委員会―文部省、こういうシステムのの中で、制度としての学校批判をするにしても何にしてもひじょうにジレンマを感じている。

(佐々木) 学校は官僚システムになっている。しつけとか勉強とかをみんなが要求して、子どもをその中においてきた。しつけ、勉強は商品化され学校は独占企業だ。こうした中では合理性・効率・正確さ・公平が要求される。これら一見よいことのようにだが、実はいろいろ問題がある。合理性は権威づけを生むし、効率はヒエラルキーを作り出す。これからは学校を超える、無化することをあらゆるところでやっていくことが必要だ。学校が本来いいところという考えは捨てる。よみがえらせようなんて考えない。「高卒ぐらいは」とは言わないことだ。

(長谷川) 子どもが学ぶのを妨害することはやめたい。おかしいなと思うことを大事にしたい。自分の言葉で自分の哲学を話せ。生徒の言葉を聞ける――その先生は大きいんだと思う。科学で処理するところから哲学で処理するようにしたい。

きょうのシンポジウムで飛びかった言葉から、参加者が何かを取りだし発展させること。それが今日のテーマにかかわる大事な作業だと思う。

## 〈シンポジウムの講師から〉

◆シンポジウムにつきましては、必ずしもお集まりの方々にご理解いただけなかったように、申し訳ありません。司会者の不手際でしたが、やはり発言者が四人は多すぎ、私が発言を控えるべきだったかもしれませんでした。終わりが尻切れトンボになり、残念でした。

ただ、お集まりの方の中に、何かを教えられたという気持ちがあったら、あれだけの発言があったのだから、自分の力でひとつぐらい見つけなよ、と言いたい気がします。ほんとうは、学びとれる人しか教え得ないように思います。私がシンポジウムの最初に言った構想力ということ、思い返してもらえれば幸いです。

(長谷川孝)

◆合宿はとても楽しく有意義でした。とくにシンポジウムで会場の方の発言を聞いて、私の予想していたよりもずっと学校への考え方が(全体的に)制度否定へと傾いているようにでびつくりしました。それに宿舎では夜の三時ごろまで話し合い、時の過ぎるのを忘れてしまうほどでした。新しい人と知りあえたこととしかも親しくなれたことは私にとって、

貴重な財産です。

(佐々木賢)

◆「シンポジウムは失敗だった」という声を聞きました。確かに私はその面否定できません。論点がはっきりしなかったこと、パネラーの意図する主張が互いに交差して結接点がうまくかみあわなかったこと、パネラーの討議が全体の人々の問題として響かなかったことを感じます。それはなぜそうだったかと言えば、パネラー相互の意志疎通が十分でなかったところではないでしょうか。

「学校はよみがえり得るか」のテーマに対し討議するならばある意味では非を表明し、どんな理由でという発言をパネラーひとりひとりが問われているのだと思います。色々な説や、教育や学校に関する抽象的な解釈を論じていっても、テーマの核心を一般の人々に訴えていく手段にはならないと思うのです。そのような抽象論よりもパネラー個々の立場から「学校がよみがえり得る」方向をもつと具体的に論ずるべきだったのでは、と思います。多分学校の教師でない学校がどんな状態にあるのかわからないというのが一般市民であり、親でない教育の矛盾をつけないという部分もあります。それらをはっきりさせ「ではどうしたら良いか」を考えねばならな

いと思います。

(梶原公子)

## 〈参加者から〉

◆三人の報告者のそれぞれが結局「学校はよみがえり得るか」というテーマに収斂することなくバラバラの報告にとどまった。ひとつひとつの報告、あるいは司会者の発言は、それぞれ興味深い内容を持ちながら、結局は報告の域を出ずに、かみ合い所を見出し得ずに時間が過ぎてしまった。特に梶原さんの実践報告は非常に興味深い内容で、さまざまな討論の広がりの可能性を持ったテーマであったのにと残念です。

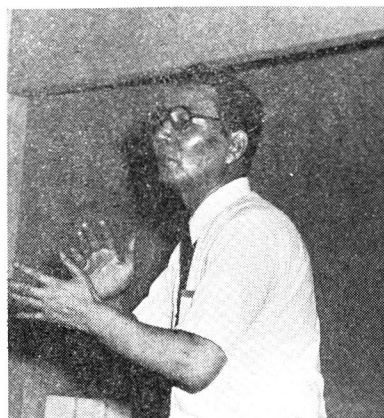
(兵庫 吉田清彦)

◆討論の際の発言、シンポジウムにおける発表が観念的だったように思います。自分の経験、実践事実をだしながらだったら具体的にわかりやすかったと思います。

「学校はよみがえり得るか」ではなく「よみがえらすために、自分たちはどう取り組むか」だった方がよかったなと思いました。これは計画段階に提案しなかった私の責任でもあります。

(熊本 桑畑美沙子)

# 子育ての 習俗



庄 司 和 晃

（合宿最後の日となった八月二十一日。皆さん全国から抱えていらした思い思いの問題を目一杯語りあったせいか少々疲れている様子。会場もホールといった洒落たところでなく、旅館のお座敷のせい、皆さん畳の上で足を崩したリラックスした格好で。講演はなごやかな雰囲気の中始まりました。）

（司会） エー、先生は昭和四年の生まれです。ンーとだから幾つになられるのかな……。

（会場から「五十四歳！」の合いの手が入る。）

そう、五十四歳でして、成城学園で教鞭を取った後、今は大東文化大学で教えていらつしやいます。そしてその成城学園に先生がいらした時、柳田国男・三浦つとむ、という両者に先生は運命的な出会いをなさいました。というのは、先生の学問は柳田国男の発掘した前近代人の自然な教育の営みに、三浦つとむの認識論を導入し、さらに昔の子育て法を体系化

しようとなさっているものだからです。  
そこで今日は先生に日本に残る子育ての習俗についてお話ししてもらいまして、家庭科教育の内容は西洋風生活思想だけでなく、日本の子育て習俗を取り入れる可能性も持っているのではないかと、その辺のところを探っていければと思っています。

御紹介いただきました、庄司です。こんな風な話し方なので大変聞きとりにくいかと思いますが、よろしくお願いします。

(こんな風な話し方というのは、私自身驚きましたが、先生のお言葉のイントネーションが東北弁のそれだったためです。柳田国男・三浦つとむの名前を聞いてなにかしら難しいお話しが始まるんだと緊張していた気持がこのイントネーションを聞いてホッとしたのは私だけだったのかしら。)

私のいただいた題目は「子育ての習俗」です。そこでこれをフォーラムの主題である「学校はよみがえり得るか」に照らしあわせてお話しを進めていきたいと思っています。

まず最初に「習俗」について考えてみたいと思います。習

俗とは風俗・習慣・慣習・ならわし・しきたりに分けることができます。つまり習俗とは別の言葉でいうと「式次第」と申しまして、皆様入学式とか結婚式とかで経験していることです。あまり気を使わなくともそれに添ってやれば、一つの舟に乗っていているように無病息災で渡っていけるといううなものです。葬式なんて特にそうですね。パチ(手をたたいて)「ただ今より葬式を始めます。」パチ「これにて葬式を終ります。」ってな具合に誰かが取り決めてくれたものに乘っかっていくのです。

しかし渡し舟なので使えば古くなります。水も漏れてきます。壊さなくてはいけない時もあるでしょう、ひとりでに壊れていく時もあるんです。それが今の日本の状況なんです。日本の思想を支えているものは祖先崇拜というものです。そしてこの死んだ人を敬うということと、家族制度が結びついてくるのです。

これは戦後の民主政策で壊されてまいりましたが、いまだに私たちの周りにたくさん残っております。そしてこういうものは、学校教育以外のところで私たちを教育しているようですね。

しきたり  
「しきたり」という言葉があります。これは日本の中で生まれ育ったものをいいますが、皆様の中にはしきたりに反発を

感じていらっしゃる方もおるかと思います。そこで次に「しきたり」を具体的に追いながら、子育てを見てみたいと思います。図1を見て下さい。「しきたり」には神様という概念がいとも入りこんでいます。たとえば懷妊後五カ月の帯祝、生後三日目の着初め、百日目に食初めのようにしきたりがありますね。これは全て神様と一緒に〇〇するという意味で、我々の祖先が我々に残してくれた前科学的遺産です。皆様は科学的な教育を受けてきたが、それ以前の人々は科学にあらざる教育を受けてちゃんと育ってきたのです。そこで経験で発見したものを「前科学的遺産」と呼んでいます(図2)。

教育の本質とは世渡りです。この世をどうやって渡っていくか、この世渡りを身につけることが教育の本質であると僕はとらえています。私たちは世渡りにおいて実にたくさん前科学的遺産、つまりコトワザとか経験を活用しています。そして又、ほとんどの皆さんが信用し活用していらっしゃるものに「科学的遺産」がありまして、さらに最後に科学にも前科学にも依らない「非科学的遺産」の存在もございます。「非科学的」とは俗信とか信仰・宗教を指します。僕は以上の三者をうまく世渡りで活用していかなくてはと思っています。

(ここで先生は会場にいる皆さんに以上三者のうち自分は何を信用かつ活用して暮らしているかの挙手をさせられまし

た。結果は科学的認識が二十五人、非科学、前科学的認識には共にバラバラという程度。途中「信念に従って生きるというのはどこに入れるべきか。」という質問がとびだしまして、先生はあらたに「哲学的認識」をこしらえられました。この哲学的認識には十五人程の方が手を挙げられました。)

こういう結果でよくわかると思います。自然科学的認識が全国民に浸透しているのですね。そうしますと日本における科学的教育は成功したのでしょうか。僕はそうではないんではと思います。これからますますせちがらくなっていく世の中に對し、役にたつものならばあらゆるものを導入して人類は危機突破していかなくてはならないのですから、僕は科学だけがすばらしいというものの方・考え方にキックする必要があると思うんです。科学を大事にしていくと同時に、非科学的に発見したもの、前科学的に発見したものを見直す必要があると思うんです。

### 子育てにかかわる非科学的・神秘的なものの発見

現在図1のように人間の一生を丁寧に節目づけて暮らしている人はあまりいらっしゃらないと思います。ですがこの中には皆さんの知っているものもあるでしょう。こうした習俗・しきたりにはほとんど今意味がわかりません。ですから意味がわからない程、遠い昔からの想いが重なっていると考えられます。ですが、この意味を解説していくきっかけがあり

図1 人間の生死過程 (非科学上の発見)

- 常民の習俗的体系。(習俗[しきよく] = 「式次第」方式 = ふねにのりことし)
- 儀礼体系の創出。(人生儀礼 = 成長儀礼 = 通過儀礼)
- 「人間+生」のわしづかみ。(ひととは体系を持って生きる存在だ)
- 人間+生の過程は、有限性突破のプロセスである。

前子ども時代

儀礼	俗例	民俗語彙(オホミ)
懐妊	(通例)	カカエル・ヒガトマル・ハナミブルマイ
帯祝	五か月	ハラアゲ・チカラオ・ヒ・オビイワイ
臨月祝	出産予定月	デキヨケ・ヨビダシ・ダツキイワイ
産立式	一日	チカラメシ・イツビウメシ
着初め	三日	ミツカイワイ・ソブトオシ
名付祝	七日	ナビロゲ・ナカマイリ・ナツケ
出初め	二〇日	ウイデ・セラチンマイリ・イドンチ・ハンマイリ
宮まいり	三〇日	カオミセ・ハツミヤマイリ
初節供		オハツイワイ・ハツゼラフ・ハツショウガツ
食初め	一〇〇日	モモカ・クビスワリメシ・ヒトツブクイ
初誕生祝	一歳	アルキイワイ・ブラオシモチ・カンゴロガセ
経路とし	三歳	オビハジメ・オゼンスワリ・ヒモトキイワイ
はかき着	五歳	ハカヤギ・タネアゲ
	七歳	

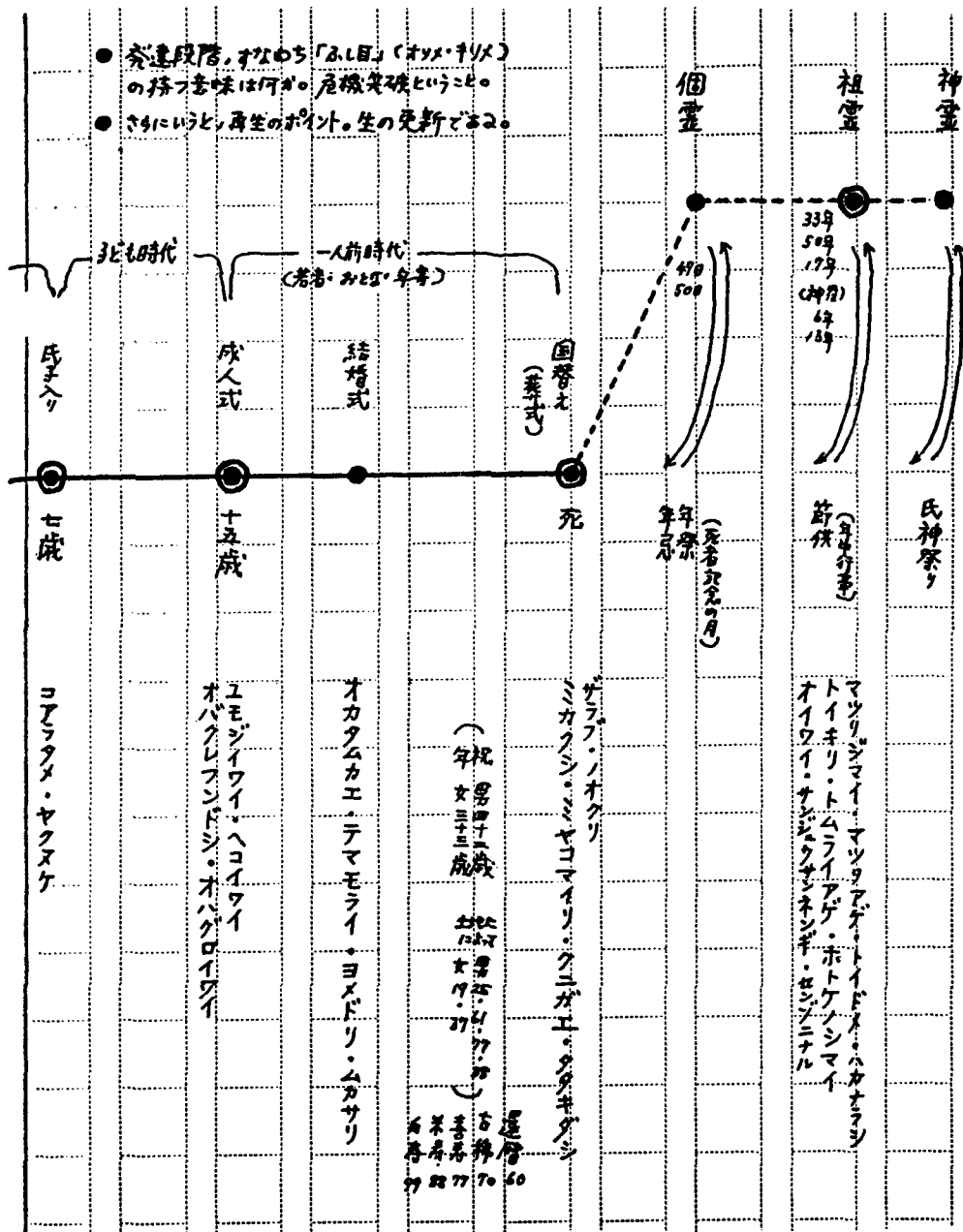
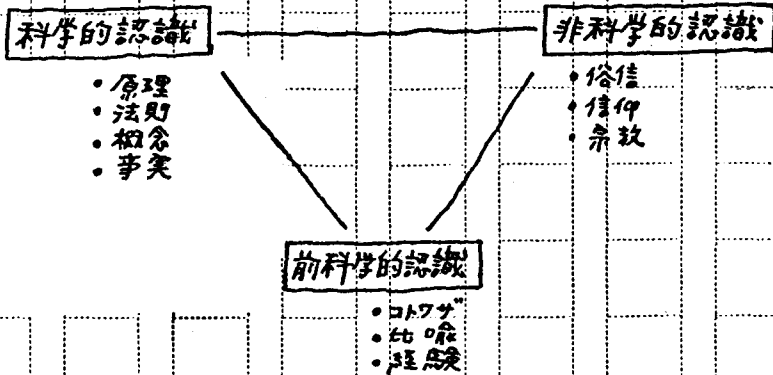




図 2

< 認識形態の三相 >



- 別言すると、これは「ものの見方考え方」の三相である。
- 物事理解においては、三者の統一的把握が肝要である。
- 又とは、三者それぞれにおいて、真実をそれぞれに掘り出しているが故に。  
(あらゆる知見を動員してひとつと生み出すべく)

ます。それが民俗語彙、すなわち方言です。

たとえば初節供のところを地方によってはオハツイワイ・ハツゼツク・ハツショウガツと呼んでいます。こうしたものが、なんで昔の連中がこれをやったのかの手掛かりとなるんです。明治のころ、政府が方言撲滅運動をやりましたが、これは昔の人々の精神を追体験できなくなるということで大変な事件なんです。いち早く日本民俗学者の柳田国男らがそのような損失に気づき、方言を集めておいてくれたわけでありますが……。

おもしろいことに、七つという数字が非常に多くてくるんです。「七つまでは神のうち」とかね。これはこの時期における魂の不安定さ、つまり死亡率が非常に高いことを示しており、子育ての大変さを物語っているんですね。だから僕は七つまでを一人前の子供になっていない時期、「前子供時代」として一つの区切りを置きました。次の区切りは十五歳でして、十五を過ぎると大人と一緒に皆仕事をしていたからです。現在成人と見なされるのは五年のびた二十歳ですね。

そうして我々の御先祖様は死後の世界のことも空想いたしました。まず「死後五十日位は魂はこの世を彷徨っている」と決めました。これは非常に効率のよい知恵でしょう。なぜなら死んだ人をもって悲しむ気持が、五十日間うちに次第に薄らいでいくからです。又、この後は年一回の法事をして

故人を偲びます。そして十七年、三十三年、五十年のまつりごとを終えますと、これ又我々の経済的負担を考慮する御先祖様の知恵なのか、故人の霊はきれいになると考えました。きれいになってそしてその又先にいた御先祖様の霊と合体すると。この御先祖様の霊と故人の霊とが合体することを学術用語では祖霊といひます。

そこでおもしろいのは、このころにある地方ではハカナラシという方言があるんです。ハカをならしてしまふということとは、すなわちこれ以後は先祖代々の墓としてまとめていくよ、という意味でしょうね。

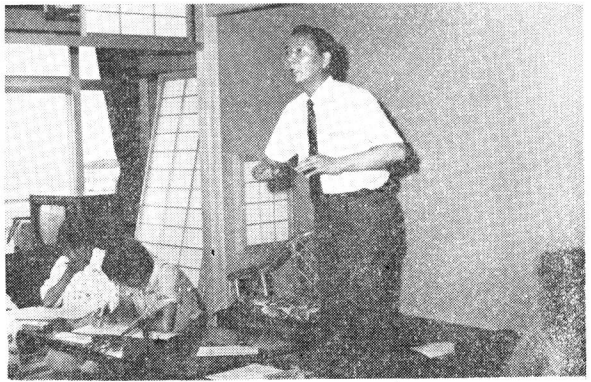
さて、御先祖様の霊と合体した後の魂はどうなるのでしょうか。これは学問上論争がありますが、やがて氏神様と合体するんではと考えられています。そして日本の死後の世界では又、死後も霊がこの世とあの世を行ったり来たりするとも考えられています。節供をして御馳走をつくり、御先祖様と一体感を持ち続け決して粗末にしないのはそのためです。

#### 前子ども時代

では死後の世界はこれで一応終わって前子ども時代を詳しく見ていきましょう。前子ども時代とは、懐妊してから七歳までの時期ですが、子ども時代に比べて非常に詳しくききたりがあります。それはだいたいこの時期に人間としてどのよに生きていくかほとんど決まると考えられていたからで

す。外国の文句に「ゆりかごから墓場まで」ってのがありますが、日本の場合にはゆりかご以前から、墓場以後まで人間のしきたりを作っていたんですね。図を見て下さい。まず、日本人には生存権というものは懐妊してから五ヵ月たつて認められています。それは五ヵ月たつてはじめて帯祝いというしきたりがあることでみてとれます。これは懐妊しても当時の苦しい百姓暮らしでは間引きなどが大手をふって行われていたためです。又帯祝いをせずに生まれてきた子どもなんて、首をひねって殺されたそうです。そしてその時大声をだして泣いた子どもは自己主張したとかいって生かされたとか、そんな話が残っています。ひどい話ですが本当です。今でも中絶数は年間五十九万人にものぼるそうです。日本人は気がとがめるらしく水子供養をやつてるようですが、こうした人口調節の問題は昔からあったんですね。それが老人にくるか生まれる前の子にくるかは違いますが。私たちはこれらの問題を教育で取り組んでいかなければならないと思います。

さてオギャーと生まれたら産立式をします。これは図の下の語彙の所にあるように、力飯などたくさん御馳走をこしらえて隣・近所・親戚に配り食べてもらうことによつて連帯感をつくるのです。そして何かが子どもにあった時は助け合えるようにと願うわけです。このころ大学生でも同じようなことをやってますね。もともと彼らはそれをコンパと呼んで



いるようですが。同じようなものでしょう。

生まれ落ちて三日たつと、今度はソデトオシというものがあります。大人と同じようなことをさせて、この世に住みついてくれるだろうと願うわけで、一種のおまじないです。おまじないには二つありまして、一つは氣持を宥めるやり方、もう一つはこれからそういったものに陥らないように願うおまじないです。学者言葉では余祝といえます。つまり前祝いです。このような前祝いが前子ども時代を通して行われていくわけです。七日たつと名付祝い、二十日たつて出初め、ですが二十日位じゃ子どもはまだ歩けないわけで、誰かさんにおぶってもらって参りにいくのです。

どこに参りにいくのでしょうか。これをやはり方言が教えてくれています。セツチンマイリ、お便所の神様と御対面、イドマイリ、井戸の水神様に御対面というわけです。これらは将来子どもがそこらを跳ねまわる年ごろになってから、まちが

ってお便所や井戸に落ちないためのおまじないです。

三十日たつて宮まいり、ここで初めて氏神様と御対面です。これらは全て余祝なのです。百日たつと食初めといって大人と同じものを食べさせます。でも子どもだから吐きだす子もいるわけです。その時は頬につけてこれで同じものを食べたとして儀式をすませます。そして一歳の誕生日を迎えるころ、アルキワイをします。

昔の連中は人体の骨格的構造を知りませんでした。それにもかかわらず、一年程して歩きだすことを長い経験集積の結果わかっていてあせらなかつたんですね。今は百日たつて首が座らなかつたり、一年たつて歩きださないと非常にあせってしまいます。小学校でも、一年生の時字の読めない子、二年生の時掛け算のできない子に対して先生・親とも非常に困ってしまい、しまいには子どもがどこかおかしいのではないかと考えだすらしいのです。あせらなくてもいいんです。子どもは自然に覚えていくのですから。

歩くことができるということは、直立歩行ができるようになるということ、そのためには体を支えるだけの骨盤の発達が必要なんです。人間は熊より二倍半の骨盤を持っていると言われています。上体を支えるだけのこれだけ大きな骨盤の発達、さらにはそれと平行して頭蓋骨・背骨・あばら骨・肩胛骨の発達が一年のうちにジワジワと進んでいるんです。

ね。そして突然ヨチヨチ歩いてみせるわけです。他の動物は体が全て完成して生まれ落ちるわけですが、人間だけはそうではなくて、ただあらゆるものへの可能性だけを持って生まれてくるのです。誰も初めからものを口の中に上手に入れられるわけではありません。子ども時代から何百回、何千回と顔じゅうベタベタにしながら訓練してきて、皆様の様な達人と呼ばれる域に達するのですからね。こうして人間の業が備わった上に、技術の業、芸術の業を人間は身につけていくのでしょうか。

一歳のころには、アルキワイの他にブタオシモチと呼ばれる言葉も残っています。これは一年にもなる前から元気に歩きだした子どもたちには、この世はせちがらいのだから早く歩きださなくてもよいよと餅をぶつけた風習なんですよ。

三歳になります。昔は着物を着ての生活ですから帯をこの時初めて締めるんです。それでオビハジメをすると言います。これには二重の意味がありまして、一つは社会的承認でもう一つは子どもに自分の成長を認めさせるという意味です。この時期というのは一番しつけがきく時期でもあります。このしつけの中でも最も大事なものが食事とウンチしつこを自分であるようになるためのしつけです。これは大変な技術教育ですよ。そして又大変な感覚教育でもあります。

おしつこを何度も漏らしながら、やらなければならぬ時を自分でわかるようになっていくからです。ハイ、以上で前子ども時代における日本人のものの見方をひとまず終えて次、子ども時代に入ります。

### 子ども時代

子ども時代というのは直立二足歩行をほとんど完成させる時期です。この時期子どもは非常によく転びます。反対に大きくなった大人が転ぶということは少ないでしょ？ それからこの時期七歳から十五歳というのは今の教育に照らしてみますと、義務教育の期間に対応しています。ということばつまりこの時期は走る、つかむという体の成長と、人類の文化を受けついで発展させる土台をつくれるという時期なんですよ。土台をつくりあげる中で大事なことは、頭をつくっていくということ。頭のあり方を自分でコントロールしていくということ。こうして十五歳がきます。昔は十五歳でふんどしを締めました。誰がくれたというと母方の伯母がくれたので、オバクレフンドシという名が残っているんです。ユモジワイというのはふんどしで、ヘコイワイというのは腰巻です。

つまり昔の連中というのは十五歳で下の方をキチツと締めたんです。だからその辺で成人という意識が芽生えました。現在はこの辺がのんびんだらりとなってしまうました。また



アフリカなどでありました割礼というものが、昔この時代にも行われていました。割礼というものは非常に痛みを伴うので、それを終えたことにより精神的にこれまでと違った自分を意識するようになるのでしょう。

そうした人間の生涯における「ふし目」のようなものが今崩れつつあるのだけれど、発展段階において何もふし目がないまま暮らしていったらよいのだろうかという疑問がここにあります。とにかく人間はこのようにして直立歩行を仕上げ、人類文化を受け継ぐ土台を作りながら、頭の中もつくりかえていったわけです。そして成人に達し、結婚し、死を迎える。死後に関する考え方は先に申しましたのでここでは省略します。

次に今度は教育の問題に関連させ結論にいきたいと思います。

す。さっきでました柳田国男は、戦後二十二年に文部省で最後にだされた歴史の教科書を見てこのように語っています。「この『国の歩み』に書かれた中には、日本の歴史はちよびつとしかない」と。それからこうも語っています。「人間万民が経験することが一つも取りあげられていない。そのことを今の子どもたちに教育する必要がある」。この場合の万民に通じる大事な歴史は何かというと、まず日本人の誕生の歴史、大人になる歴史、結婚の歴史、あるいは葬式の歴史、衣食住に関する歴史のことです。こう彼はその時の談話の中で語り、その後教育改革に入りました。けれどもほとんど実現しないまま亡くなりました。最も重要な教育、万民が必要とする教育をきちんと教えること、これが僕の教育改造の一つとなっています。

僕が親父の死に目にあった時のこと、親父は自然死でしたから脈搏数がしだいに少なくなり、そして夜中にパタッといつてしまいました。夜中ですから葬式屋に連絡はできません。そこで戦争中に出た古めかしい本をひっぱりだしてきて、「どうするんだ？」と調べたわけです。そうこうしてやると肛門・鼻の穴に脱脂綿を詰める、体を拭くことなどを知りました。こんなことは今病院で亡くなれば経験のある看護婦さんがやってくれるんでしょう。病院ならば死者の手を合わせた後、縄で縛っておしまいなんでしょう。けれども家で

はそうはいきません。二時間位手を握っていなければならなりません。

こういうことはどこで、どのようにして教われるというのでしょうか。僕は今の義務教育のどこかで、この人間一生に關する教育を教える必要があると思います。

### 「成長」認識論

次にコトワザと科学的なものを比べてみますと、それぞれ対応していることがわかります。「成長」認識論診集(表1)を見て下さい。例えば⑥八つ子もかんしゃく。八歳前後の子どもでも日本語八千語を持っているんです。皆さんは五万以上でしよう。それで子どもはまだ言葉をうまく操れないのでかんしゃくを起こすんです。又④四十くらがり。これは人間四十前後になると老眼になる人が多いことを言っているんです。そして「七十の三つ子」「八十のちよろちよろわっぱ」など、この位の年齢になると言葉が子どもじみてきます。これは体が弱つていても頭の可能性は残っているのです、訓練を怠らなければボケていかない事を示しています。

このようにコトワザと科学的なものとは対応してしましで、だから僕はこのコトワザ教育を学校教育の中に取り入れていく必要があるんだと思うんです。どこの民族人類部族にも皆ことわざというものはあるんです。けども、日本のことわざというのは軽視されているようですね。何年か前、日本

で名だたる『国語教育』の編集長に「ことわざ教育について連載しませんか」ともちかけたところ、「ことわざ……?」と答えられましたので、僕はそれをあきらめてしまったことがあります。

だけでもコトワザは大変な遺産です。日本に僕の推定でいうと五万のコトワザがあります。そろそろ漬け物つける時期になってきましたね。山形ではこんなコトワザがあります。「菜っ葉は霜降りに、大根は雪の中」。これは漬け物をつくる時の塩の入れかげんです。菜っ葉だったら霜ふるようにパラバラと、大根だったら雪の中に漬けるように一杯にしなければならぬということですね。辞書に載っていないようなコトワザはこの他にもたくさんあります。そして実は僕たちの考えていることは先代からのコトワザを知るだけでなく、コトワザを創作していく教育をしてみようというものなんです。僕自身かれこれ十二年も前になりますが、子どもたちにつくってみてもらいました。自由創作・制限創作といろいろありますが、ここでは自由創作を聞いて下さい。

小学六年生の作品です。「おまわりさんもスラれる」これは頼りにしていた者が頼りにならないことの一面です。

「青い空に黒い雲」「考えは年の差ではない」「目は大きくても先は見えんぞ」「大仏様は一生歩けない」

この解釈は自由なんです。これがコトワザのすばらしいと

表1 「成長」認識論彙集

(前科学上の発見)

- |   |              |   |            |   |            |   |            |   |          |   |         |
|---|--------------|---|------------|---|------------|---|------------|---|----------|---|---------|
| ⑬ | 八十のちうちうわっぱ   | ⑬ | 十ど神主       | ⑦ | ハッ子もかんしゃく  | ⑤ | セツまでは神のうち  | ③ | 三つの槐百までも | ① | 百日のたれっ子 |
| ⑭ | 七十の三つ子       | ⑫ | 十五までは七面変わつ | ⑥ | 十五までは七面変わつ | ④ | 五つ六つは憎まれざり | ② | 二つは愛らし盛リ |   |         |
| ⑮ | 六十の子守目       | ⑪ | 十七八はヤ敷力    | ⑤ | 十五までは七面変わつ | ③ | 三つは愛らし盛リ   |   |          |   |         |
| ⑯ | 五十になれば五十の縁あり | ⑩ | 十九厄ならニ十五も厄 | ④ | 十五までは七面変わつ | ② | 二つは愛らし盛リ   |   |          |   |         |
| ⑰ | 四十くらがり       | ⑨ | ニは過ぎればただの人 | ③ | 十五までは七面変わつ | ① | 一つは愛らし盛リ   |   |          |   |         |
| ⑱ | 三十の尻括り       | ⑧ | ニは過ぎればただの人 | ② | 十五までは七面変わつ |   |            |   |          |   |         |

神話 A.

- (1) 産く子は育つ
- (2) 百日の産く子たれっ子
- (3) 赤子の端のわき
- (4) 子どもの端の用心
- (5) 産く子は育つ
- (6) 子どもの根肉
- (7) 三つ子に花
- (8) 三つ子にがき
- (9) 三つ子にがき
- (10) 四つ五つは七面変わつ
- (11) 産く子は育つ
- (12) 産く子は育つ
- (13) 産く子は育つ
- (14) 産く子は育つ
- (15) 産く子は育つ
- (16) 産く子は育つ
- (17) 産く子は育つ
- (18) 産く子は育つ
- (19) 産く子は育つ
- (20) 産く子は育つ

神話 B.

- ① 青田と赤子ははれり
- ② 可愛い子には清著とせり
- ③ いよいよ子には旅させ
- ④ 子を拾て七十五度泣く
- ⑤ 子を拾て知つ親の恩
- ⑥ 他人の飯には骨がある
- ⑦ 人の飲食のわかれははれり
- ⑧ 他人の飯も食て見よ
- ⑨ 年寄と十四歳は是所がな
- ⑩ 子と年寄は是所がな

神話 C.

- (1) 三十の尻括り
- (2) 三十は男の男
- (3) 三十は女の女
- (4) 三十は人の縁あり
- (5) 三十四は七面変わつ
- (6) 年寄三十五は七面変わつ
- (7) 三十五は七面変わつ
- (8) 三十五は七面変わつ
- (9) 三十五は七面変わつ
- (10) 三十五は七面変わつ

ことです。

お次は小学五年生の作品。「猫も犬にかみつく」「金より命」「うぬぼれは一生の損」「かわいい者はとくをする」

四年生ではこんなものもあります。「百人寄るより三人寄れ」「泥棒も自分のうちには入らない」「暴力団と布団からは逃れにくい」「人生とは階段を登っていくものだ」

これなんかみると、コトワザがただの言葉遊びでなくて思想を表していますよね。コトワザは創造力・空想力の結果なんです。

そして私のもう一つ、教育改造に取りあげたいと思っているものに「弁証法の教育」があります。これは簡単にいつてしまえば論理学です。私たちが正しく願うことに今の教育では何も手助けできてないからです。僕も意識しなかったけれど、家庭科が以上の僕の教育改造論を考えてくれる余地がかなりあるんだなあと今思っています。これで短い時間でしたけれど、私の話は終わりにしたいと思います。

(司会) では講演の内容が新しい出会いを生んだことになり、感想なりありましたらどうぞだしていただいて先生にもう少しお話を続けていただきたいと思っています。どうぞ。

(W) つれが国語の教師をやってまして、人間が生きて働

く言葉をどうやって身につけさせたらよいかと、私ともども非常に興味をもっているんです。

(庄司) 今の教育では社会とか歴史は誰がつくっているかと言っているわけですよね。それは言語についても同じです。覚えることが中心になっています。けれどもそれではいけないくて、社会も歴史も言語も我々がこしらえているという主体性の意識を取りもどさなくてはいいんですよ。だからコトワザ教育や、今全国を風靡している言葉遊びなんか主体性を回復させるのにいいと思いますね。我々が大事にしていたものを、からかうようなやり方でよいから言葉を手玉にしているといくんです。落語家を使う「ものはづけ」なんかもよいと思いますよ。「大きくて小さなものは」(お空に光るお星様)

反対のものを合わせて一方からだけ物事を見ないで、自分の思想をつくっていく、これは弁証法の教育でもあります。その他、花の名前をつくらせたり、コトワザを含む文章を書かせることによって主体性回復のための勉強はできると思っています。

(H) 今の子どもは「戦争中電気がないのにどうやってお米を炊いたの?」って聞きます。私の友達、ほんの十年も年が違わないんですけれど私が知っている地方の民具を知らない人がいました。今の教育は企業からの受け売りの商品しか



教えないような気がします。いたずらに昔を懐かしむのではなくて、生活の知恵は残すべきでないかと思っています。

(O) レジューメの中の覚え書きのところに「④男性本位の側面も見られる」とありますが、この辺についてお話しをお聞きしたいと思います。

(庄司) エー、確かにこのような面が五つ六つのころにはでてくるんですね。僕だけの研究でなくとも。けれども昔の女性には虐げられていただけではなくて裏では全生活権を握っていたんです。食事の分配とか酒づくりの技業とか、だから力を持っていた点も見えて欲しいと思います。といえども僕の理論には女性史の視点が甘いですね。本当は女性のことよく知らないのかもしれない。(神妙な顔つき) ウフフ。

(Y) コトワザの中には生活の知恵といった貴重なものもたくさんあると思いますが、その中には「長いものには巻かれる」というようなお上との力関係を七歳から十五歳といった子ども時代に認めてしまうといった面もあるのではないだろうかと私は思うんです。私たちはそのコトワザのできた時代背景を知り批判的継承をしていかないと、単にコトワザを受け継ぐだけではコトワザを危険なものに変えてしまうのではないかと思うんです。

(庄司) いや、まったくそのとおりです。同和教育をやっている方にはそういった観点からコトワザ反対運動

をする方もいるんです。だけど牛の角をためて牛を殺すようなことはせず、コトワザを検討しながら学んでいくべきだ、批判的に継承すべきだと僕も思っています。確かに昔は、女・聾・啞・盲を差別するようなコトワザがわんさかあります。けれどもこれらの言葉は当時としてはうまい比喩であって、差別とは考えられていない、そうした時代背景のもとにつくられていたんですね。

(Y) 現実問題として親が子どもを叱る時、否定的な面でコトワザを使ってあれをしてはならないとか教えることがあると思うんですけれど。

(庄司) ありますね。それも封建時代の悪いところですよ。やはりコトワザにはタブー的側面がたくさんあるんです。消極面が強調され、権威に対して黙ってそれを通過させてしまふ。しかしそれでは全て権力に追従しているかというところでもない面もあるんです。たとえば「花より団子」なんかは、花を見ずとも団子を食べることに対してお上に意見しているわけです。こうした権威に対して裏側から迫る言語技術はたいしたものだと思います。それでも積極面の足りないと思われるところには、私たちが創造的にコトワザをつくっていくべきいんです。

(N) 新しい男女の役割意識を考える運動でもコトワザ的要素を持ったコピーの役割なんか非常に大事だと思います。

樋口恵子さんなんて、うまいのを考えられるんですよ。「家事仕事、両立させるイイ男」なんてね。昔コマージュナルの「僕食べる人・私つくる人」というのがありまして、それに「行動を起こす会」が抗議し、その後それにかわるものを「家庭科の男女共修をすすめる会」がこのように作りました。「僕も私もつくる人・食べる人」。

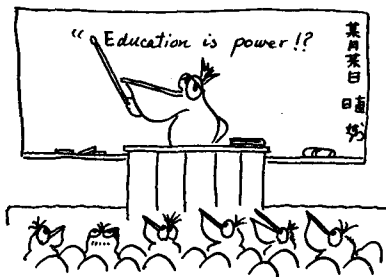
こんなふうにコトワザをたくさん作ることによって運動を支えていけるのだと思います。

(司会) なんかWeの特集号が決定したようですね。では時間もなくなってきましたので、ここで終わらせていただきます。もし今日の講演内容で興味関心があります方は、どうぞ庄司先生の御本で評論社からでている『柳田国男の教育』一度読んでみて下さい。先生はこの本で、柳田国男民俗学をどのように今の教育の中で再創造していけるかの視点からお書きになっています。

(先生のユーモラスは東北弁のおかげで、私たちは笑わされっぱなしの講演会でした。相手を引きつける話術というものの大事さが、やはりコミュニケーションができる一歩であること(特に大教室での)を、改めて考えさせられました。

先生のワイシャツはおろか、ネクタイまで汗でグッシヨリ濡れてしまっていました。私たちに新しいことを説明しようと一生懸命になって下さったんですね。どうもありがとうございました。

記録・奥田真理)



## 庄司和晃さんの

### 講演を聞いて

◆講演自体はとても楽しく、庄司氏の「伝えたい気持」がすなおにそのままにこちらに伝わる気持のいいものでした。ただ、あれだけの講演では、日ごろ学校の授業を持っていな

い僕のようなものにとつて、単なる聞きっぱなしではなく、日常生活の中で習俗の意味を問

い直そうというところには、なかなか結びつけるところにはいかないという気持です。個人的には、もっともつと話を聞きたい。いろいろのことについて話をしてみたいと思います。『菱刺し』にしても「子育ての習俗」にしても、それらの伝統を現代においていかにとらえ直すかというところでもつと討論しないと、単なる「昔はよかった」「古いものを大事にしよう」という念仏に終わってしまうのでは。「弁証法」って、実際には難しいですね。

(兵庫 吉田清彦)

◆あの三日間は、ぎっしりつまった三日間で

した。私の学校は、雪の多い山の学校なのですでに夏休みは終わっていて、二学期が始まっていた。始まったばかりで、二日間学校をあげるというのは、ほんとうはしかなかったのです。でも、参加して得たものが大きく、よかったなと満足しています。活字だけで接していた人たちと、直に話せて、活字の向こうにいた人が前に現れたようです。Weの方針というか、考え方も確認できました。た

くさんの人と知りあえたし。Weのことを、説明ぬきで話せる友もできたし。

Weの中

でも、フォーラムから帰ってすぐ、早速中三の保育(男女共修です)で、「子育ての習俗」のことを話しました。プリントもコピーさせていたでいて。当然ながら、庄司先生のようにはいきませんが、水子のこととか中絶のこととなると、反応が出てきました。

(山形 堀 和子)

◆庄司和晃氏の講演で、自分の理想とする考え、子育て(子へのかかわり)はあるのだけ

れど、日常のフトした場面(日常はそれの積み重ね)での自分のふるまい方や瞬間的な決定は、前科学的な認識に影響されていたと思える。私の今後の課題です。

講演がとても有意義だった。それと全体討論の場と、みんなが発言できる小グループの場と、小グループの意見を全体にもどすような運営がなされるといいのかな、と思いました。

(神奈川 水流恵子)

◆講師の紹介をもう少し詳しくしてほしい。庄司和晃先生の話もつきかかせてほしい。Weで取り上げて下さい。

(一参加者)

◆庄司和晃さん、まさに教師は役者でなきゃなんないね。福田さんに勧められた竹内さんのレッスン受けようかな。

(神奈川 生田和美)

◆庄司先生の「人間は自由を求めている」に印象づけられた。今自由が窒息させられそんな時代に、私たちが最大限の力を発揮しなくては……。

(埼玉 中嶋里美)

◆一番面白かったのは庄司先生のおはなしでした。運営のみなさん、ごろうさまでした。Weの成立目的が見えてきました。帰って、多くの人にすすめたいと思います。自分が真に自立するためにも。(一参加者)

〈実習・実験授業〉

# 伝統の手仕事 「菱刺し」を 授業に生かすには



八 田 愛 子

菱刺しは八戸を中心とした青森県南部地方の農村で、生活の必需品として古くから伝えられた手仕事で、刺し子の一種です。

この地方は寒冷地で綿は育ちませんので、麻を栽培し、着るものを自給した暮らしでした。

麻の種子を播いて育て、刈りとって蒸してさいて績んで織って、と今の私どもから考えますと、気の遠くなるような作業をしないと着ることが出来なかったのです。その大切な衣類を長持ちするように、又保温にも役立つように刺すのは生活の知恵でした。はつきりしたことは分かりませんが、およそ二百年位前から行われていたといわれております。

菱刺しは主に着物の肩、袖などの傷みややすい部分や、たつつけ、三巾前掛の中央布などに刺しました。緯糸にそって偶数に目を拾い、次の段は偶数に目をずらすことの繰返しで出来る横長の菱の中に、さまざまな模様を刺し込み、この菱模様をとり合わせよく並べてゆくもので、いくらでも創作出来るのですが、刺し継がれ残った模様は、二百年もかかって何万人かの女の創り出した造形美とでも申しましょうか、それぞれに美しく、新鮮で、現代的な感じのするものも多くあります。古作から採集した模様が四百種近くあります。

当時は生活の必需品でしたので、女の子が七つ八つになって針が持てるようになると、見よう見真似で刺しはじめ、十

二、三歳にもなると、一人前の刺し手になったということです。

はじめは麻布に麻糸で、それから木綿糸、毛糸が入るようになってからは毛糸で美しい色どりで刺されましたが、交通が便利になって衣類の入手が容易になるにつれ、急速にすたれました。模様には「梅の花」「きじの足」「べこの鞍（牛の鞍）」「矢羽根」「そろばん玉」「柳の葉」「ねこのまなぐ（猫の目）」「すすき束ね」など、身近なものから採った素朴なやさしい名前がついています。

保温、補強という本来の目的に使われなくなつてから久しいのですが、手法もやさしく、和風にも洋風にも使えますので、服飾にインテリアに袋物などの小ものに、日本に生まれ育つたこの美しい手仕事を身近の生活にとり入れたいものです。

模様のとり合わせ色の組み合わせなど、工夫の余地もあり、応用しやすい小模様を、グラフを参考にして、いろいろ試みて下さい。

\*

\*

今日着る服を今日買って間に合う時代になりました。お金さえあれば、好みの物が手に入り、簡単に手に入るだけに、飽きれば、不用になれば、簡単に捨ててしまします。便利になるのは大変よいことなのですけれど、そこには選択はあり

ますが、創り出すよるこびはなくなっています。出来上がりを楽しみに心に描きつつ一針一針創り上げてゆくよるこび、菱刺しという古くから伝えられた手仕事を通して味わってほしいと思います。

豊かな物にあふれた時代に育っている子どもたちに、手づくりの暮らしのあつたことをちよつと振り返ってもらいたい氣もします。

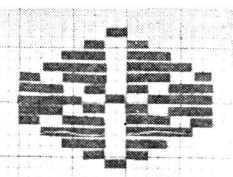
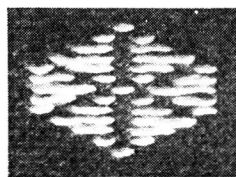
日本人は器用だと申しますが、今も本当にそうなのでしょうか。かつて菱刺しを刺したおばあさんたちと話していると、信じられないような器用さ、ねばり強さ、生き生きとした創造性を感じました。体で覚えるということの大切さを思う時、自分で創る機会を持つてほしいと願います。

#### 技法—フォーラムでの実習

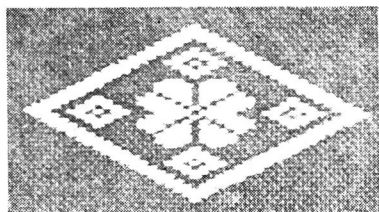
##### 《菱を一つ刺す》

刺す布は布目の拾えるものであれば何でもよいのですが、今回は扱い易いので12cm巾綿コングレスを選びました。袋やエプロンのポケット等に利用出来ます。

刺し方……模様の中心から刺すのと、端から刺すのと二つの方法がありますが、今回は端から刺すことにいたします。布を縦二つ折りにし、端から4cm位入った折山を糸二本抄います。二段目は左右二目ずつずらして六目に、次は同じく十目にと、グラフに従って刺してゆきます。



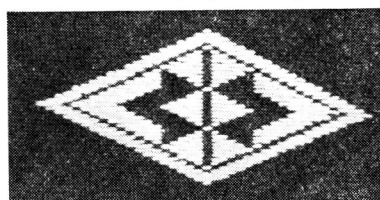
梅の花



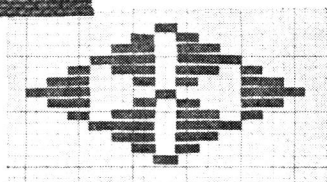
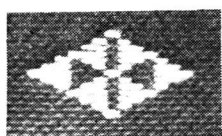
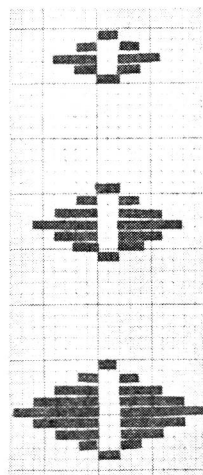
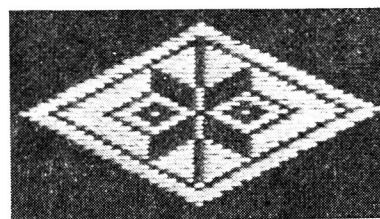
きじの足



べこの鞍（牛の鞍）

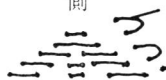


矢羽根



糸のはじめの始末  
 ……玉留めを作らず糸  
 端を3—4 cm 残してお  
 き、刺し終わってから  
 裏側の糸の渡りの少な  
 いところにくぐらせて  
 おきます。  
 糸のつぎ方……糸の  
 足りなくなった時は、  
 糸の終わりを刺しはじ  
 めと同じく裏側の糸の  
 渡りの少ないところ  
 にくぐらせてしまつをし  
 新しい糸は刺しはじめ  
 と同じようにして刺し  
 進みます。  
 注意すること……①  
 布は縦布を使うのを原  
 則とします。縦と横と  
 は糸ののびが違います  
 ので、縦布を使った方  
 が出来上がりがきれい

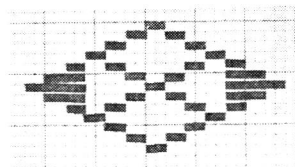
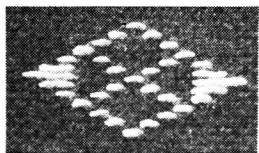
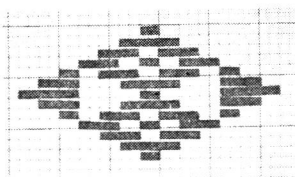
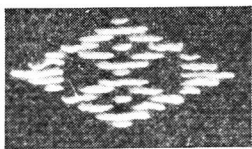
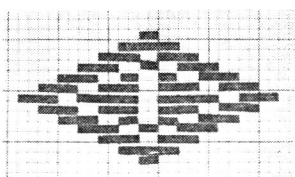
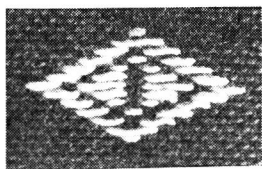
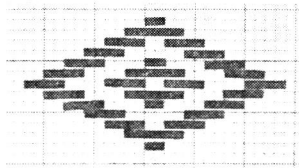
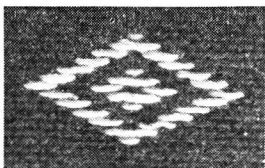
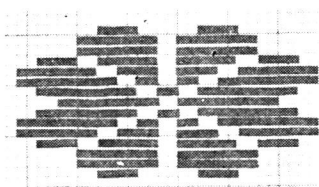
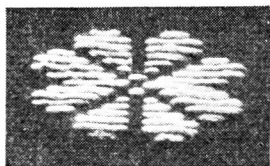
裏側



ゆるめる す。②次の段に移る時：糸がつかないように気  
をつけ、特に次の段に移る時はゆるめるように  
します。

《通し刺し》

菱刺しでは前かけの上部に使われ、のし刺し



と申しますが、今回は通し刺しということに  
いたします。

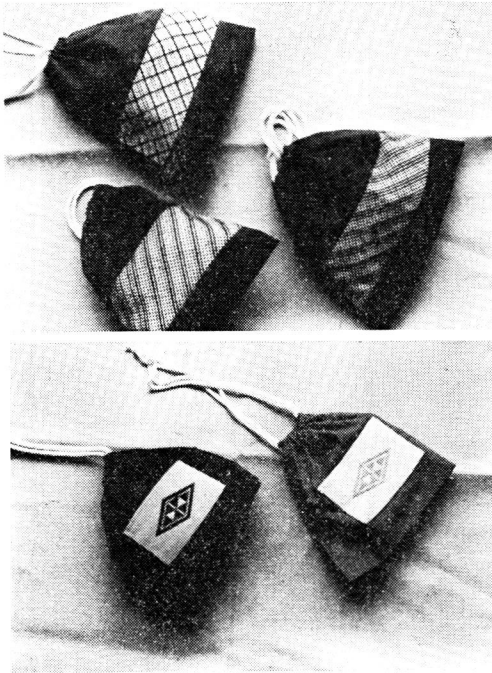
もともとは、緯糸にそって表二目裏四目で刺  
してゆき、一段おいて同じく表二目裏四目とく  
り返し、その表目に糸を通しますが、それに似

た刺子布というのがありますので、それを利用することに致します。この布は大変縮みますので、充分水につけて縮ませてから使用します。今回お渡ししましたのは縮めてありますのですぐ使えます。

この目に糸を通すだけなのですが、通し方を工夫するとなかなか面白いものが出来ます。

自由に糸を通し、カラフルに楽しく刺したいもので、子供はきっと素晴らしい作品を作るのではないかと思います。

この刺し方も応用が広い刺し方です。



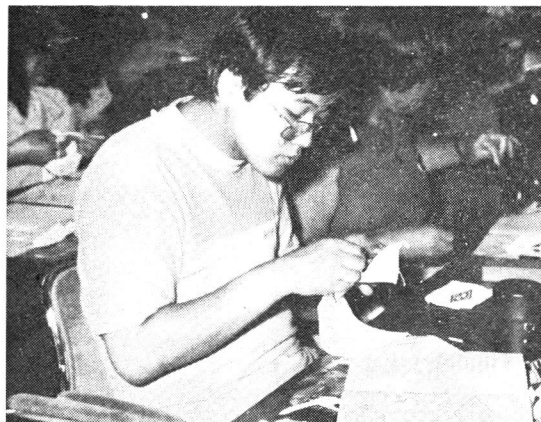
### 〈菱刺しの授業を受けて〉

◆「菱刺し」の授業は、日ごろともに裁縫などを取り組んだことのない僕にとつて、とても興味深い授業でした。フォーラムが終わってからも「作品」にかかりつきりで、東京滞在中に仕上げました。名刺入れに仕上げましたが、われながらまずまず満足のゆく出来ばえで、現在もいつもポケットに入れ、持ち歩き、羨ましがられています。

ただ個人的な希望としては、もっと基本的なところで、参加者男性に対する裁縫の講習（授業）があれば、もっと役に立つのになあと思います。意識の変革は、日常生活の変革を得てはじめて「本物」となると思っていますので。いずれにしても、とにかく楽しい経験でした。（兵庫 吉田清彦）

◆二期、授業で菱刺しをやってみました。中二の女子に対して。スカートの製作がちょうど終わったところだったのです。これは、とても好評でした。楽しくてしかたないようでした。三時間でバッグに仕上げました。中三の女の子は、「私たちも、ぜひやりたい」と言い出して、三学期あたりにやりたいなと計画中です。（山形 堀 和子）





## 中学校で 「保育」を どう扱うか

熊本サークル

中 務 恵 美



### 1、題材 保育—子どもの成長と環境 2、題材観

ア、乳幼児と共に生活している生徒はクラスに一名いればよいほうで、ほとんどゼロ。乳幼児との接触がない、抱いたこともないという生徒もいる。昨年の保育所見学の折、「おねえちゃん」と近づいてくる幼児に、どう対処してやったらいいか、まごつく生徒もいた。指導要領には、「遊び道具、遊び着、間食などを、生徒の発達段階に適した具体的な製作を通して、幼児に対する理解や関心が深められるようにする」とある。

つまり、物づくりイコール幼児の理解としているが、このやり方では、とうてい生徒たちの心をゆさぶることはできない。

イ、生徒の生命に対する安易な考え方、マスコミに毒された男女のありよう、性の退廃が叫ばれる中で、生徒たちの実態は深刻である。私は「保育」の学習に力を入れる。思春期のまったなかにいる中学生たちを対象にしているからこそ取り扱いたい題材だ。特に義務教育の完成年である中学三年生には。

石田和男氏は直立二足歩行期を、第一の難関期とし、この時期（思春期）を第二の難関期と位置づけている。また、ルソーはこの時期を、「人間が真に自立するため

の自我を発見する時期」だとしている。

第一の難関期をきちんとおさえることによって、第二の難関期にある生徒たちに自立へのはたらきかけとなればと思うのである。

今日の社会状況の中で、性、人と人と(男・女)の愛、結婚、妊娠、出産の学習を通して、自分がどう生きていくべきかの判断力をつけ、自立する力の手助けになればと思うのである。

### 3、単元の目標

- (1) いのちの尊さを実感できる力を育てる
- (2) 自分がどう生きぬいていくのかを問い直す力をつける

### 4、授業構成

- (1) オリエンテーション  
保育をなぜ学ぶか  
1時間
- (2) わが生いたちの記  
2時間

出産前——出産——出産後  
母親の気持ち、まわりの人たち、気をつけたこと、など

出産——感動、出産時のようす、名前の由来  
出産後——育てる時のようす、病気、事故、子どもへの願い  
2時間

### (3) 出産

スライド「若者たちの愛と性」を使う

ア、男と女の性のしくみ、性の正しい理解  
イ、生命をみつめ、生命をはぐくむ人間

### (4) 人間の成長(人間の発達)

ア、子どもの成長と環境(グループ学習)  
イ、人間が人間になるといことは

——狼に育てられた子——(本時)

(5) あなたはどう生きるか(女性史)

(6) 作文「私はこう生きたい」

(7) まとめ、(6)をうけて補講

### 5、本時の目標

- (1) 人間が人間として成長していく必要条件を知る
- (2) 今の自分に何が出来るかを考える

### 6、本時の展開

学習活動	指導上の留意点	備考
「狼に育てられた子」について話しあう ●発見された時のカメラ	予想されること ①ことばが使えない ②手、足で歩く ③生肉、腐った肉を食べる ④昼はねわり、夜活動	「写真」

ラの様子

●なぜそのような状態になったか

●人間の成長の記録と「カマラの成長の記録」と比べてみる

●その差の原因は？

●今の保育の状況について話し合う

●社会の一

など

①狼の中にいたから

②教えてもらえなかった

次のことで読みとらせる

①手を使って食事ができる

②コップが使える

③ことばが使える

④三〇くらいの単語が使える

⑤二本足で立つ

①人間は人間の発達にふさわしい環境のもとで人間になる

②人間の集団にかこまれ、育てようと意識的にとりくまれることが必要

③人間は人間になりうる可能性となりそこねる可能性をもって生れてくる

テレビで子守り、ベビーホテル、施設病、など

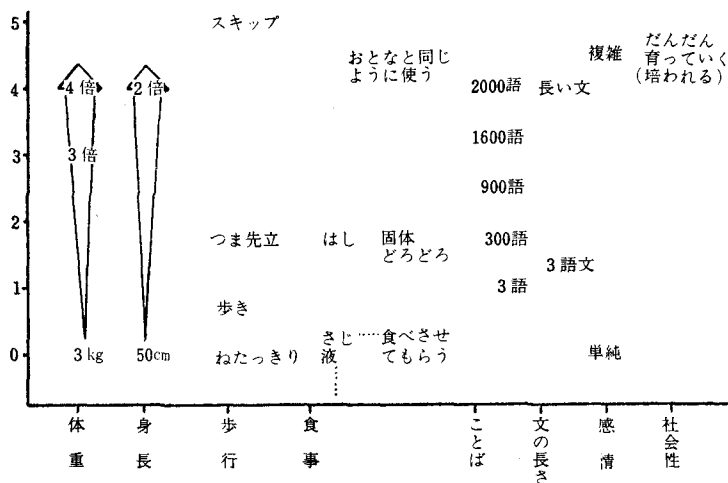
環境をつくってるのは、自分でもあ

「成長の記録プリン」

員であるあなたは、今何ができませんか

ることを考えさせ自分の行動をふり返らせたい

資料1 乳幼児の成長



## (資料2) カマラの年表

シング著『狼に育てられた子』家政教育社 p.134～138 より抜すいしもの。

1920年10月9日——人間の化け物が白蟻の塚から現れるのをシング牧師が見た。

1920年11月4日——シング牧師によって孤児院に連れてこられた。

1920年11月——昼間は床にうずくまって壁のほうを向いている。夜になると戸外を四つ足で走るか、両手と膝を使ってはう。狼のほえ声はたてるが、人間の発音はできない。おしゃぶりを吸い、食物をペチャペチャなめて食べる。腐肉を食べる。子どもたちがそばに寄ると、歯をむきだし、いやな声をたてる。暗闇をこわがらない。

1921年9月21日——アマラの死にさいして涙を二つぶ落として泣く。顔の表情なし。

1922年3月2日——両膝で歩く。つかれると四つ足で歩く。長椅子で、腹をささえながら、自分ひとりの力で、直立の姿勢をとることができる。

1922年5月24日——すねと足指に体重をかけて両足で立つ。

1922年8月——膝で立ち、両手を自由に使って皿から食物をとって食べる。飲み物のときは首をまげ、口を皿につけてペチャペチャなめる。

1922年11月——シング夫人のことを「マー」と呼ぶ。また腹がすいたり、のどがかわいたときは「プー・プー」という。

1923年6月10日——はじめてささえものなしにひとりで両足で立つ。

1924年1月9日——暗闇をこわがる。あちこちと気をくばり、みなにしっかりとくっついて歩く。

1924年1月28日——シング夫人の帰宅をよろこぶ。むかえに飛びだし、夫人に体をこすりつける。

1925年——コップで水を飲む。自分の皿とコップをおぼえる。

1926年1月——30語を使うことができる。

1926年1月29日——年下の赤ん坊と散歩するさい、両足で立って歩く。

1926年6月7日——腐肉を食べることを拒否する。

1926年12月6日——恥じらいを示す。着物を着てからでないと寄宿舍から外へ出ない。

1927年1月14日——45語を使うことができる。

1929年9月——自分の使っている言葉の意味を、自分でよく理解しながら自由に話す。

1929年11月14日——尿毒症のため死亡。

## 授業をやってみて

フォーラムで授業をしました。今、ふり返って、かなりまずい授業であつたと、反省しています。もちろん、参加者の方々が生徒になって、それも教師という職業の方ばかりでなく、今「保育」という題材が、どのような状況にあり、教科書でどう扱われているか、文部省は何を「保育」で教えるようにしているのか、そういう共通理解・共通認識もないままに実施したことからくる困難さがありました。授業をするにあたつて、そのねらいとするもの、なぜ、この授業をするのかを、事前に話し合う場があつた方が良かったと思います。

生徒になられた方も、生徒になりきれないわけですし、生徒になりきることが、またたいへんむづかしいことです。私が授業案を書いたのは免田中学校の生徒たちを相手にするということからスタートしており、そこもまづかつたと思つています。研究会の折「あまりに指導案通りであつた。子供たちの反応によつて授業は当然変わっていくもの……」という意見も出ておりましたが、私もまったくそのとおりであります。しかし、あの時点で、それがどういう方向に行くことができたのか。参加者の方たちが、あの題材について、たい

へんな認識の差があつただけに、そして私の公開授業というものへの対応がはつきりしていない上に、力量不足も加わつて、手厳しい批判になつたと思つています。でも、授業がもしろくなければ「おもしろくないヨ」とはつきり言い、教室を出ていくこともあつてよいという意見は、今もつて私の心の中に入ることが出来ません。

さて、授業の内容についてです。環境の大切さを教えるために、『狼に育てられた子』を使いました。その真意は、人間の子供であつても狼に育てられれば狼になってしまう。環境によつてどうにでもなつてしまう人間の弱さ、だからこそ、環境の一人である自分、環境をつくっている一人一人がしっかりしなければ……ともつていつたつもりでした。中学三年生を対象にした「保育」です。今の社会的状況、利那的な男女の結びつき、結婚、出産に対する問題意識から、将来、父親母親となることの責任を「カマラ」を例に使うことによつて、まわりのかかわりがいかに大事なことを教えたつもりでした。

カマラが人間として獲得していった多くのことを、人間の成長の記録と比較することによつて、「カマラは大きくなつて（一〇歳前後から）から覚えることになつたから、困難で、長い年月がかかつてしまつたんだね。人間は人間の発達にふさわしい環境のもとで人間になるのだから。だから、きちん



と環境をととのえて育てなければ。その環境の一つであるあなたちも、しっかりしなければ」と展開しようとしめた。けっして、両親によって育てられることこそ……と強調したつもりではなかったのですが、質問の中にあつた「片親では子供は育たないということですか」、「両親で育てなければダメなんですか」について、とても考えさせられました。あの展開なら、たしかにここに来てしまうことに、今やっと気づきました。

実は、私はつい先日、同じような公開授業を試みました。そこで気づきました。カマラが一年も狼として育てられ、まったく狼のようであつたのに、一つ一つ人間としてのほたらきかけがある中で、人間らしさを獲得していった。牛歩に近い速度であっても、実に感動的であることを、そこに私は注目し、そこで「人間のすばらしさ」を教えなければならなかつたと思うのです。人間は人間になりうる可能性と、なりそこねる可能性

をもつて生れてくる。そこに人間のすばらしさがあるのだということを教えることによって、今「あなたたち一人一人がなにをしなければならないか」を問わなければならないかたのではないかと。

フォーラムのこと、今、やっと私なりにすっきりしました。一カ月かかりました。正直いって、ふり返りたくない。ふれたくないと思っていました。考えてよかつたと思います。フォーラムに参加してよかつたと本当に思っています。そうでなければ、私は、たいへんなあやまちを繰返すことになつていたと思います。

最後に授業者としてお願いしたいこと、それは参加者の方が「生徒」になられることは無理ではないかと思ひます。授業は授業者と生徒たちのコミュニケーションをこそ大切にしなければならなし、そうでないと展開しないと考えるからです。

# 授業後の話し合い、 意見、感想

(K) 公開授業が終わり話し合いに入りました。司会者の誘いを受けてまず生徒の立場からの質問が出され、討論の口火が切られました。

(K) 私も教師をしておりませんが、今日は中学三年生になったつもりで質問します。よろしいでしょうか。では始めます。

「私には弟がいます。弟は顔に大きないぼがあります。うちは母さんが働いているから時々私が保育園に迎えに行くのですが、『いぼ気色悪い』と園の子供たちが言ったり、からかったりするのを耳にします。母さんは鈍感であまり何も感じないようですが、私はいぼをとってやった方がいいと思います。いぼのある弟をもつてみて障害のある子供の気持が自分なりに少しわかりました。さっき先生は人間が人間によって育てられる素晴らしさについておっしゃったけれど、人間が人間によって深く傷つけられることだってあるのではないですか？」

(H) 同じく生徒として質問します。「僕の家は僕が二歳の時お父さんとお母さんが離婚して僕は父さんに育てられました。三歳か

ら十五歳の今日まで母親がいなかったわけだけれど、僕はその間、普通ならば当然注がれるはずの母親の愛情がなかったわけだから僕の発達には問題があるのでしょうか？」

今のは中学三年生の立場からの意地悪な質問だったのですが、それに関連してお聞きします。第一点は先ほどの授業は狼に育てられた子と正常な成長過程をとった子供を比較して環境の重要さを指摘なさったわけですが、免田中学では欠損家庭が多いということで、そうした子にはどういう対応をとるのかという点、第二点は例えば障害児、ダウン症児の場合はカマラの例のように十五〜十六歳になつてようやく自分の排泄ができるようになるということがあるわけですが、そうした障害者の発達過程とカマラの発達過程との対応関係をどうとらえるかについてお聞きします。

(Y) 僕が育った家庭は、初期のころの共稼ぎ家庭だと思いますが、母さんが小さいころから働いていて家に帰ると誰も遊び相手がいらないし、弟は祖母に育てられたのですが、僕は子供のころからいじけていましたから(笑)家庭はいいものだという意識を持たずに大き



くなくなったわけですから。そこで現在家庭を持つことが非常にヘタクソなのがわかって、もう結婚なんかしないと公表したんですが(笑)。

中学生と身近に接する機会がないのでわからないのですが、保育を教えるということとは、彼等が将来保育をする立場になることを考えて教えるのか、それとも現在、保育される立場として教えるのか、その点がこの授業の構成の中ではっきり読みとりにくいのですが……。おそらく後者、つまり子供の立場からと思うのですが。その場合、保育という言葉の意味が、我々が日常使っているものと少し違う気がするのですが……。もう一つ授業の進行の中で気になったのは、いわゆる保育の大切さを強調すればするほど、今世間で言われているような正しい家庭の在り方というような方へ、うまく利用されるのではないかという点です。保育を語るときに、家庭というものをあまり強調せず社会的・全体的な視点から新しいヒューマン・コミュニケーションを作っていくという発想を持たないと、従来ある一番手とり早い形の家庭の方へもう一度引きずられていく気がするのですが。また従来の家庭教育の中にはお父さんの役割が十分に強調されるチャンスがないと思います。

す。男のする保育というのか、これまでの役割分担をこわした形での大人と子供の親子関係、そのあたりを中学校の教育でしてほしいと思います。

(A) 生徒の立場から一言。カマラの話が一段落して、先生は人間らしい環境で育てるのが大切だとお話しになり、保育の現状がいける問題を抱える中であなた方は何ができるのかと問われましたが、生徒として現状がどういう状態でまだどうあるべきなのかについて考えがない状態で質問を受けたのでよくわかりませんでした。また児童憲章で「子供は家庭で正しい愛情をもって育てられるのが望ましい」という点を見ると、子育ては家庭で母親がするものというように短絡してしまっているのでは疑問に感じました。ただ授業案を見せていただいたら、保育の現状について班で話し合ったり調べたりという時間が出てくるので、この部分は実際の授業ではふくませられる所だと納得しました。このあたりを重視してやっていただけたらと思います。

(丁) 市民の立場からの感想です。先生の話をうかがっていて間違っていることはない

と思うのですが、ただ、聞いていてもつまらない、おもしろくない。前に座っている生徒はよく怒り出さないかと感心しながら見たら聞いたりしていました。

例えば児童憲章を授業でとりあげ、その内容と自分たちの生活がいかに離れているか、その原因は自分たち自身も作っているのだと言っているのですが、そう言われたとしても、中学生にせよ、また我々大人にしても、「離れている。それだけだよ」という感じで、授業を聞いていても自分たちの生活とかかわりのあるところで考え方なり生き方が揺さぶりを受けないという気がします。

先ほどの質問にあった兄弟のイボの話などは、非常に具体的に生きていく上で切羽詰った問題だと思うのですが、授業ではそういう切羽詰った問題がこちらに伝わってこない。やはりこれは問題ではないかと思うのです。今日生徒になった人たちがどんな気持ちで聞いていたのか、またどんな気持ちで聞いていたと先生は考えているのか、ここを考えないと、いくらもつともなことを教えたとしても、生徒はおれたちと関係ないと無視するか、騒ぐか、いい子ぶるか、その三通りのどれかだと思うのです。やはりこれは基本的な

問題なので指摘しておきたいと思います。

(K) 中学の教師をやっています。今の授業についているいろいろな立場からの意見や感想があるようですが、討論の観点について一言。授業はまず第一に教師が教材を選ぶ、とりあげるという観点があります。第二に教材をその教師なりにとらえ直し、構成し、導入・展開・まとめの構造を作ります。第三に教材を教える力、演技・演出といった点が大事で、ここで初めて素晴らしい教材も活きてくるわけです。さらにもう一つの重要な点としてその時の子供の状態、反応のしかたが意味を持っています。非常に立派なことを言っても子供たちの認識が高まっていらないとか、上すべりな知識でまとめがされるとかいろいろな場合があるわけです。それから最後に教師は子供が意識したこと、学んだことをまとめる必要があると思います。以上のように討論の観点を整理して、例えば保育のとりあげ方が問題なのか、子どもの意識づけのしかたか、あるいは班討論の指示のしかたが適切かどうか……等、どの点についての発言か質問かを分けないと討議は深まらないと思います。

(U) 高校の教師をしています。この授業

案では二時間目に「わが生いたちの記」を書くところありますが、私自身家庭科を教えていて気をつけねばと思うのは「生いたちの記」を書ける立場の子とそうでない子とがいることです。母親が早く亡くなったとか、事情があって出産前の気持が聞けない場合、生徒がどんな気持で授業を受け宿題をするのか……。

反論はあると思いますが、私の場合「私の家庭」とか「生いたちの記」は書かせたことがないんです。熊本の場合は母子家庭、父子家庭が多いというお話がありましたし、いろいろな場合にこうした題で書かせるのがいいのかどうかを慎重に考えていくべきではないかと思います。御意見をお聞かせ下さい。

(K) 男女共学で保育を学習しているということなので、男子がこの授業を受けていたらということ一言。男子の生徒は父親になるのであって母親にはならないわけです。私も教師をしています。いろいろな問題をかかえた子のうち、特に女の子は大抵「お父さんなんかいない」と言うんですね。父親の存在感がうすいわけです。けれども共修で保育を教えるなら父親の在り方をもっとクローズアップさせて母親と対比させるとか、そう

いう観点からとり上げていかなければ保育というのは男子にとって一番興味をそそらない所になるのではと思います。やはり父親の在り方を保育の中でどういう風にとらえるかは家族の扱い方といった問題へも広がっていくと思うのですが……。そのあたり疑問を持ちました。

(S) 保育の内容と全然関係ないのですが、黒板に書いてある言葉がどうにもひっかかるので言わせていただきたいと思っています。man makes himself ですが、こういうのを見るとアー私は入っていないんだなと思ってしまふんですね(笑)。そう考えるのは狭いという方ではないながら、やはり man が人間を代表しているのはまずいと思うのです。それともう一つ、班というものに對する拒否反応みたいなものが自分の中にありまして。小学校も中学校も班ばかりなんですよね。実験などの場合は止むを得ないとしても、個人の意見を発表する時は個人単位でいいのではありませんか。班を組んですることの良い点がありましたら出してほしいのですが。弊害ばかり見ている気がしまして。

(翌朝、司会者から、昨日の授業で出された問題点について、夜、宿舎で話し合われた内容もふまえて要点を整理しながらの説明がありました。きのうの問題を掘り下げながら今日の問題につなげていきたい——との司会者の問いかけを受けてさらに二、三の感想や質問が出されました)

(F) 司会者がきのうの授業についてうまくまとめたと思うのですが、きのう僕は前から二、三番目で授業を受ける立場だったのですが、その授業を受けるという設定のしかた自体に無理があったと思うのですね。

僕自身は家庭科教師をやっているわけで、そこから離れて中学三年生になってみると言われても、絶対に教師という部分は抜けない問題だと思ふし、人間として今の段階でどうものをとらえるかというレベルでものを考えざるを得ない。それから授業自体の問題として、相手が中学三年だからとか、大人であるとかそういう問題はあまり関係ないという気がする。我々はいつも子供と向かい合っているわけで、その相手と自分との関係が現在どうやって作られているかをまず見なくては行けない。熊本の人はすごくやりにくかったと

思うのですが……。ただやはり自分の目の前にいるのは大人なわけですよ。で、そこにいる大人に対して話しかけていくべきではなかったかという感じがします。指導案はあくまでも指導案であって、そこで違う問題が出るかもしれない。指導案通りにいかないことなどいくらでもあるわけで、そこで出た問題を大事にしていかなければいけないのではないかとという感じが僕はしていたんです。

それからきのうの発言しようとして言えなかったことは、もしアマラとカマラがあそこて捕まらなかったらどの位生き伸びられたかということです。これはすごく興味深いことです。捕まってもアマラは一年ちよつと、カマラは九年位生き伸びたわけだけれど、果たしてどちらの方が生き伸びたのか、もちろん単純に長く生き伸びればよいということではないけれど、狼の社会にいたことと、人間の社会にもどされたことを比べた時、果たしてどちらの方が彼等にとって幸せだったのか価値があったのか、実はそういった問題をきのう話し合ってみてみなかった。それでそういうことを言っているのかいけないうのかと、実はジリジリしていたわけで、すごく消化不良をおこしたという感じがしました。

(F) きんのうやはり生徒になって最初に写真を見せられた時、私は鈍感なものですから、どういう展開になるのかちよつと想像がつかなかったのです。班で皆で話し合ってから、今度は狼の社会で育てられた子が人間としての行動をどういう順序で獲得していくのか考えさせてもらえると思ったのです。そうしたらパツと答を出されプリントを渡されてしまい、これは多分、時間の関係もあったのでしようが、おもしろくなさそうだと思った途端つまらなくなりました。

その後、Tさんがよく我慢していられると怒りましたけれど、ここであつたらないと言っているのかどうか、その辺が自分自身解放されていなかったということもあつて、黙って授業を受け続けてしまい、最後に児童憲章が出てきて何か書きなさいと言われたけれど、全然書けないのですよね。書くこととするとすごく無理があつてメチャクチャなこと書いてしまったのです。授業そのものがいったい何をねらっていたのかよくわからなかったというのが正直な感想です。

家族ということを考えた時、あとでYさん、「ひとり歩きの会」の方ですが、自分たちはひとりいくということをおっしゃっ

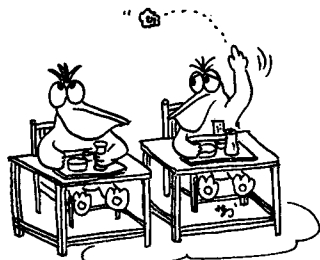
て、家族をつれあいとの関係だけでとらえて、いらっしやるのかなと疑問を持ちました。アマラとカマラにとつては狼もちやんとした家族だった。それを人間という、シング夫人を中心とした新しい家族の中に連れてこられた。どちらの家族がよりよかったのか、幸せだったかは言えないけれど、狼の社会でも母親狼によつて十分愛情をもつて育てられたという気がします。それを人間の方がよかったですと頭から決めつけて授業をもつていかれたのではないかという疑問が残ります。

それから一般にシングルかそうでないかという問題のときに、シングルの方も両親はいるわけで、家族と全然関係なく生きられる人間はいないと思うし、いろいろな家族のありよう——親と子、つれあいとの関係、シングル同士の男と女の関係とか——があるわけです。また我が家などでも彼が夜遅かったりすると私と子供だけの母子家庭になることはいくらでもあります。それから両親そろつて形は整つても内実は欠けている家族の問題など、昨日熊本の先生がそれを欠損家庭という言葉で表してしまったのは問題あると思いますが、私たちが見ていく時にかかわりの中身で見ないと、問題が言葉の上でからまわりす

る気がします。

(K) 「ひとり歩きの会」の代表をします。昨日の授業で、私は子供もいないし学校のことはよくわからないのですが、チームを作られた方、どの位の子を保育の対象にしているのでしょうか、就学前の子を意味するのなら、中学三年の子がそんなに年の離れた兄弟を持つことはほとんどないので、近所の子やいとこなどが対象となるでしょう。ところが授業案の「わが生いたちの記」をみると、自分の病氣・事故といった項目があるので、中学三年までの年齢も対象化されているのかなとも思い、授業をなさった方が保育をどの辺に置いているのかをうかがいたいと思います。その置きかたによつて、私は地域の問題をとりあげたかったのですが、そこまで広げていいのかどうか、昨日はその辺をお聞きしたかったと思います。

(記録・荒井紀子)



## 生徒になってみて

〈おとなとして〉

◆まず大切なことは、自分の生き方や社会のありようなど、現状がこれでいいのかと疑問い続けてゆく姿勢を持つことだと思えます。わたしをふくめて、「すべての児童の幸福」はそこから出発するのだろうと思います。

授業の最後の最後に「Man makes himself」を引用されて、人間のすばらしさをピシッと押さえられたのでホッと安心しましたが、授業中ずっと心に引っかかっていたのは、この伝でゆくところある危うさが残る。それは①「障害者」は「発達」の機会を失ったなりそこね人間」ということになるのではないのか、②もっと極端に言えば、「カマラの狼人間」というふうになってしまふぞ、ということでした。つまり「カマラの年表」と「乳幼児の成長」の比較ということは、一歩まちがえば（異常）と（正常）の比較ということにつながってゆくのではないか、ちよつとこれは危ういぞ、発達心理学の限界はまさにここにあるのではないか、などといういろいろ考えながら授業を受けていました。たいへんむずか

しい問題を学んでいることだけは確からしく思われます。

あるいは「カマラ」を「障害者」に対応させて考えること自体まちがっているのかどうか。

（神奈川 植垣一彦）

◆私も「狼にそだてられた子」を高二の保育の教材に使いました。本を生徒に読ませたところ、生徒の関心は「どうして狼に拾われたの」「可哀想に」というような、その地域の未開発性にびっくりするというようなところがありました。私は「読ませた」ということだけでよしとして、「けものは人間に育てられても人間にはならないが、人間はけものに育てられるとけものになる」と簡単にまとめ、「けもの」とは、に注釈を入れました。

今日の授業も、いつかこの本を読み通す時があると思いますが、その時生徒がどう考えるか、教育の効果はない目でみる必要もあるので、教材選択という意味でよい授業であったと、私の展開の仕方は違いますけれど今後の参考になりました。（兵庫 大村芳寿校）

◆「狼に育てられた子」は動物学者間ではウソではないかと言われています。この事実を知っていたかどうか。新聞にものったことがあります、そのような科学的根拠のあやし

いものを科学的根拠をもつものとして扱ってよいものかどうか疑問です。

（高知 菊地るみ子）

〈中学生になってみて〉

◆私たち中学生は小学生時代から一個の人間として尊ばれたことはなかったように思える。個性豊かな教育をというけれど、実際は集団の中の一つの点になることばかり求められて来た。今の小学生だって同じだと思う。でもこのままでは私たちは人間として幸福に生きていけない。私ができることはないのか。ただ受け身で生きていくのではなく…。

（一参加者）

◆先生は「保育の現状を考えると、憂うべき状態だ」（ちよつと表現が違ったかも）とおっしゃったが、どういう保育がよくて、今どうなっているのかもっと教えてもらいたかった。そうでないとい、何をできるかもわからないよ。児童憲章には「家庭で正しい愛情と知識と技術をもって育てられる」とある。（なるほどそうかなー）やっぱり保育って大切だとカマラの話からも思うけど、そうしたら、孤児院や保育園で育つ子はかわいそうだね。

（東京 わだやすこ）

## 保育の授業を 参観して

〈熊本サークルの一人として〉

◆フォーラムに参加している間は、なにかしらピンとこないいだちを、自分の思いとつながらないもどかしさを感じていました。それはなぜなのか、考えてはみるもののわからない、そんな状態だったようです。

帰りのブルートレインの中で、なんとなくわかってきたような気がしてきました。

一つには、自分のフォーラムへの参加の姿勢に問題があったのです。ある民間団体の研究会に参加した折、実行委員会レベルで討議の方向性が事前に打ちあわせてあるらしく、参加者の意見や思いが全体で深まっていかないもどかしさ、当日持ち込みのレポートは報

告させるだけで、司会者が前もって決めてくれるらしいレポートを中心に討議がすすめられていく奇妙さを感じました。

今年のフォーラムで、特にシンポジウムの折、一つ一つの発表はわかるものの、全体とつながつていかない、さらに飛びかう討議も宙を飛ぶ感あり、自分の日常と家庭科をどう切り結んでいくのか、いけばいいのかわからない……。発表が、討論が、自分の日常や実践をふまえてなされればいいのに、特に聞き手の意見発表は……とか思っても、黙っていた自分。フォーラムは、私もすべて創る一人であったはずなのに、傍観者でいたこと。「フォーラムで、うんと勉強させていだこう」と、相互に学び合うというより、与えてもらうことを求めていること、ここに問題があったと自己批判しています。

二つめには、フォーラム全体で求めているものが、自分のものになっていなかったと思いがちでした。

斎藤次郎氏の「学校を解放しよう」、シンポジウムの「学校はよみがえり得るか」、一つ一つはまあわかるものの、これをなぜ新しい家庭科の創造をめざすWeで取り上げるのか、恥ずかしながらピンときていなかったの

です。荒れている子どもたちや学校という現状は知ってるつもりでした。でも、まだ校内暴力とか、子どもが授業を放棄するとか、授業が成立しないなどという状況が少ない熊本にいる者として、自分のこととしてとらえられなかったのです。

でも、なぜ子どもが荒れるかを考えた時、子どもたちの上に覆いかぶさっている「管理」のひどさに気づき、見えてきました。子どもたちは、教師の「力」によって、大人の「力」によって押さえつけられている。息もできない位……という状況があると気づいたのです。その「力」は、いわれている体罰などという名の暴力もあるし、評価権を握っている教師の言動（子どもの側からは精神圧迫になりますから）など、多様な形で存在しているのです。子どもたちは、周りからの圧迫にあえいでいる。それが今の子どもたちの現状なのです。それは、熊本にもみちみちています。そのことを家庭科の授業にひきよせて考えてみた場合、子どもにとって授業そのものの「管理」体制の一つなのです。教師の暴力、制服、校則などと同じように、いやそれ以上に、子どもにとって「管理」体制が押しつけられているのが「授業」なのだ、と

思ったのです。

そんなことに気づいたら、やっとフォーラムの中心課題が見えてきたように思いました。Weの創刊をよびかける言葉にもあったように、「子どもたちはあえていっている」のです。そんな子どもの現実を解放する「家庭科の授業」を私たちは創らなければならないのだと……。

そんな視点で考えてみると、今回の熊本からの授業提案は、参加者の求めているものとはほど違かったのだな、と。それであんな反応になったのだな、とわかってきました。この点、私もは、まだまだ教師の「教えた」という意識が先行して、授業内容を決め、実践しているようです。「子どもの生活土台と切り結ぶ」という言葉は使っていて、教師が教える者、子どもが教えられる者という上下関係を常に前提としている、と思いました。

こんなふうに、フォーラムに参加したことをまとめて、学生たちとも話をしました。

「子どもと共に学ぶ」「子どもから学ぶ」と普段口にはしているものの、「教師」という殻を脱ぎきれない私たち……。私はこう思うのよ」とか、「私もよくわからない」の一

言がなかなか言えないのですね。

「子どもの問題状況を改めていかねばならない教師としては、やっぱり教師という『力』が必要……裸になってやれるのだろうか」という発言もありました。「人間と人間としてのぶつかり合い」の中に教育があるのじゃないかな。そのことは大学生を相手にしている私の場合と異なり、中学生まではできないのだろうか。そんなこともないだろうけど、私は思うのですが。サークルに参加した約二〇人の半数ぐらいいは、今後の自分の課題としてとらえたのではないかと感じました。「欠損家庭」の話も出ました。「欠損家庭」という言葉を使わなければならない、ととらえている人がまだまだいるように思います。言葉

じゃなくて「家族」や「家庭」のとらえ方なのですが……。この点、サークルの中で、以前から主張しているのですけど、「欠損家庭」の私が言う、自己弁護にしかとられない現状があるようです。大学の授業中でも、同じ雰囲気です。これも今後の課題ですね。

何はともあれ、今回の経験は勉強になりました。「教育内容の決定権は国民の側にある」という主張をする以上、教育内容も含めて、市民層から広く認められるものを創っていく

べきだと思います。そういう意味で、今回参加された、いわゆる家庭科や教育の専門家でない市民の意見を大切にしないといけないと思っています。

ただ、市民が参加するWeであるから、次回実験授業をやる時は、現場の状況、その実践に至るまでの授業の流れなど、説明を加える必要がありそうに思いました。そして、もっと討議の時間も必要なのでは……。個々の状況があまりにもバラバラな場合、ある程度基盤を共通にしないといけない、噛み合いにくい所が多々あるのではないかと、思っています。

(熊本 桑畑美沙子)

#### 〈家庭科教師として〉

◆熊本サークルから報告された保育学習のねらいは、従来の保育の観念を拭いさり、①ひとりの人間の誕生と育成に最もかかわり深い家庭のあり方、家族関係について考えさせていくこと、②幼い命についての認識―人間の成長とはどんなものか、幼い命に自分は、そして周囲、社会の大人はどうかかわればよいかなど―を深めさせること、③中学生になった今、これまでの自分の生育歴をたどり、みつめ、自分は人間の成長過程の中のどの位置

にしているかを自覚させるとともに、今後の生きる展望をもたせることによって、人間的自立への“力”を養わせる。ということであつたと思います。

人間の発達を学習を通して、①自己をみつめさせること、②家族関係をみつめさせること、③自分の将来への展望をもたせること。という点で日ごろ私たちが保育の指導の中で目ざしていることと同じであると思います。また特に、生徒に自分の生育歴を書かせることについての話が あつたと思いますが、そこで中務先生が、自分のおいたちを書くこと、語ること、そういう力をつけさせるためにも書かせる必要があると思うと答えられたことは、全くそのとおりだと思いました。そして、このことはサークルの方々が考えられていることを一層明らかにさせたのではないかと思います。私も昭和五十六年度京都府中学校教育研究会、技術家庭科部会の研究委員会の中で、やはりこのことについてぜひぶつ議論し、同じ結論を得ていましたので、先生のお答えに納得できました。

授業構成のところをみましても“物作り”を否定し、独自に授業の流れを打ち立てておられることに力強さを感じます。そして、京

都府では五十六年度の地域部長会で男女共学必修領域を、木材加工Ⅰ、食物Ⅰの二領域に加え、機械Ⅰと保育または住居の合計四領域に拡大することを確認するという先進的なとりくみがあるというにもかかわらず、未だに同じ技家の教師から「保育や住居などわからない」「実技教科なのに理論ばかりではないか」などといわれて、懸命に反論しています。が、そういう“非難”をものともせず、技術・家庭科(家庭科)を“実技教科”の域をこえて独自のものにしていく必要性を改めて感ずることができました。

指導要領にあるように、遊び道具の製作や幼児食の実習などによって幼児への関心を高めるといふようなことでよいのか、またそのようなことだけで生徒の興味関心がひけるのかということは、教師になる以前に指導要領を目にしたときからの疑問でした。そしていざ教師になり指導計画をたてる段になって、いよいよその疑問にたちむかなければならなくなりました。それ以来毎年毎年試行錯誤の連続です。

一年目はまず、生徒に自分の幼児期の記録と、特に家族が覚えておられることや苦勞話などを作文させ、それをもとに幼児の特徴を

とらえさせることにしました。作文紹介にはずかしがりながらも興味をもって学習していたことを覚えていきます。その後人間の発達について、猿からの進化の話をしたり、電車の中で見かけた親子の話をしたりしながら、「幼児期に人間として獲得する力」「遊びの道具の役割」「周囲の大人のはたらきかけ」を重点的にとり扱いました。そして、自分が子供のころ作ったおもちゃを製作させ、それをもって保育所見学を行い、保母さんから話をしてもらったりして、それまでの学習を具体化させていきました。

三年目は人間の発達について、特にその“すじ道”に力点をおいて学習させました。京都府の夏の研修会で、そこに参加したもので即席で製作したビデオテープを使ったりして、「どんな人間でも発達の可能性がある」ということもあわせて学習させました。そして、子どもをとりまく環境について、「狼に育てられた子」について討議し、そこから環境特に人間社会に育つことの意味を学ばせるとともに、ベビーホテルのことなど、社会に目を向けさせていく努力をしました。

四年目は念願の共学が実現しました。この年は自己の成長の道筋を自覚させること



と、生命を尊び守ることについて考えさせ、現在の社会における問題について重点的に学習させました。思春期のもがきの中でいくぶん成長し、節をのりこえた。男女の集団ができあがりつつある三年生に共学（一、二期、半数クラスずつローテーション）で保育の学習を行ったことは、予想以上にこちらの意図する事柄を子どもたちに伝えることができたのではないかと思います。特に彼らが関心を示したのは、自分のおいたちを含めて自分の成長過程を知ることと、それをたすける「遊び」（「学習」）のところでした。特に遊び場が奪われていっていること（生徒たちが幼いころまだ田畑が多く、竹やぶは切り開かれ、田畑は少なくなり、小川は汚れていった）や、集団的な遊びが減り、おもちゃも高価なものが多く子どもが手を加えたり変化させたり創造力を養うものではなくなってきたことなどを現在の問題点としてしっかりとらえることができたようです。学習のまとめに、児童憲章を読んで考えたことをレポートさせたりしました。

熊本サークルの報告についてもどります。意見ということでもないのですが、気になったことを二、三あげておきます。

。保育学習において「製作」そのものは無意味だとは今はまだ思っていない。遊び道具をつくらせるのも、「自分たちが創ってきたもの」とか、「幼児が自分で自由に作り変えたりできるもの」とか、「幼児の発達段階に応じた絵本づくり」など条件を与えていく中で取り組ませることは、「人間の発達」のすじ道を学習させるのに役立つのではないでしょうか。

。「出産」については、学校によっては性教育が特設されているところがあり、そういう場合は指導案ももつとちがったものになると思いますが、重複をさけ、報告にあるような主旨を生かすにはどうしたらよいだろうかということです。

。「女性史」についてはその扱い方が、内容までわからないので意見感想はいえませんが、中学生でどこまで考えを深めることができるかが疑問です。

このようなことを書きましたが、実はこの疑問に自ら答えていこうと思えますし、また新たな視点を得たものとしてこれからの実践に生かしていこうと思っているところです。

京都府では昭和五十六年の地域部長会で、それまでの取り組みの成果として男女共学で

食物Ⅰ、保育または住居、木材加工Ⅰ、機械Ⅰの四領域を府下全校で実施していこうという確認がなされました。しかし、次年度から府教委の姿勢の反動化とともに「男女共学をこれ以上進めることは好ましくない」と指導があり、五十八年度の地域部長会では表看板をおろすという発言など、口頭で指導を強めてきています。このような情勢におかれ、現場の教師が自由に自主的に研究を深め、広めていく場を保障されていたこれまでのようにはいかないかもしれません。半田先生を中心として多くの人々が、先を切り開かれていけることに希望と感謝の気持ちをもって、これからも遅ればせながら後に続いていこうと思います。

（京都 片山菊代）

#### 〈市民として〉

◆普段ほとんど知る機会のない学校現場での家庭科教育の実際の一端を見聞きする機会に恵まれたことが最大の収穫でした。

しかし、まず生徒の役割を引き受けた教師（だけではないと思いますが）の言葉づかいや発想のパターン化（貧困さ）には驚きました。Weに参加している教師ですらこの現実という驚きと失望は、日常、教師という「職業

・立場」の人たちに点数の特別からい僕です  
がさらに「救われない」という気持ちでした。

具体的に言いますと、例えば「生徒」の役  
割を演じた者の口から「直立歩行」とか「言  
語機能」などという言葉がスラッというか、  
つい思わずというか出たのを聞いた時の驚き  
です。会場からも期せずして失笑が起りま  
したが、この「失笑」の意味を、それらの教  
師たちは肝に銘ずべきです。

チョクリツホコウ、ゲンゴキノウ、まして  
やチョクリツニソクホコウなどという、宇宙  
人がコンピュータから発されたような言葉  
を通してしか「目の前の出来ごと」を解釈・  
表現できない人のマカ不思議さ。「両足を使  
って歩く」「ことばをしゃべれる、しゃべれ  
ない」というような日常言語よりも、専門用  
語がついスラスラと先に出るという意識構造  
で、日ごろ、生徒とどういうコミュニケーション  
ョンを持ちえるのでしょうか。

また、例え演技であらうとも、生徒の役割  
Ⅱ生徒の立場に立つてものを考えるという簡  
単なことができない人が、日常、「教師」とし  
て生徒を教えているという傲慢さ、恐しさな  
どなど……。中務さんをはじめとして、  
熊本サークルの人は、このことに對して、鈍

感さに対して、はっきりと憤るべきだったと  
思います。とてもとても残念で仕方がありま  
せんでした。熊本サークルの人たちとはゆっ  
くり話し合うことはできませんでしたが、機  
会があれば、この気持ちをぜひ伝えてほしいも  
のです。

(兵庫 吉田清彦)

◆保育の授業に対し、様々な批判のまきおこ  
ったことは、大変よかったと思います。なぜ  
ならば、私たちは単にすばらしい実践を見せ  
てもらおうというよりも、教育現場の一端をの  
ぞき、それをきっかけに、教師・親・学生・  
市民などが、それぞれの立場から問題を出し  
て語り合うことをWeフォーラムに期待してい  
たからです。

それで、家庭科の現場を知らない人が云々  
の発言は、遠来の講師への気づかいにしても  
残念。むしろ、もっと「現場を知らない人た  
ち」から、自由率直な批判を出して、内容を  
ふくらませていったほうがよかった、と思っ  
ています。

斎藤次郎さんの講演のはじめに、この前日  
の問題を受けて話し合う時間を設けたことは  
その意味で大変によい処置であったと思いま  
す。このように、あるいはもっと、プログラ

ムの運営を柔軟に行える体制は、来年以降も  
活かしていきたいことの一つです。

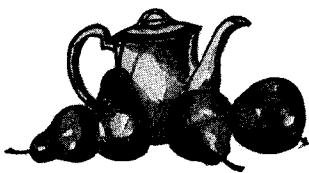
(東京 川名はつ子)

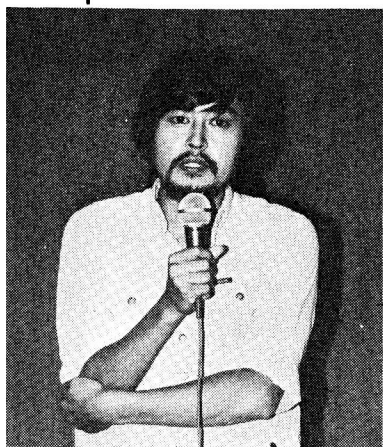
◆授業実践は来年度も設けて欲しい。

各々の職場の人間が集まっている事は、大  
変おもしろく、楽しかったです。

「言い方が乱暴である」とか「せっかく熊本  
から来ていただいたのに」との事で、発言を  
封じることは良くないと思う。何でも言い合  
える仲間でありたいと思います。

(一参加者)





映画

## 「原発切抜帖」 を作って

山上徹二郎

——映画の前に——

今日は。今日は土本典昭が第二作の「下北半島関根浜」という映画を製作中でどうしても来られませんでしたので、かわりに製作をやりました私がお話をさせていただきにかがいました。

今日皆さんに観ていただく「原発切抜帖」が完成したのは、昨年の九月三十日でした。映画を作ろうと決めたのは昨年の春です。どういう時期かと申しますと、反核運動が非常に大きな盛り上がりを見せておりまして、私たち映画を作る仲間にも反核署名が回ってきた時期でした。その署名の呼びかけ人を見ますと、ほとんど私たちと考えを一緒にしない、例えば太平洋戦争の極めて権力的な映画の作り方をしている監督さんたちが名前を連ねてました。私たちにも署名をして欲しいということだったので、『この反核は、反原子力発電も含むのだ』という一行を入れてもらえば喜んで署名しましょう」と申し入れたら、丁重に断わられたという経過がありました。これは予測された事態でしたが、お金もない、力もない私たちが、世の中が反核ムードでお祭りさわぎになっている時に、どうしても身近な問題である原子力発電所の問題を取り上げずにはいられませんでした。今私たちにできることは何だろうかと思慮をしばって考えたのが、自分たちの手許にある公認された情報の中で、いかに反原子力発電ということと言えるかということでした。そこで新聞という情報によってのみ映画を作ることになったわけです。そうは言っても、昭和二十年の八月六日の原爆に始まる原子力関係の記事を全部洗い出してみますと、五千点く六千点の記事になるわけで、一つ一つの記事をあたるだけで相当な時間を要する作業だったわけですが、幸いに監督の土本典昭の手許には一九七〇

年からの九〇冊近い核関係の記事が既にありました。土本は非常にこまめな人で、私たちは「戦後日本の勤勉派」と呼んでいるんですけども、何せ一月の新聞の切り抜きを一日でやってしまう監督さんでして、これに麻布中学校時代の一級違いの小沢昭一さんという絶妙なナレーターを味方に出ることができまして、映画は無事完成しました。この小沢さんという方が又、非常に勉強家の方でした。ご自身が新聞の切り抜きなどを丁寧に行っていたら、私たちの身近な情報の中から庶民史といったものを研究なさっている極めて勤勉な方でして、土本と小沢の勤勉派のコンビがこの映画を作り上げたといっても過言ではないと思います。

でき上がった映画の中に、百四十三点の新聞記事が使われております。でき上がったって一年近くなるわけですけども、私たちにもでき上がりと中身がうまくいっているか、わからない点がたくさんあります。というのは、新聞記事だけで反原発を見せようというのですから、活字だけを中心に映像をしばって構成しているわけです。そうしますと、新聞記事を読むスピードなどというのは、非常に個人差がありまして、皆さんにちゃんと読んでいただくにはせわしなくなっている面もあるかと思っています。各地で上映しまして、欲求不満になるというお話もうかがいます。そうならないように小沢昭一さんの絶妙な語りを添えたり、目を休めていただく意味で音楽を高橋ゆうじと水牛楽団の方にオリジナルで画面に合わせて作っていただいたりして配慮したつもりです。ただ、どうしてもスピードが間に合わない面もあると思いますが、そういう時はどうぞ目をつぶって小沢さんの語りを耳から聞いていただくようお願いいたします。そういう限定的な作り方をしたもんですから、この一作だけでは

私たちの原発に対する思いが晴れませんが、実は今二作目の映画を製作中です。その映画が最初に申し上げた「下北半島根浜」という映画なんです。皆さんご存じだと思いますけれども、原子力船「むつ」の母港化で今大揺れに揺れておりますむつ市根浜の物語です。今年の五月から撮り始めて約一年かかって原子力船「むつ」の問題を中心に、下北半島の海と生活を仕上げたいと思っています。

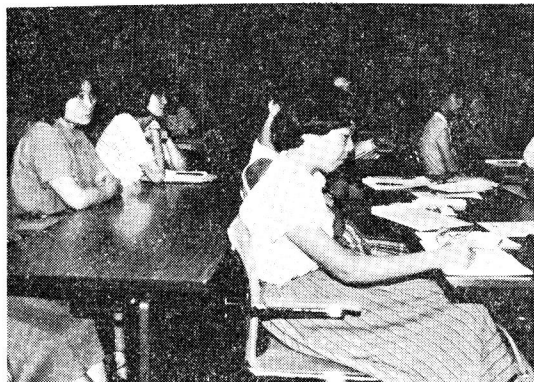
実は、今まさに撮影中なんですけれども、八月七日に根浜の時漁協総会というのが開かれまして、三票差で残念ながら海を売らざるを得ないというところまで追い込まれてしまいました。この根浜では、漁業で生計を立てている人だけが組合員ではございませんで、浜の歴史が古いものですから、農業をやっている、年にたった三日コンブ漁をするだけで正組合員という資格を持っていたりしているわけです。そういう方々にとっては、残念ながら海を売ってそれで耕耘機が買えればもうけもんだといううわさが流れるほどでして、まあ海が売られてしまったわけですけども、本当に海に生活の糧を求めて生きてる人たちの苦難の歴史が始まると思っています。

#### —— 映画のあとで ——

今とっている映画について、もう一つお話しておきたいことがあります。自民党内部でも原子力船「むつ」の廃船論が出てきています。こういった事実がありながら、漁業権放棄が強行されたわけです。自民党の県会議員が総動員されまして、反対派の漁民の家を昼も夜もまわりながら切り崩していく。そこまで固執してなぜあそこに「むつ」の母港が必要なのかということを、現地の動きを見て理

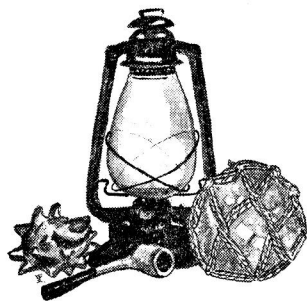
解することができたと思っています。実は、下北半島の大間崎という所に新型転換炉という発電所が予定されています。土地買収は終わっています。それと、東通という所には二千万キロワットの原発建設が計画されています。ここでも漁業権放棄をめぐって攻防が続いていますけれども、ここに原子力発電所が建つとなると、関根浜に欲しいのは原子力専用港ではないかという気がしてきます。原子力船「むつ」にひっかった再処理工場と原子力専用港を下北半島に一つ作りたいということがひしひしと感じられました。

一般の漁師さんたちは、大変生活が厳しく出かせぎに行く方が多いんです。現地に行ってしまうのは、海を売る人たちも含めて、我々というのが正直なところでは責める立場にはないなです。原子力発電所の問題でギリギリの所まで追い込まれた時、何を選ぶかは違いがありますが、ここまで追い込まれなければ、実に豊かに、柔らかく近所付き合いをしている人たちが、お金を間にはさんでまっぴり割れるわけです。子や孫のことを考えて海を売らない側に回って闘う人たちを、映画を通して支援



していくというつもりで、今度の映画を完成させていきたいと思っています。その時には皆さんにぜひ観ていただく機会を作りたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

(記録・福田 緑)





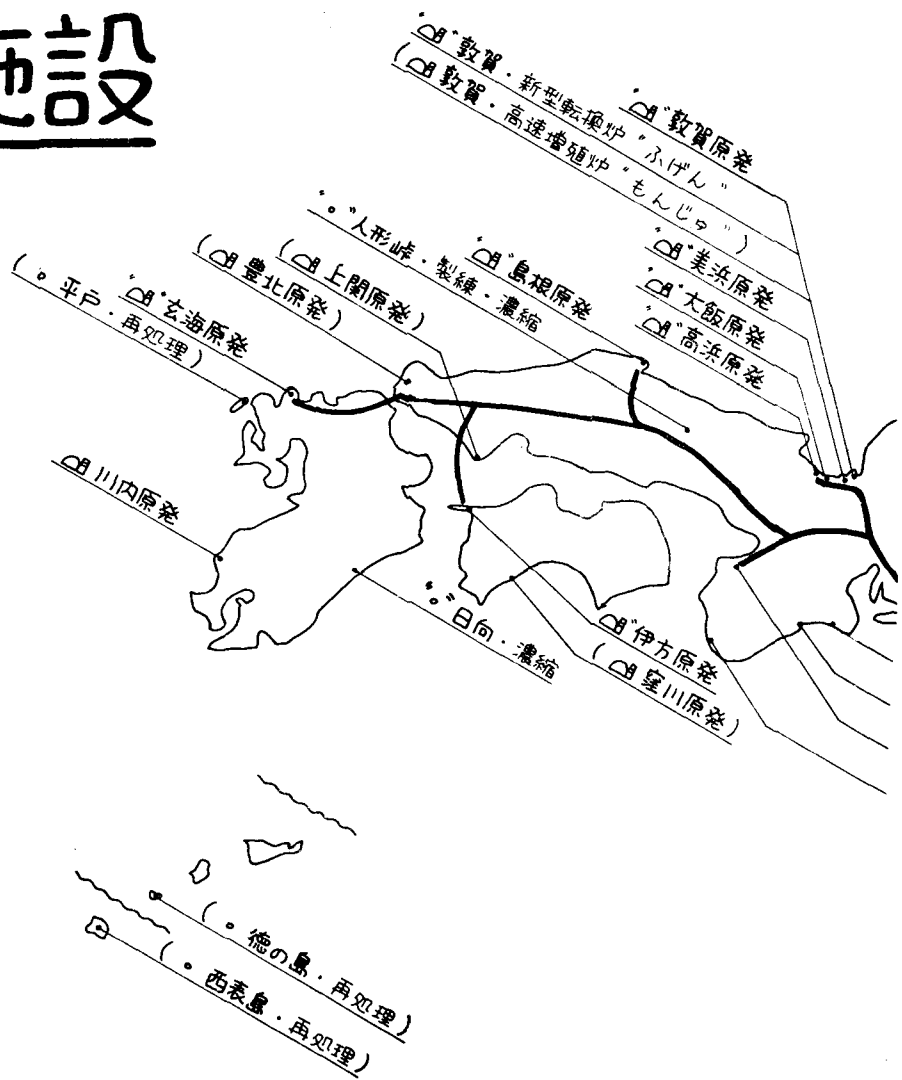
・ 四国電力・伊方原発への核燃料は、東海・燃料加工工場から、海路でも運ばれます。

(『原発切抜帖』青林舎より)

# 日本の 原子力 施設

	原子力発電所	その他の施設
運転中	△	○
建設中	△	○
計 画	(△)	(○)

核燃料輸送ルート



**日本**

● ● ● ● ● ● ● ●  
● ● ● ● ● ● ● ●  
● ● ● ● ● 25  
○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ 10  
**再処理工場！**

**台湾**

● ● ● ● 4  
○ ○ 2

**韓国**

● 1  
○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ 8

**フィリピン**

○ 1

●●●●●●●●●●  
●●●●●●●●●●  
●●●●● 25  
○○○○○○○○○○○○ 10  
再処理工場！

●●●● 4  
○○ 2

● 1  
○○○○○○○○8

01

Number of books read	Frequency (Number of students)
10	10
14	14



ブラジル  
0003  
アルゼンチン  
●1  
002

- 運転中
- 建設中
- ▼日本向ウラン採鉱地



( 93 )

## 山上徹二郎さんのお話を聞いて

◆正直言って映画は眠かったのです。前の晩の睡眠時間が少なかったせいでしょうか、夫も同じく眠かったそうです。でも、前後の山上さんのお話は、要点が整理されていて大変印象深いものでした。私たち当事者でない者にとっては、現象面だけで「海を捨ててお金を選んだ人たち」をどうしても責めたくなくてしまいます。でも、現地に生活している人々にとってはそれは簡単な選択ではなかったのだということが伝わってきたお話でした（その生活の厳しさを説明してくださった部分を紙数の関係でカットさせていただいたのを申しわけなく思っています）。そして又、「むづ」廃船さえ考えている自民党議員たちが、なぜそこまで関根浜にこだわるのかという新しい視点も与えていただきました。「下

北半島関根浜」が完成した折にはぜひ観たいと思っています。

重い問題提起だっただけに、質問を出す人が一人もいなかったのか、あるいは消化するのに精一杯で質問する余地がなかったのかもしれないが、恐らくあの会場に集まった人々の中にも原発には必要悪と考えている人がいたのではないでしょうか。

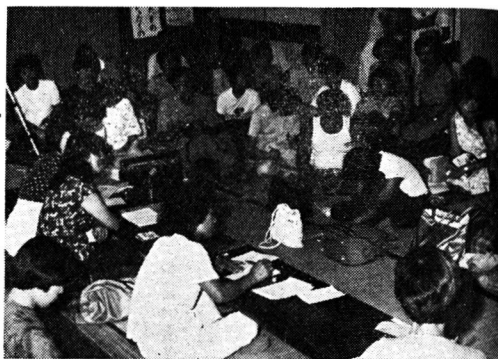
私は三年前に初めて授業の中で原子力発電所について取り上げました。内容は大変未熟で恥ずかしいものでしたが、親たちの反応は興味深いものでした。食品添加物↓合成洗剤↓化粧品↓タバコ↓原子力発電所という順で話が伝わりにくくなるのです（公害・薬害や空気汚染などは実践がないため抜けています）。タバコの害まではわかってくれる親でも、授業をする時まで「原発は必要悪」と考えている人がほとんどでした。私が授業をしたあとで、夏休みの間に放射性廃棄物を太平洋に捨てるという問題がマスコミをにぎわせ、斜に構えていた親たちもようやく原発の問題に目を向けるようになったという状況でした。どうして「原発は必要悪」という考えがこれほどまでに浸透しているのかといえ

ば、政府による大々的な新聞広告も大きな働きをしていたと思います。

授業の後、子どもたちは自由勉強で新聞を切り抜いたりしてくるようになりました。お母さんたちには『原発死』（松本直治著、潮出版）や『原発ジプシー』（堀江邦夫著、現代書館）を貸して読んでもらう中で、知られなかった怒りを書いてきてくれる人も出てきたのです。

便利な生活に慣れ切ってしまったている私たちは生活を振り返ることから始め、子や孫のために海を残そうと苦しい闘いを選んだ人たちと共に、健全な地球を残していくための闘いを何らかの形で担っていかねければならないと思います。そのための資料の一つとして、私も『原発切抜帖』を買いました。目で追いつけなかった分、活字でゆっくりとたどりつつ、自分の力にしていきたいからです。

（東京 福田 緑）



## 〈総括討論〉

# フォーラムで得たもの 得られなかったもの

二泊三日のフォーラムの前身は濃いものでした。それはWe創刊の年の'82年夏の鳩の巣合宿、'83年三月の一周年記念公開ゼミナールを引き継ぐものとして、前回に語り尽くせなかったものを、フォーラムに集ってという意味

をこめて、ウイ書房、Weの会が準備してきたものでした。延べ三五〇人にもものぼる多数の参加者の様々な願いや期待の中で、長時間にわたるフォーラムがもうすぐ終了しようとしている時、総括討論が行われました。約二時間という制限の中でしたが、内容や企画運営などについて忌憚のない意見、そして来年やこれからのWeにむけての建設的な意見が活発に交わされました。それをここにまとめてみたいと思います。

### フォーラムの意義は何なんだ

はじめに、神戸の吉田さんから、このフォーラムにどんな人たちがどのような期待をもって参加したのだろうか。又フォーラムの意図したものとはなんだろうか。そしてそのためどんな形にしたいと仕組まれたのが不明確に終わった。それは、三日間の討論のつながりが不十分であったことが作用しているのではないかという大きな問題提起がなされた。

これを受けて、埼玉の中嶋さん、東京の蔵合さんより、自立した男女、人間らしい暮らしを願う人々がWe発足当時より集まってきている。教師だけではなくいろいろな立場の人が参加できるのがWeの存在基盤であるが、まざり合いをどう生かすかは参加者の問題でも

あるという意見が出ました。

しかし、教師と市民の間にあるズレについての指摘がありました。それは、男女共修の家庭科の実践を求める家庭科の教師の期待も汲まねばならないが、本音が出し切れていないという点や教師がもっとひとりひとりの人間として参加してほしいという要望でもありました。教師が現場でかかえている問題を具体的にもっと知りたい。We誌上で討論された「男と女の自立」の問題や「産む・産まぬ」の問題をこのフォーラムでとことんやりたいと思っ

て参加したとは神戸の市民、吉田さん。参加した家庭科の教師がおとなしく、数少ない男性が多く発言している。家庭科の教師が男女の自立や具体的な生活の問題との接点に在るのでもっと発言して欲しいと東京の市民、長谷川公一さん。

### 参加者も運営に嘴を入れよう

これらの発言の続く中で、全員が本音を語り合い、異なる立場の参加者がとことん話し合うには、企画運営の面でこんなことも可能ではないかという発案もいくつかありました。全体会プラス分科会という形、二日目の講演「学校を解放しよう」とシンポジウム「学校はよみがえり得るか」を一本にまとめ

で討論の時間をもっとタップリとすることもできたのではという具体的な指摘、一日目の夜のフリーの時間を、「〇〇と話す会」としたり、持ちよったパンフやTシャツなどのワークショップを聞くなど、小さな会を参加者自ら企画することもできたのではないかなどの「なるほど案」が、東京、福田さんや、蔵合さん、埼玉、中嶋さんより出されました。なかでも福田さんは、主催者や実行委員に企画運営をすべておまかせするのではなく、当日参加したものがどんな口をに入れて運営に参加するということの大事さ、その中から接近し合い歩みよる討論の深まりが生み出せるのではないかと言われました。そういう参加のしかたは、これからのWeの集いに大きな飛躍をもたらし、WeのWeらしさがますます豊かになると思いました。

「つまらない」を言い合える関係を

討論の深まりということに関して、鎌倉の塚越さんから参加者がどう関係し合うかという点からの意見が出されました。保育の実験授業の後で「授業がつまらない」と発言した彼は、後で仲間から批判されたそうです。せっかく熊本から出てきて授業してくださった方に対してあんな言い方はない、また展開さ

れた授業は、教科書の流れなどに比べて、画期的なものであったのに、水を差す結果になった等々。これらの指摘を受けて彼はぜひ分考えた。そしてなお、そのようなことを言い合える関係を求めたいと発言。

授業を受けている子供たちは、疑問を差し挟むことはできない。そして「つまらない」とは言っても、どこがつまらないのかわからない、言い表せない現実がある。だから私たちは子供や授業を参観している父母の視点から切り込んだ討論をしてみることが必要なのではないか。菱刺しおもしろかった。どこがおもしろいか、うずもれた手仕事を見直すことはどんな意味があるのかといった点を、家庭科の教師だけでなく、皆で考え合ってみる必要があるのではないかと考えたのだ、と。

この塚越発言をうけて、神奈川県立高校に勤めている西山さんから、授業を公開して、いろいろな立場から本当の気持ちや忌憚のない意見を聞くことができるかととてもうれやましく思えた。普段なかなかそのような機会が得にくいので。熊本サークルの桑畑さんからは、討論の時間の短かさに加えて、公開授業を準備する側にとっては、条件設定など事前の打合わせが不充分であったことも

問題ではないか、という意見でした。

さらにシンポジウムの討論が観念的で、もっと具体的な行動にどう結びつけるかが話されればよかったという意見が、熊本の古澤さん、東京の福井さんより。又現場の教師の立場から、相模原の福島さんが現場のかかえる問題点について神奈川県例を出しながら具体的に説明され、生徒や職場の仲間だけの支えだけでは不十分、地域の人たちや市民の支えが強力な力になる、その意味で、卒直な意見が聞けてとてもよかったと言われました。次回にとりあげてほしい内容についても発言がありました。住環境を含めた住宅問題、家庭科という名称の問題、そしてからだをリラックスさせる企画もあいまに入れよう！なんです。

管理固定を否定した保育の場を

Weに集まった人々の最もやさしい関係が示されたのは子供の参加と保育体制に関してでした。口火は、事故などを考えると保育者を用意できたらかったのではという疑問から。なぜか子連れのおやじの参加はなかったことから考え合わせても、まだまだ女が活動する時に子どもの問題がついて回るのが現状なのです。そんな中で、いくつか自分の体験が話

されました。子連れで参加をと思ったが、おとなの都合で参加させることを考えたり、男がめんどろを見ることも必要と思い、置いてきた人。乳飲み児の時から連れ歩いた体験から三歳までは集会の場は子供にとって負担が大きいと考えるが、子供が近くに居る集会もよいのではという人。どうしても連れて来ざるを得なかったが、やはり苦しい気持、お金を出してでも保育の場があればと切なる心情を語る人。

ところが聞いている人の中からこんなことが次々出されたのです。シンポジウムの場合に、気軽に子供が出入ったり、黒板に母親の似顔絵を書いて彼女なりに参加しようとしている姿が好ましく思えた、Weらしい。子供がこういう場に入ってくること、子供をおとなが知ること、うるさいのを承知しながら子供の参加を誰もが受け入れ認め合うことは、子供にとっても、おとなにとってもよいのではないか。武蔵野の読者会でも、小さい子供の参加に、初めはイライラしましたが、母の思い、子供の姿を知り、わかりあうことは自分にとってよい体験だったなど。

そして決定打は、保育室は設けよう。しかし、分離の思想ではなく、集会の場に子供も

入ってくることを、集会に参加のおとなも子供にかかわるといった、管理と固定の思想を否定した保育を考えようという意見です。神奈川県で社会教育の仕事をしている古谷さんのやさしい思想に参加者は魅せられました。半田さんも、保育の問題は実行委員会でも最初から論議してきた。お金を払って専門の人という考えに抵抗があり、交替でも考えた。とりあえず、今年は就学前のお子さんは申しわけないがご無理ではないかと案内にのせたが、おとなにとっても子どもにとってもよい状態をつくり出せるようなフォローラムを、広い視野で考えて行かねばならない課題だと話されました。相模原の長谷川孝さんの「専門家役割分化を克服すべき」という言葉は、この問題のみならず、Weフォーラムのすべてにかかわるものと受けとめました。

出会い、まざり合いを求めて

全体にわたる意見感想としては、神奈川の古谷さんより、高校時代に家庭クラブ全員加入や家庭科の内容で疑問を持った。そのころ家庭科の男女共修問題が新聞などで報じられていたが、今自分が生活者として主体的に生きようとする時、私の受けた家庭科は何だったか。これからどう生きたらよいのかを知り

たかったが、この問題が確実に動いていることを知り、得るところが多くあったと若々しい発言がありました。又大阪の西村さんから、婦人差別撤廃条約完全批准にむけて、家庭科の男女共修を実現せよと文部省にWeフォーラムのアピールを出そうと提言されました。

最後に半田さんからのメッセージを。参加者は、二〇代、三〇代の人が一番多く今までの家庭科教師の集まりに比べて、若々しいこと、特に学生の方々の参加に希望がもてる。学校関係者とそれ以外の人が三対一の割合だが、家庭科関係者か否かをあまり区別することなく、会場にはった横断幕に書いたように、「新しい出合いを求めて」集い、何かがここから始まることを期待した。様々な立場の人のまざり合いをどう進めるか、これからの課題として取り組みたいということでした。

以上のように、出された意見は、Weならではのものばかりでした。次回へのよい橋渡しになることと思います。さらに楽しく、やさしく、そして赤襟々なる出合いを期待しつつ、報告を終えたいと思います。

(記録・芦谷 薫)

## フォーラムと

## “子どもの参加”を

## めぐって

“おとなの集会と子どもの参加”についてフォーラムは大きな問題提起をしました。続々寄せられたご意見を紹介します。

### 〈子連れ参加者として〉

◆最後の総括話題となり、その話し合いが一番身体全体にこたえ、うれしくかつ悲しく、情けなくそして言いようなない感動にとらわれたのは自分ではなかったか……と帰ってか

らもずっと頭からはなれないことでした。

娘を連れていったことで色々な方と話ができ体験でき、更に御配慮ある宿泊施設をいただいた点、そして彼女も他ではできない体験を子供なりに持つことができたことは多くの方々に感謝する他はありません。そして“とてもWe.らしい光景”「ママの顔を黒板に描くことによって会に参加していたのではないか」「子供はとてもしわくわくがままだが、それが現実」という意見にとても救われました。

た。映画の上映中や話し合いの最中、娘が邪魔になり、まわりの方に迷惑がられた時は全く身を切られる思いでした。ましてやシンボジウムの際中に「お母さんお金ちょうだい」とマイクを持っている私のところに来て言った時は、この子を誰かどうにかしてくれないのかしらと一瞬腹立たしくさえたものです。隣にいらした山崎さんに「出してあげたら」と言われて少しゆとりができ、「ああこれもシンボジウムの一場面なんだ」と思い中断して娘と話をする気になりました。そして、これは子供たちのためにも教育や社会を良くするように開いている会なんだ、その子供のひとりがここにいる。いわゆる公私混同などという何とバカげたことばがあるんだろ

うと次の瞬間は思いました。そして黒板にいたずら書きをしている時は、笑って見る余裕もできました。長谷川公一さんも独身ながらあのようにおっしゃってくださったこと、とてもうれしいです。

しかし、それにつけても「子供は社会の子、人類の子」と言っても、それを唱えているのと実践とではいかに開きがあることだろう。

私は「私の娘があんなことしている、あんな風に人に言われた」と身を切る思いを何度もしました。もっと「社会の子」と割り切りたかったのに、誰かから「あの人の子が」とか思われ、言われるのはたまらないことだったのです。又やはり子供を隔離して保育しなかったのは「共に生きた」点でとてもプラスでしたが、マイクを持つ親のところに「お母さんお金ちょうだい」と子供が来て、冷や汗をかかない人がいるでしょうか。映画の時、うっとうしい子供を、笑って「社会の子」と思える人がどのくらいいるでしょうか、やっぱりどんな形でか保育の態勢が欲しかったと思います。

(静岡 梶原公子)

◆子連れ参加をめぐって、多くの方から声を

かけていただき、手をさしのべていただきま

した。若宮荘の懇親会では話題の一つにも取り上げられて、体験をまじえたあたたかい励ましの発言が相つぎました。子どもを寝かしつけに行っていて、その全部をお聞きできませんでした。今年保育の態勢がととのえられなかったために参加をあきらめた人も少なからずいたと思いますので、来年からは、ぜひ「大人と子どもが時間を共有する」ことができるかどうか、試みの第一歩を踏み出せるように、一年かけて準備をすすめたいと思います。こういう集まりで、保育室は「必要悪」といわれ、親は子に対してうるめたい思いを抱きながら連れて行っているのが現状かと思いますが、このたびの話し合いでは、この現状を打ち破る視点が生まれ、親ももて来意識を捨てて、積極的に共有できる時間を求めてプログラム作りすることも、Weならでできるのではないかと期待がふくらんできました。

昨年の合宿では、河原の芋煮会が、子どもにとっても忘れ難い思い出となりましたが、今年、この種の企画がなかったのは残念でした。来年からは復活してほしいと思います。

(東京 川名はつ子)

〈子連れでない参加者として〉

◆大人の集会に子供を出席させるかどうかということは、とても難しい問題だと思えます。シンポジウムの会場での梶原さんの娘さんの行動は、たしかにはほえましいものがありました。一方ではやはり不愉快とまではいなくても、これでいいのかなというところと、論に集中できなかったりしました。

最終日の総括の場で話題になった時、「子供擁護」の発言が、それも日ごろ子供とあまり接触のない男性から多く出て、意外でした。

結論から言いますと、やはり子供は別にすべきだと思います。なぜなら、これは大人の集会なのですから。大人の集会には大人の集会のルールというものがあります。そこに子供を無理に参加させることは、どうしても無理が生じてきます。

たしかに総括の場での発言にもあったように、「現実の子供」を見ることができたという点では大きな意味があるように思えますが、そのことと、「参加させる」ということは、直接の関係はありません。子供を「発見」したと感動した人は、日ごろ今までに子供を「見る」機会を持たなかったことを反省

こそすれ、だからといって常に大人の集会に子供を参加させるべきと考えるなら、それは問題のすりかえです。

大事なことは、まず子供の意見(参加したいか、したくないか)を聞くことです。もうひとつは、大人と子供が、大人の集会の中でいかにつきあうか(言いかえればしつけ、けじめ)の問題だろうと思います。

公衆の面前でおしめをかえたり、おしっこをさせたりして平気な親を見ると、いつも腹立たしい思いがします。親であることの厚顔さ、無神経さしか見ることができません。「子供は王様」という発想のチラツク考えは結局は子供を甘やかしているばかりでなく、親としてのだらしなさにも無批判になりがちです。親と子供がつき合う上で、やはり、しつけ(社会生活上のルール)を理解させるということは大事だと思います。

日本人はどうも子供に対して甘すぎるようです。そのことが子供をダメにすることに残念ながらWeの出席者も、十分には気づいていないようです。例えばアメリカならこんな議論ははじめから起こりえないでしょう。親がコンサートやパーティなど、大人の時間を持つ時、子供には必ずベビーシッター(専門家

でなくとも、親戚の人や隣近所の人であったりしますが、必ず子供の話し相手、遊び相手をつけ、堂々と大人の時間を楽しみます。こういうふうにして、「お父さんの時間」「お母さんの時間」あるいは「おとなの時間」というものを子供に理解させ、ひいては子供の親離れ・自立を促進させます。

総括の場で、男性の発言者に「子供を参加させる」ことに意味を見出したような意見が多かったのは、日ごろ子供の世界との接触があまりにもないということの裏返しにしかすぎず、だからといって子供を参加させるほうがよいという結論を導き出すには無理があります。

問題は単純なのです。子供を連れてきた参加者は他にもたくさんいましたが、梶原さん親子のあの場面だけに限っていえば、自分が梶原さんだったら、あるいは梶原さんの子供だったら、どうしてはしなかったか、という所からこそ問題をスタートさせるべきでしょう。当事者をほったらかしにしておいて、第三者としての「感動」を伝え、そこから結論を持ち出そうとするのは、いわば評論家の言にしかすぎません。日ごろ子育てに参加しない男の限界といわれても仕方がないのでは

ないでしょうか。

僕が梶原さんの立場だったら、やはりせっかくの自分の報告を、気を散らすことなく発表しなかったし、また聞いてほしかったと思います。たとえば、この時間だけでも、子供の相手をする誰かがいてくれないかと切実に思ったことでしょう。そして、僕が梶原さんの子供だったら、やはりお母さんはいつもずっと自分の方を向いてくれてほしいと思ったでしょう。そしてお母さんは大事なお仕事の中で、自分をかまってくれられないのだったら、せめて誰か他の人がかまってくれるか、それとも一緒に遊ぶ友達を探してくれればなあ、と思ったでしょう。ともかくたいくつなのはいいやだなあと。そこで、結論として僕の考えを述べておきましょう。

一、原則として託児室というか、子供の教室（又は部屋）を設ける

二、担当者（一緒に遊ぶ人）をできればつける。担当者は専門家（子供と一緒に遊ぶ、あるいは一日を過ごせる専門家）が好ましい

三、費用は、各自の親が負担するのではなく、集会全体で負担する

四、子供の教室に参加するか、大人の集会に参加するかは、子供の選択にまかせる

五、ただし、大人の集会に参加する場合はルールを守らせる（大人の集会と子供の教室を行ったり来たりするのは自由）

六、三日間のスケジュールの中に、たとえばわずかな時間でもいいから、子供と大人が一緒に何かができる時間を設ける

最後に、「託児の専門家」という問題に対して否定的な意見が会場を支配しましたが、専門家を否定しさえすればいいというような単純なことではないと思います。現実問題としては、上述のような意味での託児の専門家は必要だと思います。問題は、預けっぱなし、任せっぱなしにせずに、日ごろからみずからも子育てにかかわるといことですが、その時に、単に「専門家」を否定するということでは、理想論・原則論だけど、前に進みようがなく、現実には「素人」が「専門家」から学び教えられることによって「専門家」に近づき、また「専門家」もまた「素人」から学び教えられることによって近づくなかで、相互の距離を縮めるという関係性が必要です。従来のような「専門家」と「素人」が相互不可侵の形でタテにつながるのではなく、相互に浸透しあいながらヨコにつながるという形の中で、やはり「専門家」の存在は否定



しえないと思います(否定すべきは評論家の存在です)。

(兵庫 吉田清彦)

◆保育については「分離」でなく、同じ建物の中に別室をとり、幼児以上には楽しく遊ばせてくれるアルバイトの人(保母さんでなくでもいいのでは)を頼み、子供は遊び室はあるけど、会場にも出入り自由というようにしたらいいかでしょう。

(一参加者)

◆長谷川公一さんのWeの子連れ読者会に出席するうちに、それぞれの人間の思いがわかってきたという発言、非常に感激しました。そのことの解決をみんなで考えていく。私は何もできませんが、来年を期待いたします。

(兵庫 大村芳寿枝)

◆保育の問題がいろいろ出ました。いい解決法が見つかりそうな気がしました。子供をこの場からしめ出すというのはWeのめざすものと矛盾することになるでしょう。半田さんのご発言をうかがいながら、胸をなでおろしております。

Weも目標と現実の中で、たいへんなことと思いますが、どうか、Weの本意をまげること

のないようにがんばって下さい。とっても勉強になりました。楽しく充実した三日間でした。

(奈良 川口 香)

◆子供たちの三日間のために、保育の用意をやはりしたほうがよいと思います。Weの中にも子育ての習俗をつくり出してほしいと思います。もちろん、私たちが主体者としてつくり出すことが、斎藤さん、庄司さんの話とながると思います。

(一参加者)

◆託児についての意見、とてもよかったです。

(一参加者)

◆「保育」の問題がかなり討議されましたが、会場での雰囲気一面に偏り、それに對し異なる意見が出にくい状態にあったのはせつかくのWeとして残念な思いがいたしました。あの会場に連れてこられた「子の人権」という立場からの発言がみられず、好意的とはいえ、専ら「大人の立場」としての発言がみられた感じが多くありました。子は未だ判断力を持ち得ず、いわば大人の都合で行動を共にさせられます。保育者を設定できないWeの事情や子を連れずにおれない親の事情を考

えの時、ああした大人の会場に子連れで来るのは止むを得ないと思いますが、半田さんが指摘されたごとく、センターには設備があるのにもかかわらず、保育者をおかぬ行政の姿勢にこそ問題がありましよう(宿舍の冷蔵庫には何も入っておらず、そのくせ電気は使用されているのはいかにも日本のオカミという感じでした。ビールやジュースぐらい入れて少々ぐらい儲けてもよいのにと思います。何しろ夜は外出ができないのですから)。合宿に子連れで来るのは会場での発言以外に、親子の人生にとって大きな効用はあるうと思います。即ち、この時こそ「しつけ」の教育ができるチャンスであるからです。親たちが真剣に討議している姿を見るのも大きな力を子にもたらしましょうし、大人たちが話しあっている場には子どもは入れないものだというしつけのできる場になりましょう。子どもとは本来自己中心的なものですから、「してもよいこと」と「してはならぬこと」の区別を学習できる場をくらしの中に設け、人格形成をしていかないと、何でも与えられ、何でもきいてくれる親たちに育てられていては、その子が大人になった時、社会生活をするためのセルフ・コントロールができなくなりましよう。

(大阪 神崎房子)

# 「Weの会」 のつどい

ニコニコ山田則子さんの司会にのって、あつという間の30分。初めに顔出しした長谷川公一さんが、またもやしやべり、続いて十一個の読者会の顔見せと紹介をかねて一言。気恥ずかしげに楽しそうに、生活のにおいを漂わせての内容もあり、もりだくさんでした。

長谷川さんの話の中に、「家庭科の全国集会は、いつも紋切型でつまらない。それに比べて、読者会などでは、それぞれの生活の中からとても素直な意見が聞ける」というのがありました。全く同感です。今、家庭科研究大会に出席中ですが、とても違和感を感じます。会場をうめつくす参加者は、全員女の人。初めに祝辞をのべるため演壇に坐る来賓は、きちっと背広を着こんだ、少しくたびれ

た男たち。みな教育委員会、校長など肩書一杯のお歴々。えらい方たちは、こぞって家庭科の重要性を説きます。人は違うのに話される内容は、昨年の大会で聞いたのと同じ。

「がんばって下さい」と激励されるのですが、その内容たるや、10月号に小田さんが書かれた「まじめに、ひたすら明るい家庭、よりよい社会・教育をめざして……」にびったり当てはまり、しらけてしまうのです。初めにこの方たちに、ファンファーレを鳴らしてもらい、参加者は、うれしそうにパチパチ拍手して……もうそれはやめようヨといったくなってしまうのです。時代を憂い、このごろの子はと、生徒をおとしめ、自分は、それに加担せず、ちよつと上から見て、さもないことを教えてやり、立派な社会人・家庭人を育ててやろうなんて、もういいヨといったくなります(念のため、実践報告の中には、きらりと光るものもあり)。

フォーラムは、初めから違ってました。ひよいひよい身の軽そうな、頭も柔軟そうなおっちゃんや、男の若者もうろろる。入った途端、模造紙に色とりどりで書かれた「We」は、今ここにどう、83夏季フォーラムー新しい出会いの日ー1983.8.19,20,21」が歓迎。

楽しげにつくつてる様子が、目に浮かぶようです。さて始めると、決して上手といえないけれど、けん命にがんばる司会さん。合間に「弁当買って下さい」とひよっこり入ってくる人。ろうかといびの人(会場で話を聞けないほど忙しく、ろう下を行ったり来たりする人のこと)。たくさんの人が動いての準備・運営、そして息づかいが聞こえてきそうだったかみ。これが、「We」なのかなと思いついた。

ただの読者であり、東京より離れた所に居る私にとって、「We」の内容に共感するものの、それどまりでしかなく、ひよんなことから引き受けたこの記録でさえ、頭をかかえてました。全国版のきちつと製本された「We」に、少しでも載る人は、雲の上の存在でした。ところが、実際に参加してみると、「えっ、この人が○○さん？」と思うことが多かったのです。みんなただの人でした。とても生き生きした目をもった、あるいは、本音で生きていそうなただの人でした。

長らく、学校の中での私にとり、どのような組織も、一見、民主的外観を装いつつも、上より指令、下の者は手足でしかないという観念がありました。「We」も半田・馬場

という頭がいて、Weの会は、手足と、疑問を持たず考えていたのです。しかし、どうも様子が違うのです。私でも気軽に参加できそうだし、また、手足だけでなく、頭と手足をもった一人のひとが要求されているなあと。そしてそれが、大資本をバックにもため、地味ではあるが、人が息づく雑誌「We」を支えていくことにつながっているのではないかと思えたのです。

今までは、半田さんの編集する雑誌ということで「We」にひかれていたのですが、フォーラムをへて、それを支えているWeの会のメンバーに魅力を感じ始めてます。半田さんの力は大いけれど、Weはそれを超え始めていくようです。(記録・河上紀子)

### Weの輪をひろげよう!

あなたも「Weの会」の会員に

・——「Weの会」入会のご案内

◆「Weの会」って何ですか?

「Weの会」は「自立した男と女を、人間らしい生活を、差別のない社会を育み創り出す」ことをめざして創刊された月刊誌「新しい家庭科—We」とともに歩みます。

半田たつ子、馬場洋子の両名が「家庭科教育」の編集部を退かねばならなくなった際に、執筆者、愛読者、「家庭科の男女共修をすすめる会」の人びとが、「半田たつ子さんの新しい雑誌を支援する会」(81年十一月発足)を作りました。こうしたなかで生まれたWeの刊行が軌道にのるとともに、「支援する会」は「Weの会」として再発足しました。

「Weの会」は、各地でそれぞれ個性的な活動を行う地域の読者会とともに、「新しい家庭科—We」を支援していきます。

◆どのような活動を行っていますか?

「Weの会」の会員はこれまで、読者拡大、取扱い書店の拡大、月々の発送作業の中心となってきました。会全体では、ひろく問題を提起してきました。公開セミナー、フォーラムを企画・実行し(ウイ書房と共催)、また会員相互の交流を深め、地域の読者会と結んで「Weの会だより」(月刊)を発行しています。これらの集まりや「Weの会」の活動を紹介するために、VTRを製作したり、パンフレットなども発行しています。

◆どのように運営しているのですか?

会員のなかから世話人を選び、世話人会が会の活動を支えていきます。「Weの会の集い」

を年一回開き、基本的なことがらを決めます。◆どうすれば会員になれますか?

会の趣旨に共鳴される方ならどなたでも会員になれます。「Weの会だより」などの通信連絡費として会費をいただきます。現在年会費は一二〇〇円です。

あなたも「Weの会」の会員になって、Weの輪をひろげていきませんか?

申込先 〒182 東京都調布市西つじヶ丘二二五—一四 ウイ書房気付「Weの会」宛  
◆各地にWeの読者会が生まれています(連絡先)

山形 佐藤慶子 (0236・31・1421(内)2370)

埼玉 中嶋里美 (0429・42・7560)

東京・中野 増野潔 (03・385・2293)

武蔵野 山田則子 (0422・51・9461)

城北 蔡和美 (03・906・5839)

江東 松本法子 (03・682・6401)

神奈川・横浜南 皆川鎮枝 (045・781・0586)

横浜北 植垣一彦 (044・63・8853)

さがみ 山崎京子 (0427・54・1050)

湘南・三浦 塚越敏雄 (0467・31・0377)

川崎 安条いく (044・944・8779)

名古屋 宮崎世津子 (052・412・9583)

岐阜 尾藤操 (0582・71・7359)

# 懇親会

—宿舎で—

—若宮荘—

炎天下、婦人総合センターまでの通いは大変でしたが、松林に囲まれた宿舎の若宮荘では、窓からすぐ海が眺められ、落ち着いた雰囲気の中、全国各地から参加された方々が、交流と親睦を深めました。

一日目の夜は、少人数で、各自自己紹介をかねながら、どんな思いでフォーラムに参加したか、職場の様子など出し合いました。学校の厳しい状況はどこも同じで、生徒との信

頼関係がなかなか作れない、管理職とのぶつかりなど、教師の方が多かったため、学校を中心に話が多く語られました。

二日目も、昼間の疲れをものともせず、新しく参加された方を加えて、夜九時過ぎから懇親会がもたれました。つい最近、おつれあいの出産に立ち合っとても感動しましたとおっしゃった男の方、ご夫婦で参加された方、一市民の立場から、学校にどう関わって行けるかを考えているという方、職場ですり減り、Weの集まりに来れば元気が出ると思っでと仕事の後駆けつけたという方……。一通り話し終わったらもう十一時過ぎ。その中で二人の子供を連れて参加なさったKさんから、話も集中して聞けず、子供が騒いで皆さんにご迷惑をかけたという、何でもしてと情けない気持ちになったりしたけれど、本やおもちゃを子供に持って来て下さったり、代わりに見ているとあがるからと声をかけて下さる方がいらして、とてもありがたうれしかったというお話がありました。これには、自分も子供を小さい時から連れ歩き、誰れとも遊べて、小さい子の面倒を見るのが上手な子に育ったという体験談や、今を自分が納得のいくよう精一杯生きることが大切な

のだから、子供が大きくなったらではなくて、子供も一緒に出かける、そんな人が増えて行けば、少しずつ変わって行くのではという励ましなどがありました。

半田さんからは、「新しい家庭科—We」が限られた紙面の中で、全ての方のご期待・ご要望に応えることが出来ない、長く続けて行くことでそれをカバーして行きたい、視座を長くとって、人と人とのつながりの中で、確かに動いて行く、変わって行くことがあるのではないか、それを信じたい。かかわり、コミュニケーションが「We」の精神・宝であり、大切にしてゆきたいというお話がありました。そして、「家庭科」は未来を創るすばらしい学科であり、男女共修は男女差別をなくすためのベース、もっと広い視野に立つてやってほしいというご意見もありました。

話しは尽きず、十二時を過ぎて散会した後、二つ、三つと分かれて、語り合いました。今年も懇親会でも「固い」話が多くて、あそびがなかったとか、もっと女の問題や家庭、生活のことも話したかった……などなど、足りなかったところはいっぱいあったけれど、たくさんの方の新しい方や、懐かしい人と出会えた三日間でした。（東京 蔡 和美）

## ——ニュー向洋——

どうにかなるさ、Weの仲間だもの、と気楽な気持ちで迎えた懇親会。

さあ始めましょうという段階で、中嶋さんから「乾杯を」という助言をいただいた。そういえば、こういう場合には乾杯で始まるのが多いなあ……。不慣れなもので江東の会で乾杯の音頭をとってしまったが、これも白髪まじりの長老風の人によってもられればよかったかなと思った次第。「限られた時間なんだから、自分の持時間を守ろうよ」という吉田さんの提案。私たちはその時、時計ばかり気にしていたので、アリーグトーゴゼーマースと感謝。また、福田緑さんからは「私の存在が喫煙者に対して圧力となったのではないか」と心配しながらも、「フォーラムでは会場で喫煙する人がいなかった」と評価。タバコを喫う私自身、きれいな空気の中でビールを飲んだのも初めてだったが、次の日頭痛がしなかったのも初めてだった。

要するに、参加者一人一人に教えられて終わることのできた懇親会でした。ただ、フォーラム全体の流れを止めることなく、自然な形で一人一人にしゃべってもらおう。ホントは

そんな会にしたかったのデス。

二次会は、小グループで意気投合したのか十数名の集まりとなりました。その時の興味深い話をちよっと。

梶原 「つれあいはソフトボール部に夢中、家族の犠牲の上に成り立つというのには大いに疑問。」

小島 「僕も家事の分担がでなくて心苦しいが、落ちこぼれの生徒を助けるためには、従来とは違う新しい民主的な運動部の活動をやるわけにはいかない。」

中嶋 「それは、高校野球の狂熱ぶりとかが違うのか。一位めざしてというのなら同じではないか。どうして適当なところで勝負を降ろることができないのか。」（この議論、すれ違ったまま）

小島 「民主的に物事を運ぼうとすると、時間がかかって大変。」

佐々木 「全くその通り。でも、私は民主的という道をとらず“アナキー”で行きたいと思う。」

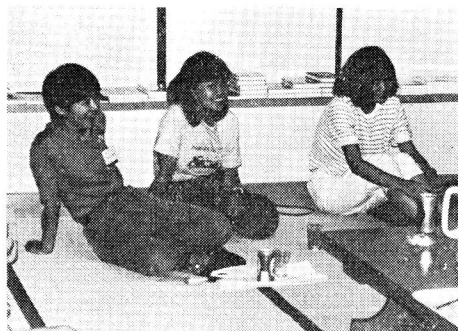
佐々木 「交通違反をしてつかまった子と一緒に

に、裁判での応対のしかたを考えているうち心が通ってきた。向かい合ってではなく、お互い肩を並べての関係が良かったのだと思う。

とび職志願の子がいて、とび職の腕は持っているものの、資格試験の勉強は歯が立たないと諦めようとしている。これもまたおかしいことだが、今のままでは設計ができなから頭にはなれないだろうなとも思う。」

それぞれの部屋ではどんな話が展開されていたのでしょうか。いずれにしても、少ない人数の輪で本音部分をサラケ出したものであったと思います。

（東京 松本法子）



# Weは新しい 出会いを得て



## ——参加者の感想——

〈フォーラムで得た「何か」〉

◆フォーラムは期待どおりでした。たくさんの人と出会えたと思います。また吉田さんの発言、斎藤さん、佐々木さんの話から、今まで教師らしい教師であろうとし、築いていたものが見事根底よりくずされた気がします。もうすぐ二学期です。私は今、とてもパニック状態です。

三日間するどい指摘をする市民二人の横に坐り常に私はゆれてました。吉田・神崎さんの発言はとても的をえていたし、まるで市民の顔をした自分がいました。しかし、私は教師らしい教師であろうとし、時間の許すかぎり職場にいて、そして家に帰るだけの毎日でした。市民としての私が完全にぬけ落ちたのです。授業が授業として成り立たぬクラスで、実力行使で授業をしようとしたとき、「おぼはん、何すんねん、さわらんといて」と言われました。ちょっと、ムカツとしましたが、今この子に「おぼはん」としか言われない自分を反省し、私がかんばればいずれ「先生」と言われる日が来るのだ、なんてけなげにも破れん恥にも思ったのです。この三日間の出会いをへて、私が今頭をかかえてる

のは、そこのおかしさに気づいたからです。なぜ「教師」が「ただのおぼはん」よりいいと思っただろうかということ。いい教師であろうという人より、市民や、いい教師を否定した人の方が心にひびく発言をしていたと思うのです。

生徒が「おぼはん」と呼んだのは大正解。それ以外の何者でもない。「ただのおぼはん」として、私は彼女たちに何が言えるか、何を一緒に考えていけるのか、そして世間の何を変えていけるか、だと今思います。そしてそのためには、私にとっては、まず市民としての自分をもつことだと思いました。でないと、教師としての加害者性を見ないで、見えないで、教師を続けていきそうだからです。

フォーラムの最終日、フォーラムで得たものの、得られなかったものとき、「この場合は教師と市民の交流をめざす」と誰かが言われました。私は「ちがう」と思います。まず自分が、市民でなければと……。

(兵庫にある私立女子校の教員 河上紀子)

◆教育斗争の模索中、が現在、考えていることです。自分の目指す方向は、独占資本に歪められ、その利益追求のために再編された現

在の教育を変革することですが、そのために何を今やらねばならぬのか？ それを考えつつ、このWeフォーラムに参加させていただきました。教育の制度―中身、それを変えていくための一歩は？

・講演、シンポ、他の人々の意見等を聞きながらですが……その方向は明確には未だなっていないのが本当のところですが、自分の労働現場に戻ってから、具体化してゆく糸口はつかめたと思います。

どうも大いに勉強になり、ありがとうございます。来年も参加させていただきます。

(静岡 武田憲幸)

◆夏季フォーラムに参加してはや一ヶ月、ほんの気まぐれで出かけて行った江の島の婦人総合センターで出会った「何か」を心の中であたためている人間がここにも一人いることを伝えたくて筆を取った次第。

いつもWeを向こう岸から読んでいると、その得体の知れぬ「ある種の美的感覚」においてきぼりにされているような気がしていたのだけれど、フォーラムに参加して、この運動に参加している人々が試行錯誤して捜している「何か」に少し触れられたように思った。

特に少数派であった男性の中に、かつているような市民運動に参加して、そこであきたらず、今、Weに何かを期待するように半身で参加している人々を見かけ、ああ自分だけではないのだと安心して。

フォーラムでの印象はというと、半田さんを中心ががんばっている人たちと、その活動に感動しながらもファンの域を出ない人々、そして自身の男性連中が不思議に入りまじり、教師でない者のとまどいをひきずりながら、家庭科教育を軸にあたりまえの生活を創って行こうとする仲間が、手持ちの材料でぎくしゃく、そして生き生きと集まっているなあと外部の人間ならではの無責任発言。

その中で自分が、ショックという形容詞を必要とする程の新鮮さを感じて帰って来た。何故そうなのか、今でもよく分からない。今まで参加して来た活動にはない「何か」を参加している一人一人に感じた。運動だからといってきんでない姿？ 肩を張らずに核心に迫って行く不思議さ？ 自分の日常からという地に足がついているところ？ あたりまえの生活の中の視角を大切にしている心？ 今は分からない。

熊本サークルの模擬授業はおもしろかった。

た。最初は発達心理学の講座みたいで、はたしてWeの視点に合致しているのかななどと思っていたら、「森の中にいた方がしあわせだったんじゃないか」という発言が出てうれしくなった。自分の好みでいうと「カマラ」とっての生活は「自分がアマラだったら」という視点は投げかけたかったところ。

児童相談所で働きながら、「赤ん坊から話しかけてもしようがない」と思っていたお母さんや、目の前に食べ物がたくさん入った冷蔵庫がありながら、何も食わずに何日も母親の帰りを待っていた子などに会うたびにどこかにあたりまえの生活をするのを置き忘れて来たのではないかと頭をかかえ、家事、育児、労働、経済面での平等を求めてやって来た連れあいの別居生活にいきづまっている僕としては、フォーラムで触れた「何か」にひかれていた。

Weの人たちにその「何か」をもっともって育てて行ってもらいたい。自分もとりいながら「何か」を捜し続け、そしてWeともかわれるところを求めて行きたいと思っている。

(東京 内村章一郎)

へ人と人がふれ合うこと、話し合うこと、討論すること」

◆こうした会にはどうしても「単種」の人間が多く集まりやすくなる現状に、私はいつも民主主義の「未熟さ」を感じます。とはいいいながらも、その割には家庭科以外の人の参加の割合が多かったのは驚きでした。願わくば一般市民（特にPTA会員になれぬ）、学生（高校生も）、現役のトオトちゃん（働き奴、無関心派）などの参加があったら、もっとおもしろいなアと思いました。PTAへの呼びかけがだめなら、私も「ひとり歩きの会」のような一見無関係と思われる会（小さいのがたくさんあります）に呼びかけてみるのも一案と思います。ただし家庭科の先生に呼びかける文章と同じでは、関係ないと思われるので「生活」を前面に押し出し、社会変化の激しいこれからの世の中に生き延び、人生をエンジョイするために、少々危機感を加えても、彼らをつれ出す方法を考える必要がありますでしょう。

日本のPTAの多くは、教師と親が中心で子を持たぬ地域の大人たちの参加がありません。子があっても、子が学校から離れると、大人も共に離れてしまいます。子は「私物」

かと考えさせられますが、いうまでもなく、子は親と教師だけで育てられるのではなく、むしろ数の多さでいえば、赤の他人の見守りや参加で発達していきます。彼らは、親や教師が見落としている部分を持っており、決して彼らの力を無視できません。

子は社会全体の財産とは、よく口では言いますが、それが実感にならぬのは、親にも教師にも「子」は「親の私物」感が抜けきらぬからではないでしょうか。親と教師だけの視点から、「社会の親たち」の視点が加わることで子の人権は広く明るく展開するのではと思うのですが……。

（大阪 神崎房子）

◆参加者が百五十名前後もいて、討論するのは困難なので、いくつかテーマ別分科会に分けて、議論を深めてはどうか。

講演会はW以外の場でも聞けるし、本を読んでもさして変わらない。それよりは、模擬授業や討論会・交流会を中心にすえてはどうか。

フォーラム参加者の発言を聞いて「人間らしい・ほんものの・共に生きて・自立」などの抽象語が飛びかっているが、それが具体的にどういうことなのか、各人がおさえ、それ

を共有化した上で話しているのかどうか、疑問を感じた。何となくわかった気になってしまっただけで、有効な（敵対的）議論が起これにくい。美しい漠然としたイメージに皆でひたっているだけだとしたら、非常にまずいと思う。

（東京 和田康子）

◆私がフォーラムで一番印象に残ったのは、教師に対するイラ立ちぶりを示した方のことです。斎藤次郎さんのお話の中にもあったように、その方は教師に対して厚い壁をお持ちのようで、たしかに批判されるところは私たちにもあるのですが、そのおっしゃり方がとてもグサツとききました。そういう気持ですべて教師をながめていたら、見える暖かいものまで自分で見えなくしてしまっていないかと思いました。

私たちも、他人に対してどうしても固定概念というものが、ぬぐってもぬぐっても植えつけられてしまっただけで、「良い」と思う人がやった行為と、「良くない」と思う人がやった全く同じような行為とを、正反対に解釈してしまふ危険があると思います。そんな距離をどうまとめていったらいいのだろう……と重い宿題をしょってしまいました。



一方で、二日目の懇親会の後で、話の中心的な役割を持ちながらも、常に本音で語られないことにイライラしました。佐々木賢さんは、その方に変えていいにつき合われて、決して投げ出されなかったのは、そういう姿勢こそが定時制高校の中でつちかわれてきた大切なものではないか、という気がしたのです。

自分とは合わない、話すのはもうウンザリと相手との関係を切り捨ててしまうことが、実生活ではどうしても出てきますが、教育の中ではそういうことはできませんよね。でも実生活でしてしまっていることを、教育の中でだけうまくしなくてすまされるのだろうか、と考えると、もちろん答は「ノウ」なんです。すると先に書いた人への距離や、後に書いた人へのイラ立ちを感じてしまった自分は、すでに教室の子どもたちにも、そういう接し方をしてしまっていることの現れではないのか……？ と、苦しいつきつかけをされているわけです。答はすぐには出そうもありませんが、考えていかなければならないことです。

タバコのことに関して大変協力的な方が多くてうれしく思いました。私がいるからでは

なく、小さな人もいて、おなかの大きい人もいて、又何とも思わない人もいて、でも、みんなが集う場では禁煙ということがもつとハッキリ、はじめから出されていると良かったなアと思いました。タバコをがまんして下さった方々へ心から感謝をこめて……。

(東京 福田 緑)

◆もつと多くの人と話し合いたいと思った。そのためにも、半日は分科会を設けて、そうした時間をつくる必要がある。

二〇日夜、ニュー向洋の夕食後、部屋で二十四歳のいわゆる「結婚適齢期」親の結婚強制にどう対処するかの見解交換をして、実に楽しかった。若い人の質問―特別なタレントを持つているわけではなく、又有名人でもない女が、自分の人生を、自分に適したように生きることを、どのようにして親に納得させたらよいのか。私の答え―新しい生き方をするために、自分一人だけで考えるのではなくWeのフォーラム、その他のグループに参加したり、講演を聞いたり、本を読んだりして新しいエネルギーを獲得しながら力をつけていくことが必要。

(埼玉 中嶋里美)

◆盛りだくさん過ぎて、深くつつこんだという印象が少なかつたように思う。次回からはテーマ別分科会を一緒に設けたらベターなのではないか。

顔を見て話し合えるという絶好のチャンスをあまり上手に生かせなかつたように思います。もつと誰もが本音を発言できるチャンスをつけてほしい。

主婦として参加した私には、家庭科の先生が、どういう目的で、何を求めてこのフォーラムに参加しているのかつかめなくて、何か発言するのにな一抹の遠慮があつて、本音にはもう一歩といった感じになつてしまつたのです。

イロイロ、ケチをつけましたが、Weの集まりに出ると、日常生活では話しても相手に通じない話題が大いに通じる(問題意識のあり方に共通点がある)ので、ホツとして、あーあ来てよかった、と思つて帰るのです。準備・進行にかかわつた皆さん、どうもご苦労さま、お疲れさまでした。ありがとうございます。

(東京 蔵合里子)

◆話したいことはたくさんあつたのですが、どの場で話したらよいのか、多く出た発言が

あまりに豊富な内容を含んでいたため、悩んでしまいました。自己紹介が延々と続く実態から、いかに参加者が「話をする」ということに飢えているか、胸が痛みます。

来年からは、①参加者がレポートを持って参加する ②自己紹介はプリントで行う ③討論は分散会形式で行う などのことを考えてみたいかがでしようか。

ともあれ、Weの仲間がこんなにたくさんいて、一緒に二泊三日を過ごすなかで、講演やシンポジウム、授業、映画とともに、その触れ合いがとても勉強になりました。

(新潟 高橋素子)

◆フォーラムには二日目夕方からの参加で、講演やシンポジウムなど、ほとんど欠席してしまい、とても残念だったのですが、夜の懇親会だけでも、本当に來た甲斐がありました。講演方式も、講師のかた次第ではとても魅力的なのですが、どこか「授業」を受けているような、著作を読むことで代行できる部分があって、それに対して話し合いや討論の場（とくに少人数）では、もっと全人格がバァツと出るような感じがあって、こわいけれどもおもしろい。

反省会などで、相手の反応おかまいなしに延々としゃべり続ける先生方あり、熱心で善意あふる先生らしいのに、他人の話が全然聞けない人ありで、「聞き上手」であることの必要性、あのときほど感じたことありませんでした。その意味で、佐々木賢さんの対話のしかたはすごいな、達人の城だなアと感心してしまいました（急いで『学校非行』買いに、本屋に走りました。とても読みごたえがありました）。福田三津夫さんの借りものがない、「自分のことば」でしか語らない潔癖さも印象に残りました。そのほかいろいろの方たちとのすばらしい出会いがあって、いまでも（忘れっぽい私には珍しく）印象が鮮烈です。

それから「託児」のことで思いついたのですが、どうも見渡したところ、小学生のお子さんをお持ちの方がたくさんいらしたように記憶しています。もしも人数がかなり集まるようでしたら、参加者の子供対象に「公開授業」をするのはいかがでしょうか。一日目の公開授業、私はおりませんでしたので、いいかげんな推測なのですが、おとなを対象に授業をしたのがまずかったのでは、という気がします。どうしても知識がふえるに従っ

て、新鮮な驚きが消えてゆく傾向があるので……。私も自分の子供にぜひ体験させてみたい!!

もうひとつ、もっとリラックスした小集団の討論ないし話し合いの場をふやしたら、子連れ参加者の負担も軽くなると思うのです。私もチビを連れて、区の母親学級に出かけているのですが、シーンと静まる講演のときは子供を黙らせ、じっとさせようとしてヒヤヒヤしますが、ワイワイ話し合っているときは子供の存在がそんなに気にならないのです。

(東京 稲邑恭子)

〈大学生は〉

◆私がWeを読み始めたのはこの四月から、それに親という立場でもないし、教師という立場でもないという状態でこのフォーラムに参加したのは、普段と違う環境に出て、多くの人にふれてみたい、自分を鍛えたかったというのが一番大きな理由です。私は、教育大学で中学校課程の家庭科を専攻している中で、高校までに私がもっていた家庭に対する考え方が大きく変わりました。ああ、家庭っておもしろい教科なんだと思うようになったのです。しかし、高校までの家庭科がつまらな

ったのは事実です。どうしておもしろいはずの家庭があんなつまらなかったのだろう？授業の形態が悪かったからじゃないだろうか。もし、私が家庭の教師になれるんなら、私がならって来た家庭とちがう授業を作りあげていきたいという思いを持つようになりました。そこで出会ったのがWe。そして、現代

の家庭科の実情に実際に接触できるのが、この'83夏季フォーラムじゃないだろうかという結論に達したのです。これが、この会に出会った二番目の理由です。何の基盤もない私はたくさん意見が飛びかうなか、ただ、ただ耳を傾けるだけ。内容を理解するだけで精一杯。いえ理解しきれない部分も多くありました。人の意見に対して、自分の意見をぶつけることができない未熟さがはがゆくありましたが、反面非常に刺激になりました。また、

「ああ、家庭科は変わっている。動いている」というのをはで感じることができたのはたはいへんうれしかったです。

教師は言うこととやることが矛盾しているというのを、この会の中、耳にしましたが、それは教師に限らないと思います。個人がそれぞれ自分の葛藤と闘って悩んでいるんだと思います。そのギャップというのは、完全

に埋められないかもしれないかもしれませんが、少しはその幅を縮めることはできるんじゃないかと思ってます。（一参加者）

#### 〈アメリカから一時帰国、参加して〉

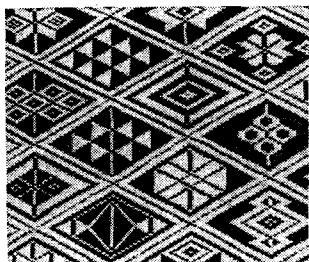
◆日本の教育は、聞き及ぶところでは、ただただオドロオドロしくて、何年か後に帰国する際のことを考えますと、とても不安になります。でも、今回のフォーラムで、こんなによい先生方もいらつしやるとわかって、少し安心しました。

息子たちが、もし日本の学校に適應できなかったら、学校というものには行かせず、私が「新しい学校」を作ってあげればいい、と思っていたのですが、それではあまりに問題を「私的」に解決してしまつてよくないのではないか。「公」教育の中で、いろいろな方と連帯して解決すべきなのは、と思い始めました。今の私の関心事は、いわゆる海外帰国子女の適應ということなのですが、学校問題を一口で言ったら、すべて「不適応」の問題に思えますので……。

今にきつと、学校が家庭になって、家庭が学校になる時代が来ると思います。現在は、両方とも、ぶちこわされつつあります。アメ

リカにいと、特にこう思えます——このぶちこわしは、新しいことの始まりなのだ、と……。（ニューヨーク 大西麻里子）






## EDITOR'S NOTE

◆転勤生活の中で幼稚園六つ、小学校六つ、中学、高校一つずつ、計十四の学校と数えきれない先生方との出会いがあった。私の学校不信の元となったのは国立幼稚園の選抜方法である。歳末のくじ引きよろしく赤白の玉の出具合が一次選抜。立会人は前園長。これを密室で行う。理由は教育的配慮だそうです。二次選抜では子供の能力を。合格発表は時間を決めて名前を貼り出し、おまけに合格者は中にどうぞ。他はバイバイ。矛盾を感じないのか、バカにしているのか。中に残った私は何日かの後、名簿を見た。大学関係者の子は指定席、そんな気がしたのです。私立ならいざ知らず国立は機会均等を最優先にすべきだと思うのです。安いのですから。(中野)

◆「新しい家庭科―We」最初の増刊号をお送り致します。  
◆編集作業の中で、夏季フォーラム当日の熱い思いとは別の高まりを感じます。「この増刊号は、まさに、フォーラム参加者によって作られたもの!」と。  
講師の方々からの様々な問題提起を受け、参加者が自分の声で新たな問題を投げかけているのです。  
◆この増刊号をきっかけに色々な出会いを引きおこし、その場で、さらに語り続けていただければ幸いです。庄司先生のことわざではありますが、「百人寄るより、三人寄せ」。  
◆感想などのお名前の一部わからない方々があり、申し訳ありませんが「一参加者」とさせていただきますし

♥学校について、家庭・家族について、語り合いたい人々がつどった三日間。考え方は様々でも、熱い思いは同じ。ご期待に応えようとの盛りだくさんのメニューは、語る時間を制限してしまったかもしれませんが。その價いの気持ちから、できるだけ大勢の方の感想を載せました。でも頁の制約から予定の $\frac{1}{2}$ になってしまったことが残念です。この一冊を私たちの財産にして積み残しの課題は、84年春の公開セミナーに、夏のフォーラムに引き継いでいきたいと思います。  
♥フォーラムは数十名の方々の献身的なお力で運営されました。テープ起こしのしんどい作業に取り組んで下さった方々のおかげで、この一冊を世に送ります。ありがとうございます!(半田)

新しい家庭科― 

Vol. 2 No. 9 1983年12月20日発行  
¥700

編集兼発行人/半田たつ子

発行所/(有)ウイ書房

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14

☎03(326)1380 振替 東京6-59867

印刷所/(有)岩佐印刷所 〒112文京区春日1-6-7

まだ解明されていない美

それが人間関係の美

だといふ

ある不幸な事件を

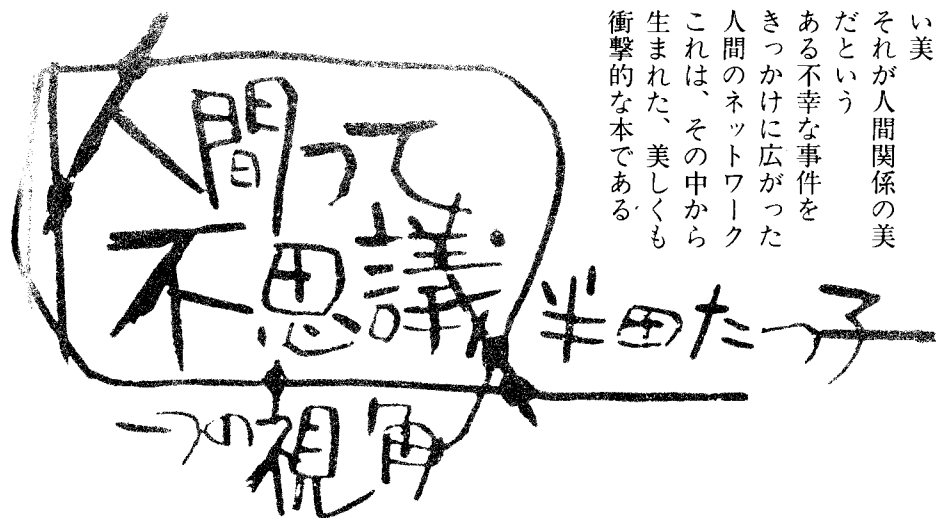
きっかけに広がった

人間のネットワーク

これは、その中から

生まれた、美しくも

衝撃的な本である



46判344ページ 定価1,500円 送料300円

ご注文は、最寄りの書店に。(地方小出版流通センター扱)  
ウィ書房に直接お申し込みの場合は、送料をお添え  
の上振替で。(書名明記)



●著者の人間関係のきめの細い  
心のこもった紡ぎかたを見る  
時「人間って不思議」と感嘆せ  
ざるをえないことの意味が鮮  
明になる。

●人間を見るこの「一つの視角」  
が、力強く確かな視角である  
ことは間違いない。

●小学校で調理や裁縫を習って  
大変面白かったのに、中学校  
になるとどうして習わないの  
だろうという中学男子の素朴  
な疑問の声などを紹介し、家  
庭科必修の必要性を唱える。

「朝日新聞」



人間らしい生活  
いきいきした教育  
差別のない社会を  
志す人の雑誌

新しい家庭科

“We”の読者になりませんか “We”の仲間になりませんか  
“We”を創っていきませんか

3年目を迎え、Weは、4月号から増頁し、価格を年間6,000円(含増刊号)にします。

Weの読者は、家庭科って、ほんとうはこんなに奥深い大切な教科だったの？

とびつくり。今の教育の閉塞状況をつき破る力を潜めているからでしょう。

We

のウィ書房 〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14  
☎03(326)1380 振替 東京 6-59867

## 本書に寄せる各氏の言葉

●女性の解放、人間の解放という普遍的なテーマを、こんなに  
も日常に則して、平易な言葉で語った本はなかった。

奥田暁子氏「A A C W ニュースレター」

●全編を通して、著者の誠実で真面目な人柄が感じられるだけ  
でなく、様々なかつとうや苦勞もまた身にしみて感じられる。  
同じようなおもいをもつ人々の輪を、この本と共にぜひ強く、  
広くしていきたいものである。

●たたかう女は荒くれた女でなく、しつとりと細やかな、語の  
最もよい意味における女でありうることを、この  
作品は私たちに知らせてくれる。

田中喜美子氏「W i r e」

●どんな困難を前にしても半田さんのように「人間って不思議」  
と言い続けられれば、そんな  
勇気を与えてくれる本だ。

「共同通信」

野村康子氏「図書新聞」

柏谷佐和子氏「灯台」